3/14
345

0054539000

0054539-000

特２３８－４５

和歌山県俚謡集

和歌山県女子師範学校

昭和１１

AID

特238
45

鄉土研究 第二輯

和歌山縣俚謠集

發行所寄贈本

昭和十二年五月 帝國圖書館 寄贈

緒言

一、この俚謠集は、本校生徒出身各地方の俚謠を集めたものであります。

一、排列の順序は、雜の部と子供歌を最後にした外は別に理由はありませんが、一種類の中では五十音順によりました。

一、假名遣はつとめて歴史的假名遣によりましたが、方言が多い上に、その轉訛が甚しく、意味の不明なものもあるため、やむを得ず表音的になつてゐるものもあります。

一、方言の意味の非常にわかりにくいものは欄外に註をしましたが、大部分は「和歌山縣方言」を參照して頂くこととして註を附することをやめました。

一、これだけが純粹の本縣俚謠であるかその限界をつけることは、極めて困難でありますので、他府縣の俚謠に類似のものも多いこと、思はれますし、郡別も彼此混淆して居りますから大体であります。

一、俚謠の性質として歌詞の猥褻なものが多く、それらは全部省きました。

一、これは甚だ不完全なものでありますので大方の御示教を仰いで完成したいと願つて居ります。

昭和十一年三月

目次

草取唄……一
植物に關する唄……九
七夕祭唄……一二
祭典唄……一五
貴志の大飯神事の唄……一三
長持の唄……一四
餅つきうた……一五
粉ひきうた……一六
砧うちのうた……一七
伊勢音頭……一八
機唄……一九
蜜柑取唄……二二
徴兵檢査……二三
置の唄……二四

子守唄……二六
雨乞踊唄……四七
盆踊唄……六六
地方に關係を有するもの……八〇
田植唄……一〇二
船頭唄……一一
麥打唄……一一五
臼挽唄……一二〇
親子唄……一二四
米搗の唄……一二七
木挽唄……一二九
地搗唄……一三一
夫婦の唄……一三三
石突唄……一三四
雜の部……一三五
子供の歌……一四九

草取歌

あがら行とらえ　お寺の長者様

小梅小櫻枝折りに　（東）大島

あのこよい子ぢや　よいきのよ　の子ぢや　あの子育てた親見たい　（那）

のひもせんだか　遠江灘で　おもひほりやけのたる船に　（東）

雨あらて事や水を　名がいとあわぎ　落つれば同じ谷の水　（東）大島

雨が降りても身がぬれやせぬ　殿のなさけを傘にきる　（東）大島

雨の降る夜は行こより底ましよ　ぬれておかごに立つよりも　（東）

雨の降る夜ははだかでおいで　内にかけゆく白浴衣　（東）

雨よ降れ〳〵十三年降れ　あれもそのまに年があく　（東）

雨よ降れ〳〵川水たまれ　此の子流して身をらくに　（東）

いたら見てこい大阪の城を　天守はなけれど櫓は九つ　屋根の瓦はほん磨き　内堀外堀藥研堀　裏へ廻れば十露盤もかけてある　誰が工面でかけたのぢや　前はあじ川船はつく。（東）

ナギ
ヒラメ（草の名）

いたら見てこい名古屋の城を　金のしやちほこ雨ざらし　（東）
行たらみてこら田の草取を　なぎやひらめの草ばかり　（有）
いとけないわよ此の田の草を　心なごもてなぎの草　（那）
いとし殿御は五反田で獨り　姑なければとりてやろ　（那）
暇とりてのほうかいりんき　長の日やけで苦にならん　（那）丸柄
命ほしけりや樹とれおやぢこゝは富田の一ノせぢや　（東）
嫌な野郎奴にセンブリ喰はせ　あかべ溺れて舌を出す　（東）
色は黑ても　淺草海苔は　白いおまゝの肌にそふ　（東）大島
歌は理でつむ布をさでつむ　大島港は舟でつむ　（東）大島
梅の匂を櫻に持たせ　親の心を子に持たせ　まことゝいふならわしやいつまでも　柳新葉の枯れる
まで　（東）
沖のかもめに沖晴とへば　私は立つ鳥波に問へ　（日）

親と親との約束なれば　親父行て添へわしや嫌ぢや　（東）大島
かけば泥つくかゝねばかゆい　兩手で足らぬ田草取　（那）
鰹になりたや岬の沖で　さまの釣くてだかれよものを　（東）
かはすまいぞよ　かはらすまいぞ　梅は櫻にかはるとも　（海）
切れたとてなぜその樣に身を落し　島田に結ふ髪持ちながら　藁で束ねたつげのくし　（東）
草の種とて蒔きおきやせんが　生えるものかよこれ程も　（伊）
草はとりよいおもだかなけは　手からもれるは　ほりの草　（那）
草をとるかよ五反田の草を　心長うとれなぎの草　（海・東）
今年はじめて田の草取れば　手からもれるはなけの草　（海）
今年よの　つばの鳥　何を持ちてござりたよ　桝とも斗かき添へ　俵もちてござりたよ　（東）
此の苗のとりよさは　誰が蒔きはこぼしたか　君樣のおと息子　蒔きこぼしたか（東）
この苗を押し上げて　いなご何處で棲もによ椎　すゝき　なぎの桑　（東）

七十五里なら磁石をたより　三十五里ならとばたより　（東）
七里のおはまの灘越す時に　親に是非ない妻懸し　（東）
新宮河原で晝寢をすれば　あゆの瀬上り夢見ると　（東）
死んで又來るお釋迦の身なら　腹の立つ時や死んで見る　（東）大島
好きなお方は妻子はあるし　ごうせ添はれぬ身を持ちながら　案じ暮すよ私の未練　（東）
角力とりさんに貸した金なら　あひるに卵　かやす心は更にない　更にないとはいふけれど鷄にた
のんでかやします　（東）
煙草吸ひつけ差し出す目元　吾子ながらもしほらしや　（東）
忠といふ字を分解すれば　口に辛棒した心　（東）
ついて行きたい免狀はとれぬ　神戸波止場で泣きわかれ　（東）大島
つとめつらさに出て山見れば　靄のかゝらぬ山はない　（東）大島
辛い〳〵と思たら辛い　何のこれはと思やすむ　（東）大島

蝶々は（や）鳥なら蜻蛉も鳥ぢや　島のたこ等は人間なれど　蝶々蜻蛉は鳥ぢやない　（東）大島
とろり〳〵とまはるは淀の　淀の川瀬の水車　（有）
とろり〳〵とよく出た唄は　今は出ません世につれて　（有）
泣いた涙は寢莫蓙にたまる　あてた枕は流れ浮く　（東）大島
なぎの草ならとりよいけれど　取られませなよ　りむらさき　（那）
苗を取るならごなべに取るな　思ふ殿御は苗持ちよ　（那）
那智のお山の千重（ヨ）の椿　花は千咲く實は一つ　花は千咲いて實は一つなら　九百九十九はあだ花ぢ
や　（東）
那智へ參れば土産をたのむ　那智のお山の銀杏の實を　（東）
夏の草取りえらい樣で樂ぢや　樣よえらかろ夏の旅　（那）
夏の田の草もやいがよいや　とのゝもやいよこりやわしや嫌よ　（那）
夏の田の草うけ（イクラと賃銀をきめて請負ふこと）とりまして　殿さんに酒代（テ）を儲けてやろ　（那）

えらい（苦しい）

夏の田の草　えらいよ殿さ　殿ちえらかろ　夏山は　（那）

苗とりはいぢごをもるか　その苗　手苗と腰をのす　（東）北山村

憎い姑を苞に入れて流せ　姑流れて苞殘れ　（東）大島

憎い繊子に草取させて　可愛いわが子に晝寢さす　（東）

西山の草刈り　百合の花が咲いたかよ　咲いたよこがれたよ　そばの木まで咲いた　（東）

主に半分傘きせて　急ぎ用でも廻り道　（東）

主の唐行きの白衣を縫へば　涙濕つて糸まけん　（海）

猫は鼠取る　たか雀取る　今の若衆は娘とる　（東）

橋をかけるにやいと易けれど　お客御馳走に橋渡し　（那）

早くこの田の草取りしもて　左團扇で見て通る

春雨程降りしのばせて　今は秋田の落し水　主はする墨私は硯　こうくするのも主次第　（海）

一人とらうか　五反田の草を　心ながうとれなげのくさ　（那）

しもて（終つて）

こうく（濃く）

一人とるかよ五反田の草を　氣長うとりよしなぎの草　（那）

一人とるかよ五反田の草を　腰の痛さや日の永さ　（東）大島

一人山田で田の草取れば　雉子の子も鳴く我も泣く　（伊）

一人山道淋してならぬ　聲をかけくれ　ほとゝぎす　（那）丸柄

晝は人目にまぎれて暮す　夜は鈴虫なき暮す　（東）大島

船にのるともだいをはいやぢや　いやよだいをの潮かゝり　（東）

船は一ぱいくりや帆が走る　宿の娘は出てまねく　（東）大島

船は艪でゆく　太鼓はぶちで　三味は象牙のばちでなる　（東）

盆が來たとて蜻蛉がをごる　蟬は松の木で音頭とる　（東）大島

まゝにならぬと氣をもむ人に　まゝになる身を持たせたい　（那）

まゝになるなら　トユ竹かけて　水に便りを流したい　（東）大島

鯉よいとこ朝日をうけて　東風の入れ吹きそよ〳〵と　（東）大島

とりよし（とりなさい）

ぶち（鞭）

向ふなる桐の木に　戀の鳥がとまりたよ　はてやれ戀の鳥みれば　戀のまよ鳥や　（東）
向ふなる小寺では　何故に鐘をつかない　鐘をば質におき　テンテランの手拍子　（東）
娘とるかよ五反田の草を　心長うとれなけの草　（那）
もうまた晝かよ寺子もあがる　野上ねつねん寺の鐘がなる　（那）
山で伐る木は澤山にあれど　思ひ切る氣は更にない　（東）大島
嫁よよう聞け　嫁こそよけれ　娘や他國の人の子や　（東）大島
私歌すきよ聲さへつゞけば　朝の出日から入日まで　（海）
わしの殿御は板一枚の　下は地獄の上に住む　（東）
わしら山へ行きやイバラがとめる　イバラとめるな日が暮れる　（東）大島
私や苗ようとる　昇り苗によう取る　私や笠よう着る　阿彌陀笠ようきる　（那）
女聲する日高の川で　私呼ぶのも清姫ぢや　わたし安珍清姫嫌で　夜ぬけさんすか日高川　（東）
慰問袋に私の心　入れて戰地に送りたい　（東）大島

植物に關する謠

朝咲いて四つに萎れる朝顔の花　垣にもたれて思案する　（海）
朝は朝日に夜は月影に　拜む先祖のうゑた松　（海）
芦のそよぎに飛び立つ鷗　今日は何處に假の宿　行かう行かんしよら深山の奥へ　深山つゝじの枝
折りに　（海）
一はたいまの糸かけ櫻　奈良の都の八重櫻　（那）
内のお脊戸に水仙柳　錢の花咲く小判なる　（那）
梅のかをりを櫻に持たせ　柳の枝に咲かせたい　（海）
梅の小枝に螢の蓑寢　花の散るのを夢に見た　（有）
梅は八重咲く櫻は七重　なぜに撫子花一重　（海）
落ちる木の葉は連にはなるな　ひとり山道や連要らぬ　（那）

思ひきたのに白梅さいて　客やうひぐす來てとまる　（海）
俺はこの田の植付の稗　秋は穗に出て笑はれた　（海）
俺は旅の者旅他處のもの　岩に下り藤たよりない　（海）
岩に下り藤や横にもはふが　岩に粘松たよりない　（海）
きれうはよくてもわしやほけの花　神や佛に嫌はれる　（海）
此の田には朝日を植ゑて　朝日の米は千本さかえる　（那）
米のなる木は知らんではない　早稻やおくての苗知らぬ　（那）
戀しなつかしわが故里の　松はみえますほのぐ〳〵と　（海）
咲いてほたんと云はれるよりも　散つて櫻といはれたい　（海）
櫻三月あやめは五月　菊は九月の中頃よ　（那）
櫻三月あやめは五月　四季の土用にさくかきつばた　（那）
小さい時から栗の木育ち　くりもくりぢやしやべくりぢや　（那）

きばれ（がまんせよ）

泣くななげくな　菜をくてきばれ　一日に三升の米くはそ　（那）
なさけないぞよ師走に咲いて　霜にうたれる梅の花　（那）
花がさいたら實がなると云ふけれど　すゝきや穗に出てみのりやせぬ　（海）
花のさかりをお前でしもた　いつは花やらさかりやら　（海）
花のさかりをくひとめられて　しんにさく花枝にさく　（海）
春風に庭にほころぶ梅の花　鶯とまれやあの枝に　そちがさへづりや梅がもの云ふ　（海）
昔思へば花紫の　枝の行方がなつかしい　（有）
むくげの花は二度咲けど　るりのお花はまだ咲かぬ　（東）
めでたいものは枇杷の花　秋花咲いて冬ごもり　春は黄金の鈴こなり　（東）
めでた〳〵の若松樣よ　枝も榮えりや葉もしげる　（海、東）
山で赤いはつゝじに椿　咲いて下るは藤の花　（海）
山で生れて他國の人に　涙流さすこの山葵　（伊）

山で床とりや木の根が枕　おちる木の葉は夜着となる　（伊）

大和櫻を世界に植ゑて　富士の高嶺で眺めたい　（海）

早稲は三石なかては九石　なぜにおくては十二石　（海）

私や若竹おう〳〵のびる　伸びて御族の竿となる　（海）

坊主頭に金柑のせて　のるかのらぬかのせてみよ　（東）下里町

七夕祭唄

おばばどこへ行く　一升樽二升樽三升樽下げて嫁の在所　お婆さん　ヨウキタ　お茶出せ火出せ
アラ　孫だきによ　（東）下里町

高い山から谷底見れば　狐や狸でもあつたのかい（イエィエさうぢやない）　瓜や茄子の花盛り
（東）下里町

高い山からにぎりめしこかすよ　鳥ころこぶ犬ほえるよ　アラドン〳〵コラドン〳〵　（東）下里町

高い山から低い山みればよ　低い山の方がホラ低かつたよ　（東）下里町

年に一度の七夕さまは　川をへだてゝ想をする

祭典唄

（東）下里町

天照皇大神宮　八幡大菩薩　神明社　座摩の宮生玉北向　八幡宮　難波の午頭天王　高津の仁德天
皇十日に笑みたまへ　金比羅御靈の天狗みて　おーおーおー　おおおー　とんさんこんさん　お稲
荷さん　ちつ御舞目出度うトントコ住吉大神宮　ちちんちんちん　れいはう　はしごぞり　雷太鼓
を釣瓶うち　前髪は鷹をすぇ　塗笠お山に藤の花　座頭の褌を犬奴がくはへまする　杖をばふーり
あけて　荒氣の鬼も法化して　鐘撞木　瓢箪　鯰でおさへましよ　ちつ　奴の行列　牛若　辨慶
橋の上　（東）下里町

貴志の大飯神事の歌

サァエイ〳〵
めでた〳〵三つ重なりて
ヨウヨッコラヨイ

末はつるかめヨーイ五葉の松エイ〳〵
サアエイ〳〵
ヨーイトコセエエノヨイイヤナー
アーエイ〳〵

（那賀郡）

長持の唄

梅に霞薄に螢　松に白鷺粋なもの　（日）
お伊勢の樣なあらたな神に　何故に宮川橋かけぬ　（日）
お家大黒はやせよゑびす　大家繁昌の願を出せ　（海）
金の橋でも架けかねはせぬ　御客御馳走の舟渡し　（日、那）
此處は柑屋か紺屋の門か　小紋型おく音がする　（日、那）
染めてこの歯は證據印紙　浮氣で反古にさせはせぬ　（日、海）

鳥は古巣へもどろとまゝや　娘は古巣へもどりやせぬよ　（海、那、日）
道中雲助蕾の花よ　今日も酒々　明日も酒　（日、海）
星の數程人ある中で　主と見たのは月ばかり　（日）
目出度ナーエ　目出度はヨ　ソリヤソリヤ
三ッ重なりてヨー　鶴はナーエ
ソリヤソリヤ　御門へ巣をかけるナーエ
ソリヤソリヤ
ソリヤソリヤ　目出度ナーエ　目出度のヨイソリヤソリヤ
このお荷物はナーエ
いたらナーエソリヤソリヤ
かへらぬもどりやせぬ　ナーエソリヤソリヤ　（海、日、那）

餅つきうた

祝ひめでたや　三つかさなりて　上に鶴龜　五葉の松　（東）

つらがにくても
（憎くとも）

ここのもちつきア　みなめんごりぢや　うたをしらぬか　うたはぬか

かかのかあいのは　布引山の　おちる松葉の　はねよりも

くるかくるかと　濱へでてみれば　濱の松かぜ　音ばかり

むかし馴染と　つまづいた石は　つらがにくても　あとをみる

むかし馴染に　けさ道で遇うて　きまりわるさに　そらをみる

思案最中に　蝶々のつがひ　とんでそへとの　しらせかへ

ごんごごんごと　うちこむ杵は　二朱や小判の　音がする

（海）紀三井寺村

粉ひきうた

ここのおかさま　にこひけひけと　にこをひかろか　いちやさか

いちやしやうとて　わざわざと　泣いてなかざと　おほいおい

熊野

今年くるやら　來春ぢややら　大王まはりて　こないやら

大王まはりて　伊勢山だより　伊勢のみなとで　女郎だより

せんがすりやまた　大王へかかる　いやよ大王の　潮がかり

なんと若衆　腕よりかけて　ひとのことぢやと　おもはずに

わしとおまへと　臼引きすれば　臼はなかでなかで　なかでまはる

奉公始めに　うごんやでゐたら　いやよ小麥の　やくらびき

うすをひかんよに　うごんやをでたら　うまれ約束　糊をひく

紀伊熊野

砧うちのうた

萩の白つゆゆり落されて　次第〳〵にうすくなるコラシヨ　（東）

若いとてまだ末たのしむな　時をきらはぬ無常の風　（東）

伊勢音頭

伊勢の巾着繪にかく戸棚　私も思うたあくまいと　（日）
伊勢は茅葺春日は檜皮　やはた八幡こけらぶき　（日）
伊勢は津でもつ　津は伊勢でもつ　尾張名古屋は城でもつ　（那、日）
行たら見てこら尾張の城の　金の鯱鉾雨ざらし　（日）
お伊勢さまの樣な大社はないが　何故に宮川橋がない　（日）
お伊勢七度熊野へ八度　愛宕さまへは月まゐり　（日）
お伊勢まゐりでおいたの芝で　馬にのらぬもの伊勢乞食　（日）
お伊勢まゐりは皆ぬけまゐり　私もぬけましよ籠ぬけに　（那）
馬はもの言たお伊勢の馬は　皮田街道はいやと言た　（日）

親に孝行の螢の虫は晝は　谷合谷底の　かやずの蔭に身をかくし　七つすぎたらとんで來て　河端
柳の程よい處にチョイととまる　我身をともして親さがす　（東）
四角四面の豆腐屋の娘　色は白ても水くさい　（日）
娘十八西國巡禮　おいれ下され後生になる　（日）
吉田通れば二階から招く　しかも鹿の子の振袖で　（日）

機織唄

一歩おとした織屋の門へ　職工思へばをしはない　（那）丸栖
お伊勢まゐりでこの子が出來て　お名をつけます伊勢松と　（日）
お伊勢まゐりでのんだか酒を　天の岩戸のきく酒を　（日）
お江戸で流行るは絹眞田　あれを買うてほしや襷をかけて　布を晒します　（日）
おばた織りさん稲荷でござる　何時も鳥居の中にある　（海）

をしはない（惜しくない）
おばた　（機）

おばたおりして大きなりました　足のこぶしとお尻だけ　（海）
おばたおりして親養へば　何時も髪すく暇がない　（海）
おばた織りして十圓もけて　夫にセコンド買てわたす　（海）
おばた織りして十錢もけて　それで米買てお粥炊く　（海）
おばたおりして養ひまする　先で私を捨てぬ樣に　（那）
おばたおりなよ　忙し機を　誰がをせたか習たやら　（海）
おばた織る子が人間ならば　とんぼ蝶々も鳥のうち　（日）
おばた織る子に米の飯や毒ぢや　麥の御飯に醬油のみそ　（海）
おばた織る人　しんから可愛い　へいれする時さしむかひ　（海）
織子口程演說すれば　高帽かづいて世間する　（日）
織子ぢやといふて名はよいけれど　機の加減も人だのみ　（海）
買うておくれよ大谷絣　心懇切　紺絣　（伊）

をせた（數へた）

へ入れ（あそびに糸を通すこと）

貴志よ貴志よと望んで來たら　嫌よ紋羽のぬき引きか　（那）
君は糸繰る車はまはる　妾やのんきで氣が廻る　（那）
きれうのよい子はこの川上で　お菜を洗ふか菜を流す　（那）
きれうのよい子は亂れし髪よ　顏にかゝりて愛になる　（海）
來いよ〳〵は何處までなりやよ　根來近くの坂本よ　（那）
來うか來まいか　殿待つよりも　二十三夜の月をまて　（日）
こゝの婿さん　こうばしくさい　くさい箸だよ入婿よ　（那）丸栖
小糠三合の世帶がなれば　婿にやるなよ入婿に　（那）丸栖
こんご餅でもおかざり餅は　お粉にまぶさにやお手につく　（那）丸栖
師走霜夜に西風うけて　夜はた織る子の可愛さよ　（那）丸栖
てつか〳〵と織る時や來んと　糸がきれたら樣が來た　（那）丸栖
何はなくとも諸親さんよ　生さぬ仲へは子はやるな　（那）丸栖

こんごもち（小さいもち）

來んと（來ないで）

布の目の様な心を持ちやれ　一つちごても先やいかぬ　（那）
願うて一息しようではないか　掛けた襷の廻る程　（那）丸栖
賭博打たしやる大酒呑みやる　妾の布織無駄にして　（海）
細く〳〵は主人の仰　糸は細らず目は細る　（海）
娘行かんか貰ひに來たよ　町の九丁目の傘屋から　（那）
紋羽おる子と横ひくわしと　いつとかたきの仲ぢやもの　（那）丸栖
紋羽買ひさん來てある時にや　お手をひろげて織れ織子　（那）丸栖
私や布おる殿御は側で　お酒上つてくだをまく　（海）

蜜柑取唄

有田蜜柑と關所でかこひ　色のないのに色つける　（有）

有田蜜柑は山々てらす　沖の大船沖てらす　（有）
有田宮崎字の島の松　沖には釣舟帆かけ船　（有）
有田山みりや蜜柑が戀し　青木山みりや桃戀し　（有）
有田よいとこ蜜柑ぢこ　茶ぢこ娘やりたや婿ほしや　（有）
あれにみゆるはこの子の家よ　五十五萬石城の樣な　（有）
江戸の問屋の佐平さん來たら　土産もらはうか江戸絹を　（有）
江戸や渡佐へと子をやる親は　親でござらぬ敵同志　（有）
沖の暗いのに白帆が見える　あれは紀の國蜜柑舟　（有）
沖を通るは丸屋の舟か　丸にやの字の帆がみえる　（有）
紀州みかんはお國の寶　外は日の丸内は菊　（有）
紀州綿ネル箱入娘　底へ納めて金もうけ　（有）
今度いんだらもて來て上げら　有田みかんの鈴なりを　（海）

今度くる時やもて來ておくれ　有田みかんの鈴なりを　（海）
泣くななけくな江戸でさへなけりや　五里や六里の和歌山へ　（有）
蜜柑とりかよありやひよごりか　あれは紀州のみかん日傭　（西）三栖
みかんとりさん鉢巻白い　とつたみかんは黄金色　（有）
みかんとりさんみかんをおくれ　蜜柑くれやな籠かやす　（海）
みかんとり程つらい者ないぞ　朝は夜で出て夜でかへる　（有）
蜜柑ほぞぬけ袂に入れて　晩においでよ目覺しに　（有）
わしはいんだら持て來てあげら　有田みかんの枝折りを　（海）
わしら有田のみかんの接木　今年ならねば來年なる　（有）
繪島願うて箕島山で　みかんとるのはこちの人　（有）
繪島新之丞はろくごにはなれ　池の小鮒も水ばなれ　（有）
繪島千之丞は山へいてもせきだ　内に百文の女郎おいて　（有）

かやす（ひつくりかへす）
せきだ（雪駄）

あたる（合格する）

徵兵檢査

檢査合格五尺の体　疵のないのも親の恩　（海）
足らぬ身ながら檢査をうけて　あたる樣にと伸び上る　（海）
待ちに待ちたる檢査は今年　甲種合格してみたい

蠶の唄

お蠶は日本一の寶虫　桑のなる木は桑の木の本　先づはめでたい寶虫　（海）
可愛らしいよ蠶の虫は　桑の葉を喰て錦吐く　（海）
桑は芽を出す蠶は育つ　やがて絹はく國はとむ　（海）
山と川との境の村で　一人娘が桑をつむ　（海）

子守唄

愛想盡野に小寄講は　五文させとは公文云ふたか

朝の疾うから庄屋さん何所へ　免狀たばりに吉原へ

あぜらいかんかお寺のせゞへナーヨ　小梅小ざくら枝折りによー　ソレハナー　情カイナ　（東）

あぜらいかんか二本松の下へナーヨ　エビやハゼコがおよいでゐるよ……

あぜらようきけ爺樣や婆樣　大事にせんものばちあたるよ　（東）

兄貴しつかりして金藏たてゝ　島の在所に負けぬよに

あの子可哀そや二つや三つで　賽の河原で石をつむ　石をつんだり碎いてみたり　折に父母訪ねたり　（那、日）

あの子綺麗や寒紅梅の　雪と霜との中で咲く　（日）

あの山なかつたら母さんとこ見える　母さん戀しうて山にくい　（那）

逢ひはせなんだか御崎の沖で　藁で垣した小いさばに

雨のふらんのにかみなり落ちて　バクチウチさんつかまれた　（海、日、那）

雨は降りそな夕立は來そな　由良の開山流れそな　（日）

安藤小平さん螢の虫よ　腰の光で知行とる

いこら見て來ら　岡崎御坊の　舟につくつた五葉の松　（那）

今の先生の羽織の長さ　習ふ生徒の氣の長さ　（海）

今の若い衆にぜに金かすな　あひるの卵でかへしやせぬ　（有、東）

いやぢやいやぢやと泣く子はいやぢや　守がつめつて泣かすよな　（東）

嫌ちや〳〵よ泣く子の守は　主に叱られ子にせめられて　人に樂じやと思はれて（西）

いややきらひや三つ子の守を　お日のくれん間にいに〳〵と　（海）

うちの父さん山行ておそい　山で死んだかいて煙立つよ　（那）

内の此の子の枕の模樣　梅の鶯　松に鶴　梅に似るとも櫻に似るな　同じ花でも散り易い　（日）

うちの子供はよい子供　毎日々々よく遊ぶ　ねん〳〵〳〵おころりよ　（那）
江戸へ佐渡へと子をやる親は　親でござらぬかたき同志　（有）
同じ人間に生るゝならば　池田女や原男　（日）
大きな姐さん遊んでおくれ　豆の三つでもよけあげら　（日）
おばさん何處ゆきや三升樽さげて　可愛我子の孫だきに　（海）
男守さんとんぼの頭　女守さん米のめし　（日）
男守りさんはづかしないか　守りは女ときめたもの　（伊、有）
音に名高い日高の大工　由良の開山たてかねた　（日）
大阪出るときや涙で出たが　今ぢや大阪の金もいや　（日）
お前さんの樣にさう酒のんで　わしに菰でもきせる氣かよ　（東）
面白いぞや南部の鹿島　地から生えたか浮島
南部の浦の鹿島さま　裏へまはれば瀧の口

歌の出所は切目の羽黒　書いて流すは宮の前
思ひもて來たのに君さん大病　高い枕で夢心地
親の意見ももう聞きなされ　十九二十の身ではない　（有、東）
親の意見と茄子の花は　千に一つも仇はない
お山さんとは名が良いけれど　死んで四つ足猫となるよョイ〳〵〳〵　（海）
親のない子に親はと問ふな　あらぬなみだをこぼさすな　（那）
加太はよい所西浦うけて　ながとあらしはそよ〳〵と
金のなる木を一枝ほしよ　植ゑてそだてゝ殿にやるよョイ〳〵
金はかたきぢや身はきりうりぢやよ　こんなあほらしことはないよョイ〳〵
金をまかぬに鐘卷道成寺　松を植ゑぬに小松原　（海）
烏なきさへ氣にかけてたら　こゝは山下いつもなく
かわい〳〵とゆたのは嘘ぢや　おいてお江戸に行くからにやョイ〳〵　かわいがられて死ぬよりま
しかよ　私やにくまれて神かたいよョイ〳〵

可愛我子をねかしておいて　おいてお江戸にゆくつらさ　（海）
京や大阪の廣い所よりも　藁で垣した家がよい　（那）
國は日の本お天子樣の　御恩忘るなつゆの間も　（有）
車の中の赤ん坊　早くねんねをしなければこわい狸が　かみに來る　（那）
小池極樂入山地獄　花の丸山御所ごころ　（日）
小石川さん池田の角力で　御目の舞ふほご投げられた　（日）
來いよ來いよと日高の川で　舟子呼んだの清姫か　（日）
來いよと〳〵呼ばんとすれご　川がおとろし紀の川が　（伊）
かうておくれよ　川上縞をよ　心こんせつこんじまをよ　心こんせつこんじまよりかよ　淺黄縞で
も數はしやよョイ〳〵　（海）
こゝは一ノ谷敦盛さんの　お墓所はなつかしい
此所は黒川たすきや峠　思ふほそぬは見ぇぬ

どこなら
（どこでせう）

こゝはごこなら酒屋の裏に　何時も酒のむ聲がする　（海）
こゝはよい所朝日をうけて　風は南の小谷から　（日）
この子かしこいもうねんねしたのよ　おきてなく子はつらにくいよ　（海）
この子かしこいもうねんねしたよー　ねんねしたまにまゝたいてよ　（海）
この子可愛いとて守まで置いて　口に食はして身にきせて
小浦圓行寺箒はいらぬ　塩屋お長さが裾ではく　（西）
此所でかうして子守をすれご　一生無學で話しやせん　（東）
この子大事な子ぢや　おめしのたねぢや　この子おとしたら飯あがり
此の子なきみそ　金山寺みそ　親にきみそとつけられたよ
この子寢させて蒲團をきせて　ぐるり叩いて針仕事　（海）
この子ねた間に赤まゝたいてよ　赤のごはんにとゝそへてよ　（海）
この子ねむつたら祝さ　しようらよ　祝なにしよに　酒買はうら

此の子誕生に赤飯たいて　赤い御飯にとゝそへて　（海）
この子ねむれば何よりうれし　かねの千兩もひろたより　（伊、有）
この子は眠れよ　眠らにや叩くぞ　何んで眠ろに叩かれて　（海）
この子よい子や牡丹餅顔で　黄粉つけたらなほよかろ　（日）
この子よう泣くはずぢやよ　乳ものまさず負たばかり　泣いてくれるな今日一日は　（海）
この子ようなく人目にわるい　たゝくひねると思はれるよ　（東）
この子よう泣く雲雀か鵯で　ごんせん子でごんす
この子ようなく雲雀か蟬か　蟬じやごんせん子でごんす　（西）
此の子よにまた夜畫ないて　守も出來るか半年も
怖い恐ろし印南の港　時化もないのに舟しもた　（日）
怖い恐ろし小池の犬は　知らぬ私に吼えに來る　（日）
こひし小川の谷水汲めば　桶はもらねど袖しぼる　（海）

こひしなつかし雪駄の音は　主は誰とも知られない　（海）
小松原には旦那衆五軒　酒屋三軒寺二軒　（日）
子守憎いと破れ傘くれた　可愛い子供が雨ざらし　（西）
子守にくいとてやぶれ傘くれて　可愛い我が子にあめかゝる
子守の役とてつらいもんでござる　家で叱られ子になかれ　（海、日、那）
こんな所で守せうよりも　廣い大阪で針仕事　（東）
こんなところへなぜ來た知らぬ　水に誘はれ來た　（日）
こんな泣く子は誰おうて來たか　わしはおて來た泣かなんだ
こんな泣く子の守するよりも　いんで氣樂の會社行き
こんな泣く子を一日負うたら　足が棒になる杖になるよ　（東）
こんな泣く子を守するからにや　帶も着物も長うおくれ　（市）
こんなに泣く子の守するよりも　いんできらくのおばた織り

いとやん（お嬢さん）

御坊東町幕はいらぬ　大御堂參りの裾ではく　（日）
酒は酒屋でのんだよ來たよ　おばん煙草の火をかけよ
酒はのみたし　酒代はもたず　何時も酒屋の門に立つ　（市）
酒屋さんから白水流す　もうまた新酒も上りそな　（海）
賤が伏屋にや馳走はないが　山の清水で炊いた飯　（海）
下里名物食べてみておくれ　高菜の目張りと白魚とよ　（東）
高い山から堺をみれば　やせた親爺が沼かへす　（海）
財部通れば空見て御出で　花の丸山星月夜
田井や財部の精のない祭　お鮨くはへて井戸のぞく　（日）
大工さんなら暗うてもお出で　花の丸山星月夜　（日）
田井で油屋入山峠　小池白井さん西の關　（日）
誰もやかましゆ言やせんけれど　わしのいとやんねぐづりぢや

旦那ようきけ奥樣ようきけ　もりにきつうすりや子にあたる　（日）
旦那よくきけ守子の唄を　守にきつすりや子にあたる　（東）
着いたか三輪崎組はさあ三輪崎はな　親もとり添へ子もそへて　（東）
月はのぼれば兎は餅をつく　坊やのうたにつれなげた小石は　蝶々となりてぱつと飛び立つ畠の中
坊や可愛いや　菜の花ばたで　蝶々とびたつあとをうつ　坊や可愛いや　雪ふるあした　二つつけ
〳〵下駄のあと
つばなつく〳〵よ山の鐘ならよ　もう一つなつたら歸りませう
つらいものですなく子の守は　親にや叱られ子にや泣かれ
殿の眠を窓からみれば　帆かけ船かよゆらゆらと　（市）
殿らいんだら持て來ておくれ　有田みかんの枝折りを
とうたとて何故に又　その身をふてて　島田くづしや丸髷に　結はれる髪を持ちながら　藁で束ね　（有）
てつけの櫛
ごうぞねてくれねいらちせんとよ　親の心もひねるよに　（海）

ふてて（捨てて）
ねいらち（眠る前に機嫌のわるいこと）

戸津井よい所十九島受けて　前に泉水かゝり水　（日）

寺の坊さんは男ぢやけれごよ　産で死んだよ二十三でよョイ〳〵

寺へ三年針やへ四年　忘れられんよ親の恩　（海）

でん〳〵太鼓に雀の笛　お母さんの乳より甘ごんす　それをしやぶつて眠らんせ

鳥も通はぬ八丈が島へ　金が仇で流された　（東）

鳥も通はぬ八丈ヶ島へ　日高喜太夫船流された　（日）

泥田のすみでも身は清淨の　清き身を持つ稲の花　（東）

富田高瀬の半九郎さんは　馬は來たけど馬子は來ぬ　（日）

とんと戸津川御赦免所よ　年貢いらずの作がらす　（伊）

とんと殿樣葵の御紋　丸に三つ引長門さん　（市）

とんとと豆がほうらくの中で　跳ぼか走ろか腹きろか　（海）

奈良の大佛さんよこだきに　乳をのませた親みたい　（伊、有）

泣かすな（泣かすのは）

もろた（貰つた）

泣くはいとさん泣かすな守子　何が泣かそに守ぢやもの

泣くななけくな泣戸でさへなけりや　五里や六里の和歌山へ

なくないとさんほしけりや上げる　お寺上りのこでまるを

泣くないとさん人形（デコ）買うてあげよぞ　お前見たよに泣くデコを

泣いてやかまし吉原雀　なかば野でなけ山で泣け

泣くななけくな川島武夫　死んだ浪ちやんもごりやせぬ　（那）

泣いてくれるな病にかゝる　鳥なくさへ氣にかゝる

泣いてくれるな泣かいでさへも　氣づつないわよ人の子は　（日）

ないてくれるな　殿御の留守に鳥なくさへ氣にかゝる　（海）

泣いてくれるなお母さんの留守に　守がつめると思はれる　（日）

ねんねんよー坊やのお守は何處へ行つた　あの山越えて里へ行つた　里のおみやげ何もろた　甘い

甘露におこし米　それを食はへてねむつたら　お母さん乳より甘うござる　（伊）

ネン〳〵ヨーネン〳〵ヨー　よい子ぢや泣くなネン〳〵ヨ　抱くは母ぞなでるも母ぞ　よい子ぢや泣くなネン〳〵ヨ　（東）

ネン〳〵〳〵〳〵〳〵ネンヨ　ネン〳〵太鼓に笙の笛　ネンネコ山の雉子の鳥　とつたら鷹にすーられる　（東）

ねん〳〵と脊中を叩く　何がねましよに叩かれて　（東）

ねんねんころりやおころりや　坊やはよい子だねんねしな　ほゝやの母さんどこへ行つた　あの山こえて里へ行つた　里の土産に何もろた　でん〳〵太鼓に笙の笛　たとへ山中山家でも　すめば都よ我が里よ　（海、日）

ねんねやおろろ　おろろんころろん　子が泣くな　泣いたらおかめにかまんぞよ　おかめおそろしちやつと眠れ

ねんねん子守は何處へ行た　山をばこえて里へ行た　里の土産になにもろた　でん〳〵太鼓に笙の笛　おきァがりこぼしに犬はり子　あんまい甘草のおこし米　おかさん乳よりあんまいよ

ねんねん子守は何處へ行た　あの山越えて里へ行た　里の土産に何もろた　でん〳〵太鼓に箏の笛　甘いかんろや（甘露）　おこし米　母さん乳より甘かつた　（那）

ちやつと（すぐ）

ねんねよい子ぢや　おやすみなされ　亂が欲しけりや乳あがれ　（那）

ねんねねんねと頭をたゝく　何でねられよかたゝかれて　（東）

ねんねねむたい春三月は　苗代かへるのなく頃は　（伊、有）

ねんねねぶの木朝早起きよ　晩の日暮にやちやつと眠れ　（那）

ねんね根來へゆきたいけれど　川がおとろし紀ノ川が　（日、海、那）

ねんね根來の不動さんやけて　坊さんかはいそに丸燒ぢや　（那）

ねんね根來の室屋の娘　嫁入りしたそな　じよじよかは池

ねんね根來の地藏さんこけて　それがをかして眠られぬ　（那）

ねんね根來の阪本やけて　なるもならぬも皆乞食

ねんね根來のかくばん山に　年より來いよと鳩が啼く　（市、那）

ねんね根來のかくばん山に　そもじ來いよと鳩が啼く　（那）

ねんね根來のお城の藪で　としよりこいよと鳩が泣く　（那）

ねんねなされた子は可愛いゝ　起きて泣く子はつらにくい　（海）

ねんねしやんせねる子は太る　起きて泣く子は虫がさす　（西）

ねんねしやんせ今日は廿五日　明日はやゝ子の誕生日　（東）

ねんねしなされまだ夜は夜中　明けりやお寺の鐘がなる　（日）

ねんねしなされまだ日が高い　暮れりやお寺の鐘がなる　（那、日）

ねんねしなされおやすみなされ　明日はとうからおきなされ　（有、東）

ねんねしなされ　おころりなされ　明日は吉野にしなされよ　（海）

ねんねした子に　赤いまいきせて　乳母にだかせて乳のまそ　（東）

ねんねした子に赤べゝきせて　ねんねせん子に縞のべゝ　（有、東、伊）

ねんねした子に赤いべゝきせて　明日はお宮へ参ります

ねんねしたかと枕にとへば　枕ものゆたねたとゆた　（日）

ねんねさんせよ　今日は廿五日　明日は此の子の宮参り　宮へ参らばどう言うて拜む　この子の一代まめなよに

やゝ子（赤兒）

まい（着物）

ねんねころりお休みよ　お眼をつぶつて歌きいて　里の子守の唄きけば　私の父さん馬曳で　日日毎日町通ひ　朝の出る時月がある　晩の戻りに星が出る　（日）

ねんねころり　内のねんねは何時出來た　三月櫻の咲くときに　道理でお顔が櫻色　（日）

ねんねころいちや賭博に負けて　縞の財布の底たゝく

ねんねころいち天滿の市で　大根束ねて　ネンコロロン　船につむよ　船につんだら　何處までとゞくよ　大阪天滿の　ネンコロロン　橋の下　橋の下には鴎がござる　かごめとりたやネンコロロン　網ほしや　（東）

ねんねころいち天滿のていち　大根そろへて舟に積む　船に積んだら何處まで行きやる　木津や難波の橋の下よ　橋の下にはおかめがゐやゐ　おかめ取りたや竹欲しや　竹を欲しけりや竹屋へ行きやれ　竹は何でもござります　（那）

ねんねこさんねこ酒屋の子　酒屋はいやなら嫁にやろ　嫁の道具は何々と　たんす長持は　さん箱布呂敷包は數知れず　これだけ持たしてやるからにや　一生定めて歸るなよ　あれ又母さん胴慾な千石積んだ船でさへ　風が變れば戻るもの　（西）

ねんねこさんねこ酒屋の子　盃かづいて踊りやんせ　（日）

ねんねこさんねこ酒屋の子　酒樽もてこいさけのましよ　（那、日）
眠れ〳〵とこれ程いふに　何が不足でねむられん　（那）
ねこ〳〵〳〵〳〵申さうなら　おそろし猫は三毛猫ぢや　きたない猫は灰猫ぢや
花は千さくなる實は一つ　九百九十九は仇花よ　（伊）
埴田女郎衆は牛蒡の煮しめ　色は黒ても味はよい　（日）
芳養で八幡　南部で鹿島　東本庄で一の宮　（日）
比井へはいろか小舟へ寄ろか　思案半ばの中出磯　（日）
比井の港ははいりよて出よて　後に名殘のない港　（日）
比井は舟ごこ阿尾浦は漁ごこ　中の產湯は百姓ごこ　（日）
東の町から西の町まで　歌うて通るは守ぢやもの　（日）
日がな一日泣く子の守は　足が棒になる杖になる　（日）
日高川には蛇があるさうな　大きな蛇ぢやそな　偽ぢやそな　（日）

日高川には二いろござる　思ひきる瀬ときらぬ瀬と　（日）
一人〳〵は皆極樂へよ　誰もこの世にやのこらせんよ
坊さん山道破れた衣よ　いきし戻りに氣にかからよ
奉公すりやとてちりめん衣裳　親は田井ノ瀬で乞食する　（海）
奉公する子は身はすみの糸　夜といふ字はあらばこそ　（海）
奉公する身とはしりの水と　つかひあかれて出るつらさ　（海、那、日）
細い道でも我から避けて　人を通せば氣が樂よ　（海）
詣りたいぞよ近江のお多賀　命かみなり願もある　（日）
參りたいぞよ小山の權現　有田日高を見下して
松瀬松茸田目の九州三尾三男に　衣奈女郎衆　（日）
松になりたいかぶとの松に　上り船をば見て暮す
三尾のうるめに若野の卵　野口牛蒡に和田大根

娘いかんかもらひに來たら　町の九丁目の傘屋から　（有、東）

昔安珍日高の川で　命とられた清姫に　（日）

木綿きるともお慈悲をきけばよ　絹や小袖の着た心地よ

守と言うてから何故守させる　半期五十匁の金を出せ　（市）

守のつらいのは日暮と朝ぢや　またもつらいのは雨ふりぢや　（東）

守よ子は泣きや外へ出てゆすれ　いばらぼたんの花持たせ　（伊、那）

守よ子守よ朝晩大事　畫の辻には守いらぬ　（日）

守よ子守よかごに出てゆすれ　千重椿を子にもたせ

守よ子守よと呼びつかはれて　淺黄總物（アサギソブツ）はくれはせん　（那）

守よ子守よ日暮は大事　日暮泣かん子に守いらん　（西）

守はにくいとて破傘さゝす　かはいゝ我が子に雨かゝる　（日）

守よ〳〵と輕蔑するな　太閤秀吉もと子守

守よ〳〵とたくさんにするな　守はひと役おとなやく　（那）

守よ〳〵と樂さうに言ふけど　守もしとおみあだやない

守をするのももう一二年　やめて裁縫にかよひます　（海）

門前の肥取りえらいもんぢやな　擔桶片荷に柴片荷　（日）

破れ障子と鶯鳥と　寒さ忍んで春をまつ　（日、那）

由良の開山たてかねせまい　御坊の大御堂をたてたもの　（日）

由良の開山若し流れたら　私こちらで拾てやろ　（日）

吉田通れば雪隱から招く　而も片手にわらさげて　（日）

嫁を可愛がれ嫁こそ子なれよ　かわいゝ我が子は他方の嫁

わいとこのこの子は今ねる最中　皆んなやかましいはぬよに　（那）

和田の入山こんごの雪駄　裏も表もみなかはぢや　（日）

私はランプでほやかけられて　石炭かゞりで苦勞する

私等若い時有田へ越えた　知らぬ鹿瀬夜で越えた　（日）
私らいにたいあの山越えて　いんでお母さんの顔みたい
わしのいとやん寢ぐづりするが　守りも世話なりわがも世話
我子可愛けりや守に餅くはせ　守がこけりや子もこける　（海、那）
わしの姉さん大阪へ嫁に　簞笥長持船に積む　船につんだら何歳まで行く　大阪天滿の橋の下　橋
の下にはお龜がたんと　おかめ恐しちやとねんね　（那）
わし等恐いよ鮎關谷が　岩に花咲く人をとる　（有）
私青梅かちおとされてよ　しそにまかれていろづいたよ
わたし居てる家の奥さんきつい　守の仕着は茶ゝ袋　（那）
わたしいんだら持て來て上げら　有田蜜柑の枝折を
わたし嬉しい正月來たら　牛のねたよな魚そへて　（那）
私の父さん高野で大工　流れきました鉋くづ　（那）
私のいとやん今ねる程に　誰もやかまし言はんすな

雨乞踊歌

赤きうたほごしよもんする、赤きあかつき赤しやごま米のかけ盤にゑびのもりもの。（那）
曉のはなれ節よや夜明けて　あだ名の立つふしく。
明日は吉日日をえらみ藏の地を引き石を積む。藏の地を引き石積まば白銀柱を建てましよ。白銀柱
を建てるなら、銅瓦で屋根ふこよ。銅瓦で屋根ふかば、黃金の板を敷きましよ。黃金の板を敷くな
らば、米で築地をつきましよ。米で築地をつくならば、錢をつないで壁にしよ。錢をつないで塗に
せば、鎗でもかり(虎落)に結ひましよ。鎗でもかりを結ふならば、太刀でらんかへ結ひましよ。
あの君樣は三ヶ月空よ、いつ來てみても宵ばかり。（那）
雨乞殿の前栽に、お鷹を見事につながれて、一のお鷹の囀るは、おせじよまさりとお囀る。二番の
お鷹の囀るは、弓取冥加とお囀る。三番のお鷹の囀るは、因幡の國から皆參る。雨乞殿の御團扇は
板金造であら見事。
あら美しの牛若殿や、日本で一の譽れ人。晝はお僧で學問あそぶ、夜は左で大刀を打つ、鐵の足駄
を召されたり。左に小刀むんづく構へ、五條の橋へ御出なる。五條の橋で姿を見れば、鳥か小鳥か

の て（無くて）

空飛ぶ鳥か、千人切りの見事さよ。

あら美しやのつばくろ鳥の、すがたはのイヤ、とのをもたずにかねつけてイヤ、ほほべにさしてとのをまつサ、サイ。五つの年から、私は殿御を待ちなれごイヤ、とのをにくんでときはの國を立ち出でイヤ、今はなれそや旅人をサ、サ、アミサイヨエイサ、アミサイ。

青きうたほごしよもんする　青き早具青ほうし　谷の根笹に峯の若松　（那）

伊勢の山田の菊光女郎が船頭殿にとろりと迷た。お名殘惜しくば今宵からお名殘惜しくば又春御座れ。春の土産に何又貰ろた、つゞら手箱に白目の鏡。白目の鏡に尺帶、尺の帶をば貰ひはしたが兎角暇のてまだくけぬと借り置いて、兎角は置いてくけて召されよ。華やかに船頭殿よ船頭殿よ。腰に挿いたる黃金の拵杓、何の爲よと若し人問へば、實小舟の垢を取るぞよ、垢を取るぞよ。船頭殿よ船頭殿よ。腰に挿いたる白拵の團扇、何の爲よと若し人問へば、是をかゝげて女郎を忍ぶよ。船頭殿よ船頭殿よ舟路の上には大事が御座る。七重の屏風を引き返し明日は着くぞえ賤が宿まで賤が宿まで。

磯邊の千鳥はみすからきく　船さじ見れば立ち歸る　（那）

いや己れが弟の虎松は明けて十三、まだ十五には足らねごも、小口を一事とお嗜む具足は何と好まれた上七段の唐紅よと、下六段の紫色よと、綾のはづしは十三さがりと好まれた。兜は何と好まれた。兜も同じ毛色で四方島田に吹き返し、大將鍬形遊ばした、刀は何と好まれた。もんこふ鍔にすかし鍔鞘はのせ鞘つかは黃色の御蛭卷、鎗をば何と好まれた。連錢月毛鹿毛の駒見よ。正鬱に白磨き綾の手綱を搖りかけて、牽きしは事、馬をば何と好まれた。いまの鎗にふゑ卷を、笛卷はやう見あれへ見えたる鹿毛の駒。あれかよ虎松踊り子は有禪山へ上りて見れば宮もふくしやよ有田もふくしやよ尙ふくしやよ。

いや何處の人は潮燒き初めて、己れ等が方で塩を焚く此の先き浦は何所の浦ぞよ、この先き浦は箕島の浦いざ、さら下りて潮を汲む。此の先き浦は何所の浦ぞよ、この先き浦は椒の浦いざ、らをりて潮を汲む此の先き浦はごこの浦ぞよ、この先き浦は紀三井寺の浦いざ、らをりて潮を汲むこの先き浦はごこの浦ぞよ此の先き浦は三葛の浦いざ、らをりて潮を汲むこの先き浦はごこの浦ぞよ。この先き浦は住吉の浦いざ、らをりて潮を汲むこの先き浦はごこの浦ぞよ。この先き浦は天王寺の浦いざ　らをりて潮を汲むこの先き浦はごこの浦ぞよ、此の先き浦は赤阪の浦いざ、らをりて潮を汲む潮を汲む。

いよ己が殿御は今年初めて伊勢參宮伊勢へ參つたごりしよには黃金の玉を三つ下された。や目出度やら目出たさあ一つの玉をば高きお山に置いてきた。さあ一つの玉をば花の都に置いて來た。さあ一つの玉をば吾が里へと取り下し京濱に町を建て此處に館を建てませう。此處に館を建てませう。

此處に館が建つならば、うるしばしらを建てませう。うるし柱を建つならばぜにをからめて踏みませう。錢をからめてふむならば太刀でもがりを結ひませう。太刀でもがりを結ふならば、白金のして團扇に張りて諸國の碁石招きそろ。

いよこの寺は如何なる大工の建てつらう。八つ棟造りで寺は百合のお花寺。寺のかゝりを見てやれば八十許な老僧が香の衣に香の袈裟皆水晶の珠數つまぐりてにもちて、參る姿は佛なるらむ。入海や船漕ぎ浮べて寺見ればいつも絶えせん鈴の音かな。貝壺や貝壺や貝で壺に造りて壺の光で寺は輝く、十雀十雀十稻穂を啣へ來て、八束穂に八石あるならばこの御庭に藏は七並や七並や藏の奉行は誰々ぞ、一にや鷺二にやつばつらつばくら。

いよさても今宵の若衆達月が御座りた出てをがめ。そこな姫御は何をまつ、二十三夜の月をまつ月が御座りた出てをがめ。己れは酒場の酒場守、月が御座りだ出てをがめ。忍ぶ小びやの窓の口、月が御座りだ出てをがめ寢ねのこれな群雀、月が御座りだ出てをがめ。よし殘れな群雀月が御座りた出て拜め出て拜め。

入海の海の船を浮めて寺聞けば、いつもたいせゐれいのをいかな來りてをがめよ、此寺を七間半に御座は孝行の間なかの障子を獨立てゝ黃金花瓦に挿す花は、裾ばかりの御僧は香の衣に香の袈裟皆水晶の珠數をつまぐり手に持ちて參る姿は佛なるらむ。京雀々々京の稻穂を啣へて、御寺の御庭に八穂で八石八穂で八斗とるなれば、お寺の御庭に藏は七並み七並み七並みの藏の奉行は誰々の一に鷺二に燕。

お伊勢の國のならひには　小草履小笠をみやげにする　（那）

近江の國の小町屋殿は。まだ十三にはならねごも、今年初めて御陣立、手勢は何と拵へに吾が旗下の手の者を、九萬九千騎拵へた、道具は何と拵へた、刀は千腰槍千本、滋藤弓の遠卷を、先づ千張と拵へた、具足は何と拵へた、具足は奈良の小櫻猪兜は大和のみすの內、御馬は何と拵へた、七軒馬屋に駒七つ、中なる駒を引出し、金覆輪の鞍投げかけて、金の團扇に日の丸付けて、兩口取らして御出ある、あれかよ小町屋若武者、此れではならぬと大和の勢を呼び止めて、こゝで一槍仕ろ。

近江の國の神坊殿は、大名で黃金の的を八から立九十九人で米を搗く、九十九人の其中にごれが目につく旅の殿、くんだんから緒に綾襷、すゞしの帷巾目に付いた、御目についたら連れてこざれよ旅の殿、連れていのにも城がない、さて城なくば腰なる刀を賣らせませ、腰なる太刀を賣らうにも、末遙々の長の旅。

踊が參るごれから參る、加賀越前が皆參る、一の木戸開けよ二の木戸開けよ、三の木戸開けて御門の扉を開いて、御庭で踊り御門の屋根に黃金の鳥が數知れず、能くよく聞けば芽出度い鳥命長かれ

末榮え黄金の眞砂が降れと鳴く。

おばゝは招く　くづははしのぶは　やゑ女郎花うねるなり　（那）

面白や大胴小鼓笛太鼓　拍子そろへて面白やよ

思はますとも　忘れはせまい　あの君樣のおんなさけ　（那）

おれが姑のきぶいのは、開けたる戸をもそろりとたてゝ、嫁が開けぬと名をたてる、おれが姑のきぶいのは、汲んだる水もゆるりとあけて、嫁が汲まぬと名をたてる、己れが姑のきぶいのは、搗いたる米に搗かぬの混ぜて、嫁が搗かぬと名をたてる、己が姑のきぶいのは、岩を袴に裁ち縫へと、縫へと岩を袴に裁ち縫ふならば、わごは(我姑の意)眞砂を糸によれ、己れが姑のきぶいのは、空飛ぶ鳥の羽を讀め、讀めと空飛ぶ鳥の羽を讀むなれば、わごは天なる星を讀めなんぼ姑のきぶいのか。

己れが子孫の虎松が、まだ十五にはならねども、小口をいちとお嗜む、刀は何と差さしたぞ、無垢のこうがいうらこし差さしたよ、弓をば何ともたしたぞ、重藤にそばしうの木張替添て持たしたよ、鐚(鎗?)をば何と持たしたよ、木青貝に白金末を黄金に御蛭卷、馬をば何と引かせたぞ、連錢葦毛に鹿毛の駒なゝけ八分明け六才と牽かせたぞ、鞍をば何とかしたぞ、金覆輪の鞍しかせ、しよじぐすりの白みがき綾の手綱によりかけて。

己れが殿御の腰を見れば長い刀に小尺八、己れが殿御の腰をみれば越前小琵琶の琴の糸、裏飛ぶ白鷺ごこへ行く、薩摩下りか懐しや、薩摩上りで腰御座るなら、文をも遣りたい薩摩まで、飛ぶ白鷺に文遣れば、文をば落して曲もない、十七八の砂山躑躅、寢入るとすれば搖り起す、十七八は小池の小鮒　おさよとすれごとびめぐる。

おれ忍ばゝよ、おれしのばゝよ、小松の下で御待あれ、若し誰人といざ問はゞ門松はやすといざ答へ、おれ忍ばゝよおれ忍ばゝよ、篠竹鍛で御待ちあれ、若し誰人といざ問はゝ、笛竹はやすといざ答へ、おれ忍ばゝよ己れ忍ばゝよ、細谷川で御待ちあれ、若し誰人といざ問はゞ、夜水を引くといざ答へ、己忍ばゝよ己忍ばゝよ、御門で脇で御待ちあれ、若し誰人といざ問はゞ門番するといざ答へ。

己は近江の國の者、妻を三人持ちたれば、三人持は邪縁なり、一番姫御のよむ歌に、からかさきなる唐糸が、糸の御縁と結ぼれて、解くとすれごほごかれず、二番姫御の讀む歌に、おもてに咲いたる糸櫻、妻の御縁に結ぼれて、ほごことすれごほごかれず、三番姫御のよむ願に枕の上の亂れ髪、つまの御縁に結ぼれて、ほごことすれごほごかれず、一番姫御が糸を引く、二番姫御がくだを卷く、三番姫御が機を織る、ひのゝ織屋が始りました。

己は茶にすき茶臼持たず、俄に茶臼をあつらへて、己は茶にすき茶釜は持たず、俄に茶釜をあつらへた、己は茶にすき茶せんは持たず、俄に茶せんをあつらへた、己は茶にすき茶きんは持たず、俄に茶きんをあつらへた、己は茶にすき茶杓はもたず、俄に茶杓をあつらへた。

己は阪東の國の者、今年初めて大阪の城を見物に、さてこそ見事な御城かな、和泉河内は皆見える天王寺住吉續いたら、東表を見てあれば、東しや本町白壁よ、南や長堀しやくをゆい、西は荒海堺浦、北は大川舟が着く、さて殿御の御座所飛彈の匠が年盛り、八ッ棟造りに組建て、屋根では鯉が跳ね踊る。

おんぐりごのとは申せごもイヤ　妻にさだめはござなうてーイヤ　横山長者に入むこに　サヽサイ
中なる馬をば引出してーイヤ　先づよき馬よとほめられてイヤ　ひとばゝ乘らせ給はれよ　サヽサヽ
イ　おみゝのかゝ里を見てあればイヤ　耳は美し短かうてイヤ　うきをまひたる如くなり　サヽサヽ
イ　お目のかゝりをみてあればイヤ　赤金の鈴にたらして　朝日まよたる如くなり　サヽサイ　ふ
りんのかみをみてあればイヤ　山すゞをひともとからして　本をそろへて　末をたばねて　谷のあ
らしに　一もみもました如くなり　サヽサイ　おつゝのかゝりをみれあればイヤ　天竺の　こまん
河原の御瀧が落つるが如くなり　サお瀧が落つる如くなりサイ　お足のかゝりをみてあればイヤ
笙の笛を　ごんすで合して　せんしゆもまんしゆも皆ふりすてゝ　紺の糸でりんといはいて　あり
とぞふしを合したりサヽ　アミサーイヨイエサヽ　アミサイ

鐘卷の緣起を聞けば恐ろしや　庄司が姫は蛇になりたよ

鎌倉の伯母御の方からやよ細絹を贈りて來た、白うて着れば衣裝な、り赤うて着れば匿し是れ紺に染てたもれよ、播磨の精舍のおからかき是れ紺に染め樣は安いが型をば何とお附きよに、天笠へお

それもして型に浮き雲し、有明け月よ裾には近江の湖、腰のめぐりは西國船よ浪に搖られてともづな乞うたるお所よ、右の手の絹の袂に藤の花一と枝咲て一と枝蕾んで先で榮えた所よ、左手の絹の袂に百合の花一と枝咲いて一枝蕾んで先で榮えた所よ、下着の衣のつまには鶯の聲はすれごも姿は見えん所よ、上着の衣のつまには秋鹿が妻が聲かけかんよと鳴いた所よ、顏かきは物に上手で上るおとびに下るほそものあのつまさきの美しさ。

鎌倉の鎌倉の伯母御の方からやよ細絹を得て來た、白で着ればけすぢなりそよ、ふちんめよ、いはけすぢなりそよ、是れ此所で染てたもれ、播磨のしよしやのおかりかけ、是れ此處で染は安い色型に肩にからまつ腰に唐蔓、裾には近江の湖、左袂にやそでの上にすゞしの花が一重開て、一重蕾んでさきで榮えるほところよ　右の袂にや袖の上、牡丹の花が一重開き、一重つぼんでさきや榮えるほごころようはがいの（上着の意）絹の隅には秋鹿が、妻にこがれかんよと鳴いたる如くなり、したがいの絹の上に西國舟が浪に搖られともづな乞うたる如くなり。

鎌倉のしょゑが娘はしよゆないつはりをなされた、正月には早稻米喰ひたい、二月に茄子が喰ひたい、三月にさら桃喰ひたい、四月に熟柿が喰ひたい、五月に薄雪降らして、六月氷がくひたい、七月竹の子喰ひたい、八月たこ菜が喰ひたい、來る九月は梨が喰ひたい、なる梨はほんじや御座らぬならぬ梨が喰ひたい、空見れば星もほしあれ唐土の鳥が喰ひたい

鎌倉の長者の處に（下）小鳥籠を忘れた（上）九つの黃金倉より（下）小鳥籠の惜しさよ（上）赤茶胡麻の

頭にしげご(?)の帶して(下)あれよこれの犀殿は(上)犀殿なれば思ひ止めみよ(下)早や小松原へ隱れたよ廻れ〳〵小若衆搖れ〳〵笠の輪今世の中へと搖り直る

黃なるうたほごしよもんする　うこん梔子　きはだ染　こがね裝束　山吹の花　（那）

清き水上尋ねて來てィヤ、加茂の宮居に參るなり千早ふり來る雨のあしィヤ、御代もをさまる貢ものたのむ、しるしを水無月のィヤ空も一つに天がした、杉の木陰り月見ればィヤ、しがし曇り雨が降る、なびく稻葉もサ、色まして民を惠みの神垣や、加茂の川瀨のサ、末までも汲みて喜ぶサ、みたらしや、水上の奧照る日のごかに、雨雲の八重の霧たついぶき山。　（那）

黑きうたほごしよもんする　黑き黑貝　くろ烏帽子　奧の小山に　熊や伏すらん　（那）

こゝ通る熊野道者がお上に召したる帷子、片裾に稻の亂れ腰に中稻の刈數、後には藏を建てそよ、前には浮世の反橋り反橋にさじき打たして小なみに太鼓打たして、其太鼓響ありたよ逢阪山の松風松風は身にはしゆまねご人待つ風は身にしゆむ。

是程の旱ゆくのに雨乞踊を初めて、氏神前の白洲にて皆立ち寄りて踊れごも、神の威德がまだ見えぬ、神の威德が早見えて、天より霧が舞ひ下る、龍が水まくとゞろ鳴るこそ嬉しけれ。雨のさんざと降る夜には作耕作木草まで居そろぞろと靡きよる。

これのお脊戸に福柳　本はしろがね中こがね　枝には錢がなり候　（那）

これのお棟に今朝鳴く烏をよく〳〵きけば　目出度い烏　こがねの花が降れと鳴く　（那）

さあ御門々々明けずの御門　門は白金扉は黃金お岩からの、しうんの赤銅を此れのお庭で今朝鳴く烏能く〳〵聞けば芽出度い烏　黃金の眞砂降れと鳴く、いぬゐの隅に榎が御座る、さいたる枝に榮えた枝に、黃金の烏がひとさほとまる、あれかよ此れの福榎、福榎本は白金中黃金枝には錢がようなるさうな、因幡山前は松山後は大社の御山なり、　東は丹後の人江海、　入江々々にせんまをついて、中には鯉鮒ざんざらなみよ、聞けよ刈萱女郎花、太鼓打かん鼓打太鼓は何時まで打ちやるぞ、七つ下れば草葉に露あり、いろいろ御座る、草葉に露はいろ〳〵ならば、己等ががたには姫御が御座る、紅梅手綱は濡れても色よ、お稚兒は手馴れて尙良かろ、音頭取る若い衆いざもとしいいざもとし。　（有）

堺の町を通りて見れば、やら美しのビャクダン具足、あれこそ殿の陣具足、堺の町を通りて見れば、やら美しの七枚兜、四方しなだれ中吹返し、八方白の鍬形打たせ、あれこそ殿の陣兜、堺の町を通りてみれば、あら美しの白木の弓矢、あれこそ殿の御張替、堺の町を通りて見れば、あれ美しの葦毛の駒や、あれこそ殿の御張替。

阪本の〳〵、むろやが娘に池守よ、子かやせよ子をかやせよ、わが子かやせョー、池守は池こそお

何しつて（何を知らうか知らない）しらさ（知らん）

もり何しつて、しらさ、しらそゝわきなんる、小松にかけおく、朝日には〳〵、お日にかゝやく、波には、かもりは、ゆらゆらサ、アミサイヨエイサ、アミサイ、娘ひとり持ちたれば、じゆうじやが池にとふき散らす、寺へ參りて泉水そろりとのぞいてみれば、ちごの樣なるかんしちたちが、しだれ柳に小鳥を遊ばし、もぐりともなや此寺をサ、アミサイヨエイサ、アミサイ。（那）

阪本の室屋の娘住寺が池へ嫁入々々子を歸せヨウ住寺が池守々々、池守は池をこそ守れ何して其子を知らうに、知れずんば其中なる小山へ行て見よ、帶金銀笠帷巾と中なる小松へ掛け置け置け、朝日させば帶は輝くかもじは波とゆらゆるやら、恐しや住寺が池へ吾が子を花に散らした。（那）

さても見事な御庭かな白銀黃金の築山に鶯宿梅の花盛り、梢に止る鶯のにほひ深くもうとうたり、二月は彼岸櫻の花よ、三月桃の花が咲く霧島花ややう見事、四月には躑躅の花よ、五月の皐月の花が咲く、六月に桔梗苅萱女郎花、七月に萩の花が咲くやら見事、八月に高麗菊の花盛り、九月には千重の菊の花咲く、十月にさても見事な紅葉かな、霜月に水仙花やゝら見事、極月に寒紅梅や早や見事。

佐渡と越後はすぢむかひ　橋をかけよら船橋を　（那）

七里通ひの手拭を、何處で落した覺えない、若し拾たる人あれば、はだの木綿と替へませう。はだの木綿がいやなれば、上着に小袖がいやなれば、腰なる刀と替へませう。腰なる刀がいやなれば、おれが乘馬と替へませう。己が乘馬がいやなれば己が乘鞍と替えませう。己れが乘鞍いやなれば、あぶみかいぐと替へませう。

白きうたほぎしよもんする　白き白衣白たより　越後の兎竹々の雪　（那）

十三姫御はよい夢初め、とうせん船を千艘へ、若狹へ下ると夢に見た、とうせん船には何を又積もよ、下に白銀上には黃金、中には綾の八つしめ緒、とうせん船の船頭殿は、腰にさしたる黃金の杓は、何になさる、とうせん船の垢をとる、とうせん船の船頭殿が、湊入りしておちよぼに惚れて居たぶんにやすまな、追手を見かけて船を出せ、西に棚引く嵐の雲に、船に漕ぎ出よ船頭殿艫を早や押せよ船頭殿。

節が三つ四つ〳〵まづ宵に殿御待つ節　夜中にまちて寢る節

住吉の隅に雀が巢をかけて　さぞや雀は住みよかろ

長者樣が長者樣が舟の下積何と見た、銀黃金を積むとみた、舟の上積何とみた、白髮糸を積むとみた、（拍子）朝日長者の寶には銀黃金を車へ附て、早う都へと急がれる、（拍子）白髮長者の寶には十二人の子供衆が、十二色にこしらへて早う都へと急がれる（拍子）朝日長者の寶より白髮長者の寶をば、先は見事と賞められた。（拍子）

釣瓶は九つ身は一つ汲みやれ、ひん田の石川でくんだる清水で影みれば、吾身ながらも良い御方
(拍子)ひん田の横田の早稻苗を、しほり〳〵と植ゑ置いて今來る嫁に刈らしよかな(拍子)腹立やひ
ん田の小藪で殿御を待てば鶯の聲で呼ぶひん田の小藪の鶯は、妻に戀しとなくなり(拍子)

大もん小もん　あけずの御門を　さらりと明けて見てやれば　庭に黄金の花が咲く　(那)

天竺の〳〵　御所のお庭に　うえたんる　松はから松から松の〳〵一つの小枝に　御しゆすんの
たかの　巣をくむ　かたはねは〳〵　しゞろからばい又かした　はねはむらさき　面白の〳〵たか
の巣おろし戀する姫には　見せまいサヽ　アミサーイヨエイサアミサイ

天竺の天の川原を尺八が流るゝ〳〵　取りあげて吹いてみたればせうある

貴い寺の門から見える門は白銀、扉は黄金敷屋や鴨居は皆黄金佛、壇掛りを見てあれば、總金造り
の佛壇に、御丈五尺の黄金の如來綾や錦の幡をかけ、和尚樣はよ例時する、さても見事な御佛前、
此樣な御庭で踊は恐れ黄金の眞砂が足につく、客殿かゝりを見てあれば、十七八の若しよけさたか
(?)烏羽色の羽衣召して高麗硯に油煙の墨で御經遊ばすやら見事。此寺に唐の茶臼七からござる、
挽くは小若衆まはるは茶うた、細かにをゆるこまのお茶。

常陸の國の小栗殿、相模の國の横山殿へごうぎ(强氣)の犇入をなされたよ。駒を看に出されたあら
良い駒よと賞められた。四足のかゝりを見てやれば、三年竹の節揃ひ、碁磐の上ですぐり立たる如
くなり、あら良い駒よと賞められた。鼻のかゝりを見てやれば、海に千年河に千年、山に千年三千
年の齡をへたる法螺の貝を二つ合した如くなり、あら良い駒よと賞められた。眼のかゝりを見てや
ればあかゞね鈴の張りだちへめつきをさいたる如くなり、あら良い駒よと賞められた。耳のかゝり
を見てやれば、法華經の五の卷を二卷合した如くなり、あら良い駒よと賞められた。髮のかゝりを
みてやれば繁りに繁りし山繁り、谷の嵐と峯の松風と一と揉みもんだる如くなり、あら良い駒よと
賞められた　脊筋のかゝりを見てやれば、荒木の弓張立ちへ弦をまなんでひと反りそつたる如くな
り、あら良い駒よと賞められた。尾へのかゝりを見てやれば、それ天竺のそれ天竺の音羽の瀧の如
くなり、あら良い駒よと賞められた。　(那)

豐後の館の召舟は舟は白金櫨は黄金柱は眞鍮蟬黄金　館へ參りてお家のかゝりを見てやれば八つ棟
造りで檜皮葺館へ參りて茶の湯のかゝりを見てやれば赤銅茶杓にたてたる若衆のふりを見よ　館へ
參りて武具の道具を見てやれば白木の弓は千捲ばかり黑皮縅が千五百館へ參りてかくし馬屋を見て
やれば紅梅月毛や鹿毛の駒百騎ばかりと先づ見えた

ほうごの〳〵津しま通ひに關屋々々で　笠を忘れた其の笠は　たゞの笠かよ　へりをば銀をまはし
て中は黄金の强筋　(那)

先づ一樣に御並よ、神の踊を一踊り。音に聞えし音に聞えし桑名の名所で宿取つて、いざや茲らで神樂參らしよ、神樂參らしようひーうろーやひやうろひやうろ。音に聞えし音に聞えし松阪名所で宿とつて、いざや此處らで、神樂參らしよ神樂參らしよ、ひーうろーやひやうろひやうろ。音に聞えし音に聞えし宮川名所で宿とつて、いざや此處らで神樂參らしよ神樂參らしよ、ひーうろーやひやうろ〳〵。音に聞えし音に聞えし山田の名所で宿とつて、いざや此所にて神樂參らしよ神樂參らしよひーうろーひやうろ〳〵。

まゝ雨乞殿の屋の棟に小鷹が見事に巣をかけた。一羽の小鷹の囀るは、稻穗は八本參るとや。二番の小鷹の囀るは、弓矢に冥加が御座るとや。三番小鷹の囀るは、小鷹の囀るはおやじよ(?)が參ると囀る。とも白鷺に文やれば、文は落してきよくもない。住吉の松を見さいよ雌松のまつは風にもまれて起き來る浪を招きそろ、日も暮れりやしよやもなりたよいざさら戻る。若い衆達若い衆達。

三井寺の前は松山後は丹後の入海に、入江々々に傳馬をつけて、中には鯉鮒、さんざい、浪立牡丹芍藥桔梗苅萱椿落葉松しけぎの職は面白やよ。

みかはの國のやはぎのしゆくへいて見ればイヤ　四方障子にしせつのしきに　あゆうれんの梅の花イヤ　池の中には島ついてイヤ島から陸地へ橋をかけイヤ　橋の下を眺むればイヤ　浦島太郎はつりのふねイヤ　とうぼうさくはうつろぶねイヤ　五色の糸でつながしてイヤ　東南かよふ風吹かばイヤ　みぎはへよれよとつながしてイヤ　サヽアミサイヨエイサヽアミサイ

皆一流にお並びなされよ、雨乞踊を一と踊りイヨ、一踊踊らうよ雨乞殿の御家は板金團扇でやら、見事美事、雨乞殿のよい弓取り上げ弓矢に冥加がありやうソヨ〳〵、雨乞殿の扇子へ小鷹ふた本繋がせた、一羽の小鷹の囀るに、おせり子が優れと囀る、二番の小鷹の囀るに、稻葉が八ぶん優りそよ〳〵是の御庭な七本小竹ヨフ、除てはゐんじようゐちた空ヒヨ〳〵、此れの御前に立ちたる花は、心は松竹下草椿花瓶の飾でやら見事ヒヨ〳〵ようさゝゝみさヨいぢゝみさ。（有）

南表をみてあれば、芽出度い雲がお立ちある、その打過ぎて西をみれば、西に立雲夕立雲、雨を降らして世の中を、お脊戸に井戸掘て水も出て來る米も增す、これの表へお田植ゐて、一鎌刈れば千把刈る、二鎌刈れば二千把よ、三鎌刈れば數知れずその米積りて富士の山、酒に造りて泉酒、其の酒きこしめす人は命長かれ末繁昌。

都から鶴と龜とは　とんで來て　此方のお庭に巣をくむ（那）

都に若衆は三人通る、誰方が之れの聟でそよ、黃金造りの刀を差して、編笠着たのは聟ですよ。烏さよ〳〵都の烏くしわりけぬきかぎかみ山へ。つくりかほ〳〵〳〵と歌うて通る歌うて通る。都で流行る麻白髮一抱右そにうんで左そこ繼いで闇の夜に、織りて月夜に晒して大津の浦の紺屋に遣り

て、片端に梅と椿とつはゞの蔦と、鮑の貝と反橋と、あの淀小橋かけませう懸けませう。淀の宇治橋籠目込めの鶯に飛ばいで果てよ、しきなよ鶯ばいではちよう食ふなよョウさゝみさいざゝみさ都踊是迄々々。

（有）

門のかゝりをみてやれば　銀柱にこがねの扉　大炊は唐の眞赤銅

（那）

向ふな山にて鳴く鵯鳥も鳴いては下り　鳴いては上り朝草刈の目を覺ますよ

やかたのかゝりをみてやれば　しろがね柱にこがねのたるき　葺いたる屋は板がね

大和の國のゆう關が城に御所が建つ、大和番匠京番匠、千人揃へてちよな初め、頃は八月十五日、桁梁皆上げてなんだんとゞろと足を踏む、今日の御幸行は誰、丹後の國の竹谷殿、竹谷殿の御出立、名主姿を見てあれば、上にはすゞしの織やはせ下には黄金の御袴、是程芽出度い折柄に、いでや友達見にまゐろ。

山伏や宿の姫子の目がくれて、峯入りすることはたと忘れた駿河山伏、山伏のひたひに當てたるときまで宿の姫子に目がくれて、峯入りすることはたと忘れた駿河山伏、山伏が首にかけたる袈裟ころも、宿の娘子に目がくれて、峯入りすることはたと忘れた駿河山伏、山伏が腰につけたる法螺の貝、宿の姫子に目がくれて、峯入りすることはたと忘れた駿河山伏。

やれ急ぎ〳〵急げしんぼうち　後から時雨がしてくるよ〳〵

やれ急げ〳〵急げ若い衆　お庭の松が見ゆる見ゆる

（那）

やれ新發意　急げ新發意　あとから時雨がして來る

夕暮に山に登りて見れば、沖から舟が三艘下る、商舟か御座舟か、あれこそ殿御の遊び舟、太刀や刀を帆柱に、綾や錦の帆にあげて、上から湊へをゝすとよ、上から湊の腰ぼそふに、何かなはかしてあよましよに、何かな着せてあゆましよに、昨夜迎へた花嫁に、何かな縫はして手めを見よ、三貫五百の帷巾を襟と裾を得つげずは、手利な嫁を呼び迎ふ、手利な嫁を呼ばゝ呼べ、吾親は七間半の板屋葺、四方四萬の倉を建て、乾の隅に龜七つ、七つの龜がざんぞゝめけば、良い酒古酒濁り酒、白銀のわけひしやく黄金を延べて柄に挿す。

よう御門々々つるの御門つるのと參りて、御門を見れば御門柱は黒金そろよ、即ち扉は白金そろよ、添うてうごいを見てあれば、四方島田に上げ下げさして、即ち小具足きりもない、添うてうごいを見てあれば、弓と槍とで天井を張りて、うつぼで壁板打たした、添うてうごいを見れば、七間馬屋に七匹たて七所の番所はかみを待つ城の御世帶此までいろよ、西に千貫三河に千貫卽ち都はやら見事やら見事。

よう春の初の鶯は何處如何にと飛んで來て、何を知緣に名を流す、春の初の鶯は梅の小枝に巢をか

けて、花は散るとも子は育つ、春の初の鶯は茶の木の小株に巣をかけて、茶の木は枯るゝも子は育つ、春の初の鶯は竹の小上に巣をかけて、竹は撓むも子は育つ、春の初の鶯は太鼓のしめ緒に巣をかけて、太鼓破るも子は育つ、春のはじめの鶯はかん鼓しめ緒に巣をかけて、かん鼓破るとも子は育つ、春の初の鶯は稻の小株に巣をかけて、稻は枯るとも子は育つ、春の初の鶯はよしの小上に巣をかけて、よしは枯るとも子は育つ。

よう春の初の初櫻紅葉の色に優るらむ、谷へ懸けたるしからみも紅葉の色に勝るらむ、深山の奥なさん鹿の紅葉の色に勝るらむ、深山の奥な八重櫻紅葉の色に勝るらむ、深山の奥な糸櫻紅葉の色に勝るらむ紅葉の色に勝るらむ。

我はおん國　國のもの　なさけかきやれよ　花の君樣　（那）

盆踊り歌

あら面白の折からは、ッ、テンドッコイショ、三五夜中の新月の色、秋を昔と思ひし頃は、いつの頃やら筒井筒、井筒の水も濁らぬ樣に、今は涙でえりかけ濁る、業平さんの御影みれば、ッッテンドッコイショ、姿やさしき吉野の櫻　花は散りても葉は殘る、笛や太鼓やちやんがらがんや、手拍

ちやんがらがん（樂器の名）

子木で打ちたゝく、在原寺の鐘も、その鐘眠をさます、ッ、テンドッコイショ、定めなき世はなりつねの娘の所存、交す枕は男の辯よ、夢もさめゆく面白や。（海）

有田みかんのいはれを聞けば、春の彼岸に肥しこまれて、一つ色付きや鋏でとられ、小さい籠にとつめられて、江戸に送られ問屋でうられ、いとはん坊はんに一錢二錢で買ひとられ、爪がた入れられ皮むかれ。（有）

幾千代久し松が枝の　君がさかえる若緣（東）

一合蒔いた籾種の　そのあり高は一石一斗一升一合と一勺（東）

いつも造らぬ甘酒を造り　ぬしにのませてきげんとる（東）

憂きことを語るも聞くも水泡（ウタカタ）の、昨日の花もあすか川、お宿を出でゝ二人連れ、二九と二八は妹山脊山、ついなかたのが石山となる、富士の山程のぼりつめ、たかしろ山を思へども、もはや世間の名も高尾山、義理にひかされ身は是非もなし、今宵は死出の山ほとゝぎす、鳴くに血を吐く、浮きなの涙、女心にくゞ〳〵と、お前忘れてゐさんしよ。（海）

内のお母さんてんべと顏で　あなごがほしてたべられん（海）

お江戸で高いのは日の出山　こゝらあたりで高いのは　小店の一合酒　こゝらで高いのは小店の一合酒よ　（那）

大島港は源氏の港　上り下りは頼朝ぢや　（東）

思ふ殿御が野邊ござるなり　涼し風吹け雨ふるな　（東）

音頭とる子は橋から落ちて　橋の下では泣き音頭　（東）

ごせい（よく働く）

京の北野の北新町の、　油名札孫佐と言うて、　自体孫佐はごせいな男、夜さりや四つまで油をしめて、朝りやとうから油をうりに、孫佐女房はお初と言うて、おはつの男か吉之丞殿よ、自体吉之丞ははでしやな男、一寸出るのも出しはなかみで、足袋はうんさいはらをのせきだ、うしやな羽織に梅わき紋、帶は當世流行の丸くけ帶、二こ廻してきちさとしめて、とんと叩いて後へまはす、五尺八寸おとしにさいて、チャラリ〳〵と新町筋を、誰も目につく吉之丞殿よ　ちよいと寄らんせちよつと寄らんせ、孫佐留守ならわしも寄りましよが、おしゆもない茶を唯がぶ〳〵と、一つのんでのその二つ目に、そこでおはつは悪口始む、さうかうするうち孫佐はかへる、孫佐かへりて立聞きすれば、孫佐殺すに藥はないか、孫佐殺すに藥はござる、山でつゝじかつるしの柿か、川で川魚、こんめにこしよう、青いとかげか蛙に蛭を、七日せんじて茶碗に一つ、さうかうする間に孫佐はかへる、お早よござんしたわしや待ちかねた、濡れた草鞋の紐ときましよか、濡れた草鞋の紐とくよりも、まゝを上れば七茶に茶漬、酒を上れば燗して上れ。　（東）

二・二（二まはり）

あらそんじよ（新佛）

切れてしまへば紘より細い　何故に他人が　可愛ゆけりや　（東）

切れてしもたら又新しの　掛けて樂しむ三味の糸　（東）

くろげ山を眺むれば　うぎんげの花はさかりと見ゆる　いざや若い衆　皆うちそろつて見物しよう　（東）

今年の盆に踊らぬものは　來年の盆にあらそんじよ　（伊）

戀風にそよと吹きくる夕涼み、人目にはなるる小娘は、顏につやある薄化粧、鶯びんに染帷子や、しゆすの帶卷、その風俗を見る若衆は、みな清夕方、いとし可愛や花ざかり、男ざかりは色ざかり後涼みてあひゑめ見そめ、一寸一筆君樣へ、送りまるらせ候かしく、文つけ文わけ文くぎき、可愛らしや殿御ぢやと、思ひそめたは損のはし、ついあひぼれぬ實となりて、戀ゝ情は身は捨て草の、かべにとまる、しばし間は手にきてとほす、手鍋さげても夫婦となりて、歌はる身の大旦那、命知らずの惡性者を、人さんしやべらさんしても、大事ないか、可愛からぢやない、憎いのぢや、何ほその身は歌はるゝとも、夫婦の緣の變らじと心乘るばかりやろ。　（海）

今度大和の吉野の里に、米屋娘においそといふて、きりようといふたら卵に目鼻、人によいきは吉野の櫻、おいそ〳〵と持てくる文は、馬につけたらさてきりはない、さうかういふ間においそは身持、三月四月は袖でもかくす、もはや七月ァあらはれ月よ、十月たつたらうまずばならぬ、生んで

とらげてその子をみれば、手足は人間顔は猫の顔、とりあげ婆さんの申することにや、これさおいそよ覺えはないか、おぼえない子はわしや孕ません、去年九月の十六日に、熊野權現へまゐりた折に、二十ばかりの若侍と、道の四五丁も道つれしたよ、おいそ〳〵と手をうちかけて、こんなしんじゆはわしやいつもある、猫としこざれ金持寶をくらべう、千の倉より子は寶。（東）

櫻花程色よく咲いて　落ちて木の葉の下となる（東）

樣よ踊れよ三十迄踊れ　三十すぎたら子がをごる（東）

三味は先生音頭は美人　三味で音頭は引立てる（東）

さらばこれからやりかけまする　あはんところは御免なり（海）

信州信濃の山べた奥に、後家の娘にようちよんまといふこ、ヤ、ヤレコラセーヨーイヤネー、嫁入ぎらひのヨコラ、商好きよソーラヤーアートコセーヨーイヤネ、手樽かたげてかん鍋さげて、馬の馬子衆に酒はと問へば、酒はもろはく値は二十四文、あまり高いはまけられちよまん、水は三割薪は五割、氷ごんにやくうれじまひ。（東）

好いておくれよこの提灯　決して苦勞はさせやせぬ（東）那智

その名ふれたや下津木の國生れ、御年十九に那須の與一が譽の次第、四國讃岐の屋島の磯で、源氏平家の御戰に、平家の方なる沖なる舟は、ことに扇を上げさす程に、あれを一矢で射落すなりや、我も我もと御前に召され、畏みたりと御前を下りや、緋糸縅の鎧を召され、五枚冑に鍬形うたし、黑き名馬をひき寄せたてて、手綱かいとりゆらりと乘りて、小松原より波打際を、しづ〳〵と歩ましければ、四國讃岐の屋島の磯は、風も烈しく波荒けれど、南無や八幡那須明神と、とんと唱へりや波風鎭む、沖の的も定まりにける、なだの源氏も定まりにける、要ごころをもんづりゆける、平家の大將舟ばた叩く、なだの源氏は簸をならす、敵も味方もよい見物も、與一與一とほめてける。（東）

揃うた〳〵よ踊り子が揃うた　ヨオーオーオイヨヨイ東窓からよオオチヨイト西窓へ　やつちんまかせいなあこりや踊れエな　よく踊れ信濃善光寺　なあこりや踊れ　踊りずき　一つ拍子を揃へてわたしがもろうたごつこいしよこらよう（東）

そろた〳〵よ上から下へ　鼠とらずの灰猫が（東）

高い山から谷底見れば　瓜は三味ひく　茄子は踊る　畑で南瓜が音頭とる（東）

寶くらべにわしは行て來たが　負けて來ました子寶に（東）

竹の切口溜つた水は　澄まず濁らず出ず入らず（東）

たゞ今の御先生の跡もろて、合ふやら合はぬやら知らねども、合はすは踊子の上手なわ、はやしをたのむぞ踊子よ。（海）

唯今の御先生のあともろて　合ふか合はぬか知らねごも　合はして頂戴踊り子よ　さらばこれより
文句に合はす　（海）

尋ねてござれ戀しくば　三輪のふたもとともつきん　（東）

千早振る神のめぐみでけに有難や、諸國諸島のそのはて迄も、御蔭々々と賑はしく、笠や手しまやこうりや杓で、春に多田や伊太祁曾參り、ついでながらも神過ぎて、日野長山を早や打越して、心丸栖や氣も荒川の、節も貫けたよ竹房を、お蔭さんなら無錢で渡そ、是も天照皇大神宮の、めぐみも深き粉河寺、高野をば手を引き合うて、若い娘の穴虫川へ、はまるまいぞや丸木橋、これ〳〵申し皆さんや、ほんに私はお蔭じぬけた、錢と云ふたら一文も持たず、何卒笠田と言ひかけられて、難儀な人に大谷や、妙寺過ぐれば夕倉の宿に、お蔭施行の宿有る程に、それへ行きやれと言ひ捨て置いて、走る橋本早や駈けぬけて、暗夜峠を闇むしよう、私とお前と合せ饅頭の名物買うて、連を待土（マッチ）の早や散財や、大和巡りは偖て大群集、人の絶え間もなき田江間寺（當麻寺）、中將姫は百駄の蓮で織表はせし大まんだらを、拜み濟んだら氣も清光寺、是は則ち中將姫のはちすの糸を一つの水で、五色に染めし染井寺、やれ心勞じやと腰打かけて、しりをくさらす達磨寺、世に名も龍田法隆寺、親子塚をば見たいなら、尋ねて此處に小泉の町、郡山をばあと西の京、奈良はむかしの都と聞いて、過ぎて行く年を數へて見れば、頃は文政十三年の、三月堂や二月堂、四月堂から三笠の山へ早う春日へ行て興福寺、ざつと見たなら此土地を、猿澤池の町筋ぬけて、帶をしなほす帶解の里、

柿の本には人麿の宮、さすが大和路名所多し、在原寺の此處は又、むかし男の古跡も有りて、心急いで外目に三輪の明神樣の、御神体杉の林のお山を拜み、早や長谷の大門前で、こいのぐわなら此の寺で、今宵一夜はおこもりなされ、長谷へ參りて早又ここに立木も知らぬ近道を、人をたよりに後からせけば、急げ歩めと追ひ分けられて、早榛原の此立岩は、左は青越え右の方大神宮の本街道で、入日社日のまだ赤羽根の、村を過ぐれて田口の宿で、名を聞くさへもおそろしや、馬もこけるで倉取坂で、是はやさしき櫻が峠、九十九折なる細道を、心勞〳〵と人々は、岩坂峠石、奈原音に聞えし貝坂ひい坂打越して、からきいきやらにがきの宿で、小石ふみ分け大石の、不動前なる設待茶屋で、施行茶粥をつる〳〵と、鶴の渡を靜かに渡り、大賀（相可）の町やせつたい籠や、馬で行けよと村はづれ、最早御伊勢も近いと聞いて、羽根があるなら鳥羽の茶屋、茶屋の娘の姿を見ればほんに神しきそのなりふりは、彼の古の楊貴妃か、小野の小町もかくやとばかり、見る人々は心もあとに過しけり、柳の宿も早や宮川の、御蔭渡てをにて〳〵と、長々川原石原通を、杖をたよりに足引きの、山田町は東西家なく、ほんにうれしや外宮前、思ひ思ひの吾身の願ひ、かけまく神の勿体なさを、云ふに岩戸や高間をゆりて、妙見町の万金丹や、老舗は古き古市の、芝居色町賑はしく、同行一人見失ひ、迷子番所の彼人頼み、やう〳〵尋ね又逢の山、お杉お玉のそのなりふりは、縞さん紺さん、淺黄さん淺黄のバッチのすねぬけさん、此處ばかりは、やてかんせ、二文三文御門をぬけて、急ぐ宇治橋早や本宮前、吾が罪科を知らだいに、頭すりつけ、手をうちあはせ、八十末社一々拜み歸り申すも目出たけれ。

月が出た〳〵明神山に　盆の夜更けぢや踊らんせ　（東）

月になりたや樣がすむ　閨の臥所を照らしたよ　（東）

時の間も濡れて乾かぬ二人が仲を、妹脊の緣にひかされて、おんいたはしや御寺の和尚、人もやさしき濱松さんが、私故にこそ和尚の掟を叛いて、お寺に入つてあちらのお寺で、三日三夜こゝやかしこで迷つてゐるも、みんな私がわるいから、これを在所の親達樣が、聞いて私をさぞ憎からう、ごうした因果な緣でせう、あかぬ別れは誰故に、かうなることゝ露知るならば、見初めなんだがよいものを、又もたづねるおらみゝぢや、娘心にやばせとはやす、はやうお顏が三井の寺、胸はごき〳〵鐘つく樣に、重い石山堅田におつる、あの雁がねのつがひ〳〵はあるなれば、私もお前の親達さんに、嫁と夢すて朝夕に孝行つくしたい、せめて一日めをとぢやと、言はれてかねつけ眉落し、今更云ふではなけれごも、やゝの一人も產んでから、死んで殘りのない樣に、何を云うても心は合はぬ、とんとお前にこれから先は、比良の暮雪と帶でもといて、世帶しましよと誓詞をかため、長き緣こそ目出度けれ。　（海）

時の間も濡れて乾かん二人が仲を、妹脊の緣にひゞが來て、おん痛はしやお寺の小姓、いともやさしき濱松さんが、わしのゐにとをお師匠の、お氣にそむいてお寺を出し、こゝかしこを迷つて居るも、みんなわたしがわるいから、私をさぞ憎からう、ごうして因果な緣ぢややら、あかぬ別れか誰故に、今更そんな胴慾な、殺したことゝ知るならば、見初めなんだらよいものを、京や難波にせきとめられて、よにもたづね大宮路や、娘心にやばせこはやる、早く顏を三井寺の、胸はごき〳〵鐘つく樣に、思ひ石山堅田に落ちる、あの雁がねのつかひシャン〳〵、使はあるならばわしもお前の親達さんへ、嫁といはれて朝夕に、孝行つくしたい、せめて一日めをとぢやと、言はれてかねつけまゆなほし、やゝの一人も產んだなら、死んで思ひはあるまいに、何といふやら心があはず、とんとお前にこれから先は、比良の暮雪と帶にもといて、世帶しましよと誓詞をかため、長き夢こそ目出度けれ。　（海）

通せんお船に　何によ積んだのよ　下にや白銀中には黃金　末ではあほやのやをすせず　はやいんようそりや　（東）

荷もちかちもちこあぎの暮し、くらす中にもよい子はひとり、よい子娘はおさんというて、おさんばばさん惡氣ができて、きちんきやめて六部をとめて、とめた六部は金持六部、今宵一夜で殺せよおさん、人を殺してわが身は立つか、金がほしならわし賣らさんせ、親のゆいぎにつかんかおさん親のゆいぎにつかぬと言へば、一生一代勘當でござる、そこでおさんも勘當にこまり、夜は九つ夜半のころに、化生（ケショ）かまよひか變けたものか、化生でござらぬまよひではない、わしはこの家のおさんでござる、今宵の六部に心があつて、親の寢間をば忍んできたよ、枕とりよせ手をうちかけて、一つ二つも小話すれば、道にくたびれ六部は眠る、眠る所をおさんはみつけ、左袂へさすがをしこみ、右の袂は今ふる涙、疊三丈は血うけとなりて、油樽へときちんとつめて、緣の下へとかくして

賣らさんせ（賣りなさい）
ゆいぎ（言ひつけ）

おいて、隣八軒知られぬうちに、天の罰かよお上へ知れて、親子三人引かれるときに、わしも五本の指をきる、ションガイナ

ばた〳〵つくなよばたつくな　ばたつきや見物人にごみかゝる　（海）

一、火影ゆれ〳〵お盆の祭　ヤットコラサノコラサノサット　唄もゆれ〳〵　人影をごろ
二、月が出た〳〵お山の上に　ヤットコラサノ　コラサノサッサ　唄でをごろよ兎のお餅
三、お淨土かよひのお客の迎ひ　ヤットコラサノ　コラサノサッサ　ところかざつたお盆の祭（那）

人にいはりよと云ひ騒がりよと　我が身にさん曇りがなか　（東）

人の口には戸が立てられぬ　流川瀧堰やならぬ　（東）

文明開化は開けた時節、女子供に至るまでアヽベチイベのドイツ語や、エービーシーの英語少し覺えて居たなれど、人の前にて大自慢これをものにたとへたら　四月頃の俄雨　はなにかけるでないかいな。　（東）

惚れちやならない他國の人に　末は烏のなきわかれ　（東）

盆が來たのに浴衣も持たぬ　をぢさ買ひくる紺絞り　（東）

盆に踊ればしなよくをごれ　しなのよいもの嫁にとろ　（東）

盆にをごらう正月にねよう　祭すし食て馬見よう　（海）

盆に踊ろか今年の盆に　腹に子はなし身は輕し　（西）

盆に踊ろとて笠まで買うたら　足はショウカチして踊らせぬ　（海）

盆に踊らう今年の盆に　お月山根にかゝるまで　（那）

盆の十四日に踊らぬ者は　猫か鼠か空とぶ鳥か　（海）

盆は來たとて嬉しゆはないよ　くさり帷子買てくれず　（日）

盆は來たとてわしや嬉しない　わしに盆着の沙汰もない　（西）

盆や來たらこそ黍に米をまぜて　脊戸の十八をあえものに　（日）

松は唐崎富士は紅葉　月を見よなら須磨明石　（海）

まるくなれ〳〵まんまるくなれ　（ハラサコラサ）　十五夜のお月さんほごまるくなれ　（市）

ヤッチョンまかせヨロときた　ヨイソラ十五夜お月樣　ヤッソラまんまるになれ　ヨイトソラアー

ヨイトソラ〳〵　アヽ踊子さんヨ皆さんヨ　お手にお足がそろたなら　アラドコサンデナーコラ

ハリワイサンデナーコラ　私の音頭がョ　皆さんの氣にいるやら知らないが　山路なれぞもアラ東は都　ヤ太鼓の音がする　アラドツコイサンデナーコリヤ　ハリワイサンデナーコリヤ　アラヨー　イ〳〵ヨヤサンデショ　（日）

夜前夢見た目出度い夢よ。正月二日の初夢に、あららぎ山の楠の木を、板に下して舟造り　造つたら船は今下し、椽は金ぶち櫓は黄金、七福神の乘合で、綾や錦の帆をあげて　あちらへゆらり　こちらへゆらり　船はお家の奥の間へ漕ぎつける。（那）

山が燒けるが立たぬか雁よ　之が立たりよか子を置いて（東）

吉野山を眺むれば　櫻の花が盛とみゆる。いざや若い衆達　皆打ちそろつて見物しよう（東）

世の中に今年は豊年穂に穂がさいて、諸國諸島のはてまでも。じんき祝つて賑はしく　踊る若い衆や娘の子まで、早稻や晩稻の花ざかり、二百十日のそよをさへも　かぜのたよりのない中に　一寸ひと雨降らせたい、なんのよだちに心はくもる、胸もはれゆくその頃は、天の與へか地のめぐみかと、金をもちまへ安氣にくらす。をものまちとて候と　こんなじゆん氣　唐へ行てもあろか、世間の人は皆よろこんで　私とお前と世帶をすれば、必ずよそ米さはらぬ樣に、うちの地米の味のよさ大豆小豆の月日を送る。まめでくらしてゐるわいの　じゆん氣祝ふて目出度けれ。（海）

わしの音頭は細谷川の　蟹の横ばひ後や先

じゆんき（天候都合）

しゆんだら（すんだなら）

私此頃胃病で困る。大便きつして困ります。お醫者さんに尋ねたら、これは電信針金を　藥研でおろして呑むがよい。これ又何故と問うたなら、電信機のことなれば　通じがよいでないかいな（海）

私の殿御は熊野の那智の　杉の若木を見る樣な（伊）

われは熊谷しや〳〵坊というて、小さい時から山へ行きそめて、鎌を腰にさし　さすふりかたげ高い山から谷底みれば、さても珍し千本櫻、もとへまはりて切らうとすれば、藪の中からきれいな娘これさ坊さんそれ切らんすな　昔平家の敦盛公の　しるし所へ植ゑたる櫻　花を見たけりや吉野へござれ、今は吉野は花ざかり。（東）

踊子が來るお寺の門へ　參る氏子にちりかゝる（伊）

踊子が來た吉野から　竹に雀の浴衣きて（東）

踊りやしゆんだら　ところてん出しやれ　それに酢もかけ　醤油もかけ（東）

踊る中でもあの娘が一ぢや　あの娘育てた親みたい（東）

踊るも跳ねるも　今晩かぎり　明日から田圃の草取や（東）

地方に關係を有するもの

有田田並の白塀の壁は　これも岬の潮のかけ　（西）
明けりや湯煙霞にとけて　とろり夢路にとう〳〵さそふ　（西）
淺い川ぢやと小褄をからげ　深くなる程まあ帶をとく　（日）
かゝもかゝだよ糸くりやめて　とゝもとゝだよマーひろひなか　（日）
顏は別嬪心は鬼よ　歩く姿は蛇の姿　（日）
朝のとうから辨當空さげて　おかんいてくら潮濱へ
兄井大根飯三谷の菜飯　敎良寺山崎芋茶粥　（伊）
會ひたくば訪ね來て見よ　信田の森に　いつも信田の森に住む
逢ひもせなんだか遠江灘で　白帆まいたる樽船に
阿波の鳴戸か岩屋の瀨戸か　たゞしや大阪の川入れか

伊勢の高見をやよ越す時にや　雨が降らねご袖しぼる
いたらみてこい新宮の城を　まへは堀川船がつく
一に鰹島二に櫛現いそ　三に尾の崎下り松
伊勢の鳥羽から乘り出す船は　つくよお江戸の品川へ
いたら見てこぞ有田の粟生（アオ）の　粟生の酒屋の常藏さん
行たら見てこら栖原の角兵衞　井戸の井筒の唐金を
いたら見てこら冬野の宮の　雄と雌とのみよと松
行つたら見てこら兄井八幡の　鎌を食ひとるいちの木を
いとやまいてから有島沖で　そろばん持たずのむかんぢやう
田舍なれごもたかばのひらみ　前にァみごりの島ごんす
田舍なれごも南部の國は　西も東も金の山
稻の波より外には立たぬ　こゝは平和の模範村

浮名たつても由良の濱よ。寢るも坐るも砂蒲團、ゆみず清水と主さへ氣よし、何の苦勞も由良の濱よ。腹にかな山浮世を背戸に苦勞知らずの由良の濱よ。

宇治はよいとこ西北晴れて　東山風そよ〳〵と

歌の出所は伏拜三越　うけて流すは松の木

江戸の越後屋のお竹を見よし　黃金ろは立つ此の世から

江戸のお江戸の淺草樣へ　參る女中の見事さよ

江戸へ〳〵と皆行てしまふ　後へのこるは嫁と姑　（海）

江戸へ行きたい江戸見て來たい　江戸の日ぐらし門見たい

エヘン〳〵とせいたなら　咽喉から唐橋とんで出た

お伊勢ふるいち出てくる時に　如何なお客も血の涙

お今大藏にお竹に遠井に　おます湯川の山本に　（有）

小川よいとこネ住みよいところ　山にや花咲くネ黃金咲く　アラボントニ　花咲く黃金咲く

谷は朝霧ネ夕は夜霧憎くや　生石はネ霧の中アラボントニ生石は霧の中

歌はうとても地聲でしやんと　此所は四つ辻人は聞く

大島浦から古座浦見れば　あさぎのれんはちら〳〵と　（西）

大島小島は兄妹島よ　何故に奥尻はなれ島

大島水谷かゝりし船は　おゆき見たさに潮がかり　（西）

學文路玉屋に尾のない狐　わしも二三度だまされた　（伊）

片男波にぞ乘り來る船の　櫓は一挺のいきほひ〳〵　（海）

悲しなつかしネ梅本川の　水の瀨の音ネ風の音　（東）

金がかたきぢや八丈が島へ　九錢五厘で流された　（東）

紀州大和の境目の櫻　枝は大和に根は粉河　（伊）

貴志のおひでも食はねばひだるい　叔父や叔母さはあるでなし

貴志の平池山東のお池　さては阪本すゞや池

岸の平池山東の小池さては　根來のじゆずや池

貴志の名勝白岩諸井　さては鞍掛烏帽子岩

貴志はよいとこ諸井に近こて　鮎のすしなの絶えがない

かいつぼ頭火やついた　ついたと思つたらひつこんだ

烏鐘屋の鐘たゝき　トンビとう屋の戸たゝき

深山ねえさんかんざしいらん　何時も山へ行て松葉さす

桶屋トン〳〵麥飯きらひ　おかは泣きもて米買ひに

わしは加太町磯邊の育ち　波も荒けりや氣も荒い

紀州田邊にすぎたるものは　お寺三箇寺に會津橋　（西）

汽車に乘りたい一番汽車へ　のりて紀州へかへりたい

紀州和歌山產物多い　中にも目立つ紀州ネル

紀三井寺の國みかんの所　冬になつたらみかんつみまち

今日は下るか明日は下るかと　眺め暮すよるゑす崎で

雲の一筋横ぎる富士に　太刀を佩かせて眺めたい　（海）

國は奥州白川谷の　火は名高き百江の川

毛見の毛見崎かゝりとはないよ　汐にひきられてふしよかゝり

粉河こんにやく岩出はしんこ　松江蛤加太わかめ　（海）

粉河夜に出て高野辻こえて　いこよ笠田よいとこへ

此所は何所やとまごさに聞けば　此所ははい原はせ街道

此所は原野よ向ひは孟子　中を流れる野上川

九重よいとこ朝日をうけて　東風の入船そよ〳〵と　（東）

高野山では三鈷の女松　御所の藥師ぢや五葉の松　（伊）

高野山には三鈷の松よ　鳥もとまらぬ御神木

こゝは播州姫路の城よ　向ふに見ゆるは淡路島

こゝは三毛島岩出のわたし　思ふ井坂はまだ見えぬ
岩出みたよな涼しい宮を　何で熱田と名をつけた
岩出御殿の傘松は　その名知られてお江戸まで
御坊東町はうきが入らぬ　大師堂詣りの裾ではく　（西）
古座の男は大根の輪ぎり　色は白ても水くさい
古座の川口廣い樣でせまい　古座の姉等は氣はせまい
古座の黒島鬼出た蛇出た　大きな蛇じやもの嘘じやもの　（西）
古座の黒島手にとるときは　こゝは紀州路かなつかしや　（東）
古座は片町樫野は山家　大島名所ぢや女郎ぢこぢや　（西）
サーサヤイコラサと乘り出す船は　命帆をかけアリヤ浪枕　ハツトセ〳〵塩釜街道に白菊植ゑて
何をきくよ〳〵　アリヤたよりきく　ハツトセ〳〵

塩釜出る時大手んぶりよ　秦社の宮からアリヤ胸勘定　ハツトセ〳〵　押せや二挺櫓で押せや　押
せば港がアリヤ近くなる　ハツトセ〳〵
西郷隆盛鰯かじやこか　鯛におはれて鹿兒島へ　（海）
堺住吉いとまにたいこ　流れついたよ加太浦へ　（海）
さへらとれ〳〵梶取沖で　とつておしこめ朝の間に　（東）
寒い冷こい日高の乞食　あらばおくれよ冷飯を
寒い所ぢやあの下里は　太田谷中のふきあらし
障子開けたら大島一目　何故に佐吉は山のかげ
塩津よいとこ朝日をうけて　日方あらしを帆にもたす
清水久野原三田とは云へど　知らぬ小峠を遠井まはる　（海）
心氣づいたか龍田の紅葉　日日（ヒニチ）毎日水鏡　（東）
新宮川口たてたる柱　すぐにお江戸の品川へ

新宮見たよな音無川を　誰がつけたか成川と　（東）

新宮見てから熊野地ァ名所　出船入船見て暮す

信州信濃の善光寺様へ　参るお方は數知れぬ

栖原瀧谷箕田の樂師　よひのねがひが今朝かなふ　（有）

關の五本松はおろか　祈るためなら指切りよ　（海）

勢多の唐橋あら金擬寶珠　水にうつるは膳所の城　（海）

大王まはれば的屋へ三里　的屋からには鳥羽へ五里

高い森ぢやよ八狼の森は　大田谷中にないもりぢや

高芝名物新宮屋のァーンビナーヨ　富助屋のうどんも味がよい　（東）

龍田川無理に渡れば紅葉が散るし　渡らにや聞かれぬ鹿の聲

龍田吉野も見る人なけりや　花も紅葉も谷の塵

尋ねてござれ戀しくば　三輪のふたもとともつきん　（海）

天滿てれ〳〵高芝くもれ　にくい下里ァ雪でつめ　（東）

天滿日やかげれよ　こつち日あたれ　籔の中の凉四郎屋　ひよごり　濱鳥　糞つかめ　後みよ狼

前みよ白いの　（東）

天滿撓臼　高芝ひきゞ　中の心棒は下里ぢや

天滿日あたれ　長屋はくもれ　長屋をさすな日もさすな　（西）

ぢこにゐるぞえ五月のはまに　紀州浦神松の本　（日）

戸津井善いとこ十九島受けて　前に泉水懸船

鳥羽で三十日安來で二十日　思ふ二木島でたゞ七日　（東）

鳥羽のはしり金桑名の渡　金がなければ渡られぬ

鳥もかよはぬ八丈島に　流され行くはわしやいとはねど　後に殘した父母はどうして月日を送るや

ら　空飛ぶかもめ物言はゞ　便りもことづけよ　何をいふてもおし鳥〳〵　（有）

とろり〳〵と長谷川谷を　汗を背中にお岩坂

富田川にも川の瀬二つ　とんだ高瀬と市の瀬と　（西）

鞆淵よいとこ高野のふもと、秋の紀伊富士柿の村。鞆淵よいとこ鶴姫橋や、國寶御輿見にござれ。
鞆淵よいとこ紅葉の秋葉、見ゆる白浪和歌の浦。鞆淵よいとこ水晶の岩瀧、百合の花咲く苺なる。
鞆淵よいとこ飯盛の道を町に出る娘の縹緞よさ。鞆淵よいとこ夏知らぬ國、蠶飼ふ村絹の村。（那）

とんと鞆淵中野の鐘は　一里きこえて二里ひゞく　（伊）

ごんごんごとなるとこアごこじや　大阪芝居の寄せ太鼓

長い長谷短い津川　栗とさゝげと花かつた

那智のお山で今朝切る竹は　あれはなにだけしるしだけ　（東）

那智のお山で今朝たく護摩は　にほひほんじるわかごまぢや

那智のお山にアせんよの椿　花は千咲く實は一つ

那智のお山に鰯がとんだ　井關川せきあみこさへ

那智のお山の二の瀬の橋は　大工からかよ枝からよ

七つまぎれて八つめの風に　入れてごんせよ二の浦に

なろた〳〵よ串本節を　尻をひつくりやけて走るよな　（西）

何と云うても阪野川みやこ　七つ下れば市がある

二色袋へ二部（二分）金入れて　岬詣りはうはの（上野）そら　（西）

二番紀三井寺　三番粉河　五番泉の牧野寺　（海）

二番紀三井寺　三番粉河　一番熊野の那智いさん

のみやひき臼背たらうてくじゆて　那智のお山を今日越えた

橋を渡れば拜殿見ゆる、よいことぢや塩釜か太鼓橋、かたわの足の鐵砲蟹、音に名高い葦邊屋で、
牡蠣飯たいたり炊かせたり、そこの望海樓でちよいと一服腰をかけ、東照權現さんを伏拜み、ござ
れまゐりましよ、玉津島へ參詣して次は根上り松歸り道。　（海）

橋のらんかんに腰打ちかけて　向ふ見えるは岩屋山

芳養で八幡南部で鹿島　東本庄で一の宮

腹はへり込むこれからいんで　櫃の中山　嵐山　（海）

もなれの松
（根上り松）

比井へはいろか小浦へ寄ろか　思案なかばの中出磯
日方黒江はねぶかで育ち　中は空でも身はやつす
吹くよ潮風扇ヶ濱に聲は　地曳かもなれの松か神島島島ヤレキタサ潮がみむ　（西）
富士の高嶺は世界に一つ。天津日嗣の照す國、雲に聳えた富士の嶺見れば、天津空まで君が國。富士と琵琶湖を天地に殘し、花が埋めた春の國。　（海）
船は袋に身は串本に　心古座浦中の丁に　（西）
岬々は七浦みさき　潮の岬は荒たきじや　（西）

和歌の浦

昔なつかし紀の國音頭　磯の小唄か乙女唄か　和歌の浦曲の片男波よ
和歌の浦曲に夕彩さして　金波銀波の躍る波間を　眞帆や片帆の舟がゆく
一に權現二に玉津島　三所熊野にまゐる巡禮紀三井寺には鐘がなるよ
三つ葉葵の紀州の館　虎の伏す山常盤木の間に　今も聳ゆる竹垣の城よ

岩にせかれた日高の川は　戀に狂ふか涙流した娘　道成寺の清姫樣よ
雪に南部の梅が香そへて　ゆかうか湯の町おいで湯の町　湯崎の白濱熊野の溫泉へ
紀州平野は大師樣よ親子泣かした　籠かむろ屋木の間小暗き不動の坂よ
瀞の八丁屏風の岩よ　山は新綠水は清澄　秋にや紅葉で化粧するよ
那智の大瀧飛沫の煙　昔や文覺今も行者の　まゐる姿の白裝束よ
鯨潮ふく熊野の灘に　主を氣づかふ暴風雨の夜さへも　潮の岬にや燈火がともるよ
鮎は紀ノ川紀州のネルよ　沖の白帆に積んだ荷物は　お國自慢の有田の蜜柑よ
名所々々は藥師の瀧よ　上に桝形下には大師岩にかづらがまひ下る

南部の唄

ヤァー海を眺めつあの山超えて　汽車は紀南の夢心地　ヤッコラソラソレ〳〵　降るや南部は松の風　コリヤサツコリヤサツコリヤサツサ。
ヤァー梅が咲いたよ南部の里に　汽車の窓まで香が匂ふ　ヤッコラソラソレ〳〵　誰に思ひを寄せるやら　コリヤサツコリヤサツコリヤサツサ。
ヤァー南部入江に松吹く風が　磯の鹿島へ行きたがる　ヤッコラソラソレ〳〵　わたしやあなたのそばへ行く　コリヤサツコリヤサツコリヤサツサ。
ヤァー南部來るなら千里の濱に　一度よらなきや歸られぬ　ヤッコラソラソレ〳〵　沖の小舟は波まかせ　コリヤサツコリヤサツコリヤサツサ。

ふうじ梅（梅のたれをぬいて紫蘇で包んでびんづめにしたもの）

ヤアー花火祭や夜照る月も　仇の情ぢや通やせぬ　ヤッコラソラソレ〳〵　雲をはなれて會ひに來る　コリヤサツコリヤサツコリヤサツサ。

ヤアー口に云ひたい思はあれど　心包むかふうじ梅　ヤッコラソラソレ〳〵　人に知れずに都迄

コリヤサツコリヤサツコリヤサツサ。

ヤアー海を遙々大漁の船が　空の夕やけ背にかへる　ヤッコラソラソレ〳〵　眼鏡岩まで赤くなる

コリヤサツコリヤサツコリヤサツサ。（以上）

休む心は千疊敷よ　九尺長屋に伸ばす足

矢立腰にさいて花坂超えて　高野の大門横とびに

ゆけば小匠いてみりや都　人の心は栗のいが

若い衆ら赤い襦袢着て何處行くと聞いたら　須江の伊平治の御大師參り　（西）

和歌の浦には名所がござる　權現玉津島芦邊三つ橋不老橋　塩濱拜殿片男波　かすかに見ゆるは布引紀三井寺　毛見琴の浦　（市）

和歌山のやれ材木屋のごけさんは　大きないろしやでござるよ　（海）

わしの兄弟七人でござる　京都伏見と淀と兄きや丹波で妹は江戸親は駿河でわしや此處

わしは紀の國蜜柑育ち　色ではだかになりました　雪の中でも丸裸　さむ〳〵

わしらおとろし　あいぜき浦が岩に花咲く人をとる

わしらおとろし狼谷　牙をそろへてかも〳〵と

わしら串本西濱育ち　色の黒いは御免なり

わしらとのさはあいぜき浦で　オホンサイテコイの木やりする

わしら若い時津荷まで通た　津荷の「ごめき」で夜は明けた　（西）

私しや九度山ねむるとすれば　紀伊の川瀬が目をさます

わたしや山の子ネ深山育ち　山で暮すもネ苦にならぬ　アラホンニ深山も苦にならぬ

あしべ節

和歌の浦にはヨー。アー名所がござるアラヒテノショ。御座れ芦邊に田鶴もゐる。田鶴もゐる。ヨイヨイヨイヨイヨイヤサ。

あしべ茶屋からヨー。アー紀三井寺見れば、アラヒテノショ。曳きもよせたい花霞。花霞。ヨイ〳〵〳〵ヨイヤサ。

月が出た出たヨー。アー紀三井寺に、アラヒテノショ。君に見せたい月が出た。月が出た。ヨイ〳〵〳〵ヨイヤサ。

月は朧にヨー。アー塩竈けむるアラヒテノショ。今宵逢ふ瀬も玉津島。玉津島。ヨイヨイヨイヨイヨイヤサ。

思ひ三つ橋ヨー。アー渡れば妹背アラヒテノショ。添つて千歳の下り松。下り松。ヨイヨイヨイ〳〵ヨイヤサ。あしべよいとこヨー。

アー妹背をちぎるアラヒテノショ。ぬしと不老の友白髪。友白髪。ヨイ〳〵〳〵ヨイヤサ。

いこら連れもてヨー。アーあの和歌浦へアラヒテノショ。芦邊戀しや夕涼み。夕涼み。ヨイ〳〵〳〵ヨイヤサ。

いこら連れもてヨー。アー相合傘でアラヒテノショ。而もしつぽり不老橋。不老橋。ヨイヨイ〳〵〳〵ヨイヤサ。

五十五萬石ヨー。アー葵の御紋アラヒテノショ。見たか御威勢の和歌祭。和歌祭。ヨイヨイヨイヨイヨイヤサ。

あしべ廻れば塩釜樣よ。主の赤兒産む願かけに、アラヒテノショ。つれもて行こら。ヨイヨイ〳〵〳〵〳〵ヤサ。

あしの葉ずれについだまされて、樣の舟かと磯へ出る。アラヒテノショ。つれもていこら。ヨイ

波もさゝやくあしべの宿に、結ぶ夢さへ月と花。アラヒテノショつれもていこら。ヨイヨイヨイヤサ。

誰を松原洲崎の千鳥、啼いて幾夜を片男波。アラヒテノショつれもていこら。ヨイ〳〵ヨイヤサ。

松は根より強氣で通す。妾しや弱氣の下り松。アラヒテノショつれもて行こらヨイ〳〵ヨイヤサ。

戀し片男の波打つ濱で、待てば朧の月が出る。アラヒテノショ。つれもて行こらヨイ〳〵ヨイヤサ

一に權現紀州の花よ、今も榮えを三つ葵。アラヒテノショつれもていこら。ヨイ〳〵ヨイヤサ。

出島若衆のヨー。アー腕見てくりやれ。アラヒテノショ。腕は櫓で練る櫂でねる。櫂でねる。ヨイ〳〵〳〵ヤサ。

波もおさまるヨー。アー蓬萊岩にアラヒテノショ。晴れて嬉しい夫婦鶴。夫婦鶴。ヨイヨイヨイヤサ。

和歌の海苔舟ヨー。アーぬれるも嬉しアラヒテノショ。色も香もある共かせぎ。共かせぎ。ヨイ〳〵〳〵ヨイヤサ。

月は高津子ヨー。アー花新吉野。アラヒテノショ雪に思ひをつのらせる。つのらせる。ヨイ〳〵〳〵ヨイヤサ。

踊りませうヨー。アー餅つき踊り、アラヒテノショ。杵も勇まし和歌祭。和歌奈。ヨイヨイヨイ〳〵ヨイヤサ。

芦邊浴衣のヨー。アー帶ときましよ。アラヒテノショ。あびて氣のよい土用浪。土用浪。ヨイ〳〵〳〵ヨイヤサ。

芦邊よいとこヨー。アー涼しい風をアラヒテノショ。芦柄團扇に思ひ出す。思ひ出す。ヨイ〳〵〳〵ヨイヤサ。

串本節

あの娘よい娘ぢやよつぽどよい娘ぢや　あの娘と暮すなら三年三月でも

大島水谷かかりし舟は　おゆき見たさに汐がかり

お前百までわしや九十九まで　共に白髪の生えるまで

ここは串本向ひは大島　中をとりもつ巡航船

ここは串本向ひは大島　橋をかけましよ舟橋を

潮の岬に燈臺あれど　戀の闇路はてらしやせぬ

潮の岬でごんと打つ波は　可愛いショラさんの度胸定め

障子あくれば大島一目　何故に佐吉は山のかげ

つゝじ椿は岩間をてらし　背美の子持は濱てらす

一つ二つと橋杭たてゝ　心とゞけよ串本へ

日和東風ぢや沖や白波ぢや　殿御やらりよかあの中へ

岬々は七浦岬　潮の岬は荒瀧ぢや

よいしよ〳〵で儲けた金を　よいしよ〳〵でチヤ〳〵ムチヤコ

わしのショラさん岬の沖で　波にゆられてかつを釣る

わたしや串本兩濱そだち　色の黑いはぢめんなり

昔の囃はエヂヤーナーイカエヂヤーナーイカナーイカ
今の囃はヨイショヨーイショヨイショヨーイショヨイショ．

勝浦節

勝浦節をば歌うてノーシ　鰹節より全くあァじがあるノーシ　ホーラノエエヽヨイヤサノサアイヨイヤサノサアヽヨイ〳〵ヨイヤサ

心はる風萬疊ケ敷ニノーシ　好いた同志の汐干狩ノーシ　ホーラノエエヽヨイヤサノサアーヨイヤサノサアーヨイヨイヨイヤサ

和歌の浦

和歌の浦には名所がござる　一に權現二に玉津島三に下り松四に塩釜　ヨイヨイヨイトナ　（海）

和歌の夜道を提灯さげて　たゝぶら〳〵と杉の木陰につまづきて　ちん〳〵血みだらけ血止ないか　（市）

と一寸たもと草

和歌の名所のあらましは　權現　玉津島　芦邊　三つ橋　不老橋　塩釜　片男波　かすかに見ゆるは　拜殿　布引　紀三井寺　（海）

和歌のもぎりは唯一人　私のこぶたにけつまづき　（海）

新宮節

新宮よいとこ　十二社さまの　セノヨイヤサノセー　神のましますよいところ　エッサ〳〵ヤレコノサヒヤーリハリセ

不老不死なら新宮においで　セノヨイヤサノセ　秦の徐福の來たところ　エッサ〳〵ヤレコノセヒヤーリハリ〳〵セ

御燈祭りは男のまつり　セノヨイヤサノセ　山は火の龍上り火よ　エッサ〳〵ヤレコノセヒヤーリハリハリセ

新宮名物ブロペラ船は　セノヨイヤサノセ　客に上下の隔ない　エッサ〳〵ヤレコノサヒヤーリハリ〳〵セ

新宮名物川原の町は　セノヨイヤサノセ　出水さへなきや倉が立つ　エッサ〳〵ヤレコノサヒヤーリハリ〳〵セ

好いて好かれた音無紙　セノヨイヤサノセ　辛苦忘れてなるものか　エッサ〳〵ヤレコノサヒヤーリハリ〳〵セ

色は黒木のねぢ八巻で　セノヨイヤサノセ　廻す筏の貯木場　エッサ〳〵ヤレコノサヒヤーリハリ
〳〵セ

田植歌

秋は來たとて鹿さへ啼くに　何故に紅葉は色づかにや　（西）
（朝）朝岡の溝で琴の音がし候　けせんやひくやら琴の音がし候
（晝）晝の御殿で箸の台忘れた　武の殿原
（夕）日暮の千鳥傘の緣を廻る　廻りこて廻らん上りとて廻る　（海）
あれ見よ日を見よ山の原にかゝるぞよ　かゝらばかゝらせ月の出さを樂しむよ
雨は降れ〳〵七十五日　お日が照るなら百二十日
祝ひめでたく始めた仕事　祝ひめでたでをさめたい　（日）
歌ひませうぞなたでも　會ふも會はぬもまれないこと
歌を歌へば千までつけよぞ　歌はたもとに千もある　（日）
唄うておくれよこなたの所でも　聲そへてよ
植ゑたればやれ美しや　さながらごばんの面　（東）
植ゑをへて後を見たらば　田中へ笠を忘れた
おいとしや梅の花　師走に咲いて霜にうたれる　（那）
おいの見たけりやいのぢへお出で　おいのアいのぢの田の主よ
おかた出て拜め　あれこそ天の岩戸拜めよ　（那）
拜みましよ〳〵　お日樣山の端へかゝるぞよ　かゝればかゝれ　お月樣山の端へ出て待つ
おち合のふぢの娘　左近の嫁になるはしやわせ　（那）
大田の眞中で錆びた鎌拾うたよ　とぎにやれよ磨きにやれよもとの鎌になろぞや　（日）
面白いだよ田植の仕事　殿と二人で苗をさす
おらが植ゑたい住吉さんの　おしよじたての姐さんと　（海）

いのぢへおいで（稻田へ來なさい）
ふぢ（家名）

可愛らしい心の花　二階に咲いて末は三角　（那）
門に立ち花れんじにもたれ　内の樣子をきくの花　（西）
去年五月に投げ苗貰ろた　今年五月に投げかへす　（日）
こいでこいでと待つ夜は來いで　待たぬ夜に來て門に立つ　（西）
五月五日のちまきの餅は　千重巻かれて只一夜　（西）
五月いつなら夏至何日なら　夏至に殿御が來ると言ユた　（海、西）
五月田植に泣く子を欲しよ　乳をのましよと腰をのす
五月三十日（ツゴモリ）來なよいのよ　晝は水田でくたびれる
五月三十日來るなよ殿御　晝は田植で夜さこわい　（日）
五月水程にしぼられて　今は秋田の落し水
五月ならこそ思はんさんせ　肩をならべて田植する
五月の夏至の日に大きなものが流れた　若い者は何時でも見るぢいさん婆さん出て見よ　（海）

粉河には木綿はないか　狸の布を脚絆にまく　（那）
こゝ植ゑてあそこ植ゑて　まだ日があれば苗代まで植ゑよ　（那）
こゝは道端ごばん目に植ゑて　思ふ殿御に見て貰はゝ　（海）
こゝは道端ごばん目に植ゑて　人にほめられよう　（那）
今年の米は豐年で　此方で二石とれまして　あちらで三石とれまして　合せて五石せんじうした　（海）
この草をたくらげてしまうたら　いなごはどこに住まうによ　しますゝきよしの葉に　てんとやと　（海）
こつや　（那）
此の頃は田植時よ　かす上畑の麥はびわ色　（那）
此の田には朝日を植ゑて　朝日の米は千本榮ゆる　（那）
この向ひのぜんまいわらびは　何故に腰がのらぬよ　姑婆にいぢめられ　それで腰がのらぬよ（東）
今朝田に下る主に物云ふたかよ　霧深し主見えなんで　物云はうに云へなんだ　（海）
猿が三匹さゝらをすれば　木の葉が下で舞をまふ

しゝがせのろくの大夫さん　さしたる刀の目ぬきぢやよ　獅子牡丹や竹に虎　鮎や鯉の目ぬきぢやよ　（海）

獅子に牡丹や竹に虎　あいやこーいの目ゆきじやよー

七月月には何にやたちやよ　お寺墓所に花がたつ

清水の舞臺からてんまりついたら　おいとしよ　腰骨へしながよくて　てんまりついたらおいとしよ　（海）

正月月には何にや立ちやよ　門には門松さゝ添へて

二月月には何にや立ちやよ　ばくちに負けて腹がたつ

三月月には何たちやよ　いとさん祝うて雛がたつ

四月月には何にや立ちやよ　卯月八日の花が立つ

五月月には何が立ちやよ　ほうさん祝うて幟たつ

六月月には何にや立ちやよ　菖蒲團のごみがたつ

十七や田植ごしらへ　髪にかんざし花笠　（海）

十七や稻とる手先は　音羽の瀧の水の音

はがゐ（鳥の兩方の翅のこと）

此の田をやつざに植ゑやけて　よだてする迄ようやらぬ

そうとれやれとれ　主はおせきなされる　苗の小根には小草がちぎりまいて取られんよ　（海）

田植するのを前から見れば　菅の小笠が唄うたふ　（那）

田植ゑた事がないよ　いとほしや殿の田植姿よ

田植苗取桑摘茶摘　戰する氣で皆稼ぐ　（那）

田を植ゑた事もない　みんなの植ゑ姿　（那）

チョ〳〵と啼くは千鳥　鳴かずに立つは池のおし鳥　（那）

ごなたも大儀此の田の中に　御酒をあげたい

殿よ來るなよ此處　四五日は　晝は水田でくたびれる　（日）

苗で三尺　穗に出て五尺　さても珍らしい熊野早苗

お江戸びらしやの煙草入上げりやよ　銀の金物つるの繪のよ　ヨイ〳〵

銀の金物そのつるのゐのよ　はがゐそろへて飛ぶところよ　ヨイ〳〵

並んだかよ並んだら植ゑんのでござんするよ　目出た目出た　苗うゑを祝ひ　今年や豊年でござんするよ　（海）

二百十日に風さへなけりや　百に三升の米かまそ　（熊野）

ねてもかまんか此の田の中へ　おこりアしないか田の主は　（東）

一誇り誇れよ早乙女　あがりは顔知らぬか　（東）

日は晝ぢや起きよ嫁御　朝日は御門へさすぞよ　（東）

ヒョ〳〵となくはひよごり　小池にすむはをしごり　（東）

紅は五月にこそ咲け　春三月はあだ花　（東）

一、まだまだはねて出ませうら　ヤアレ今の間にこれも

二、こりや一つこんなんごうぢや　一つひともじ花盛り　二つはふじの花盛り　三つは蜜柑の花盛り

四つよめなの花盛り　五つ苺の花盛　六つむかごの花盛

七つなづなの花盛　八つやまぶきの花盛　九つこうめの花盛り

十はとつくりで　お酒を入れて流しました　（日）

まくれ出る（一齊に出る）

水にうつゝたあの星の影　手にとる樣でも儘ならぬ　（東）

三輪崎の婿は來たかよ　かさゝしかけて櫓を押す　（東）

三輪崎は入江小右所　佐野は名所の田所や　（東）

三輪崎を夜更けに通れば　何事をするやら子が泣く　（東）

向ひの門松に戀の鳥がとまるぞや　さてやあれ戀の鳥をみずに　戀をなさるぞよ　（海）

向ひの小寺のョなじよに鐘いかにや　鐘や女郎とつりかへて　かね〳〵うての手拍子ぢやよ　（海）

めでた〳〵苗植を祝へ　今年や豊年でござんするよ　（海）

もうはね一はね　はねてョウ　植ゑて出よらョ　（那）

山家へ越したれぞ　白黒まだらの犬が恐ろし　（那）

山家へやれいたらこそ　いろ〳〵のみせもの見て來たよ　猿の藝や犬の藝や　めくらのとりさし見て來たぞよ　（那）

やれ急け船頭ぞの　紀の川水はまくれ出る

山を見れば西の山の端に　掻い田ははるか　（東）

よう並んだかよ、並んだわよ、およそ並んだら唄はうらよ、こんたんづくしで申しませう。

一つこんたんごうならよ、ほんない引きつれ出かけるわ、師直なんぞでごんすらよ、文のつかひは袂から。三つのこんたごんうならよ、みすてごもんのかたづまで、お輕に勘平さん色話。四つのこんたんごうならよ、よく〳〵會ひたい由良之介、あはずに死ぬとは殘念な。五つのこんたんごうならよ、息せきかよたる與一べが、後から親父と呼ぶ聲が、定九郎等でごんすらよ。六つのこんたんごうならよ、ひごい人だと母樣が、浪は數々勘平に。七つのこんたんごうならよ、何にも知らない妹に、つとめをさすとは胴慾な。八つ山科さしてぞ嫁入りに、いまやの屋敷がもうそこか。九つ盧無僧姿で本藏が。十とりての役人とりまいて　儀平の長持ごつさりと。

船頭歌

北ごち（東北風）

雨風にくれてまぎれるその夜のつらさ　もうこそ止めます舟乘を

雨は降れ〳〵千百日も　綱もいかりもくさるよに

ありやさこりやさと押しこむ漁船　旦那よろこぶ浦勇む

一歩くらんせよー木舟の船頭　松葉舟さへ二歩くれたヨイ〳〵エーサー　（海）

伊勢の小山吉田のならひ　尾張北ごちやいつも吹く　（海）

一歩くだんせ菱垣の船頭　尾張しば舟二朱くれた

歌は字でつむぬのをさでつむ　大阪川口舟でつむ　（海）

追手吹かせよ船頭の手まへ　錨とるまに風かはれ　（海）

親子船かえ金なし船か　いとや港を見て通る

親子船でない金なしでない　吹いたあらしはとめられん

かつらひたての東明崎で、女郎にふられし悔し波、一分くだれも勝浦の船頭、二河の薪船お二米くれた、かつら燒けてもさんやれ屋は殘れ、熊野かつらの女郎のこれ、入つた〳〵よかつらの港、お湯に入つて女郎かひて、船の艫から勝浦の町見れば淺黄暖簾がちらちらと、舟の船頭さんなに着てねるの、こもしきねにかいまくら

紀州船かよ天福印　他國船かよ布印

紀州船なら絹糸でつなげ　他國の船なら押しながせ　（海）

金比羅船々追手に帆かけてシュラシュウシュ　まはれば讃州那珂郡象頭山金比羅大權現一度巡りて

金比羅ふね〳〵シュラシュウシュ　（海）

この前通る親船は　金繍緞子の帆をまいて　おぬいを乘せてぷい〳〵　（西）

さまはみかんのいちばんつんで　花のお江戸へ初下り

寒い北風今日南風　明日はおきなのつむじ風

三十六反帆をまきあげて　まめでゐよとの手をあげる

たなみたん岬いはくはのらん　岬おしこめ二丁がへで

旦那せかんすな汐さへよけりや　小判千兩は朝の間ぢや　（東）

千兩くれても船乘りやいやよ　板は一枚底は地獄

泣いて涙をこぼさぬ人は　芝居役者か夏虫か

何といつても船津は港　出ぶね入舟絶えがない

塗は金箔紋は蔦の紋　あげる帆影は上天び　（東）大島

話屆かぬプロペラ船で、燃える思ひを目に云はす、二人樂しいネエ河のぼり、着いたや三輪崎組は

サア　三輪崎はな親もとりそへ子もそへて、前なろくろへかゞすをつけて、サアかゞすをつけてな

大背美まく樣なひまもなし。一國二國三國ぢや大背美取りそへました。二人樂しくねし河のぼり着

いたや、三輪崎組は三輪崎組はなし　（海）

吹いた東風なら加太まで通せ　かだの女とから西やまぜ　（海）

船に乗るとき船頭さんたより　他所にかたづきや婿たより

船の船頭さん何故色黑い　海にシシする天のばち　（海）

舟の船頭さんにあげたいものは　舟のかやらぬお守を　（海）

船の船頭さんに誠があれば　立つた帆柱に花が咲く　（海）

舟はしんさで櫓は荒木でも　押さな登らんこの瀬戸は

船は帆まいて嵐で歸る　宿の娘は出て招く

舟は櫓まかせ櫓は潮まかせ　わしは二人の親まかせ

船も早かれ追風もよかれ　着いた〳〵港で　ヤンレ田邊節世の中よさ〳〵

みかんぶねならいそいでのぼれ　みかんは金物くさりもの

岬下端で汐切る時に　親は是非ない妻戀し

岬よいとこ朝日を受けて　東風の入りふきそよ〳〵と　（東）

向かふへ見えるは米屋の船か　ますにとかきの帆が見える

目出度いな、御代はめでたいな、若枝も榮ゆる、木の葉も新玉の、年の始の御船うけ、よろづ寶を積みをさめ、さて又よもを眺むれば、蓬萊山のいさごやま、鶯は初音をあげて見下せば、すはまに遊ぶ瑠璃の亀、ちよきやちよき、千代の緣の聲をあくくれば、松にとまりし雛鶴の、豐にすめるひよとかや、目出度いな、若枝も榮ゆる木の葉も　（海）

目出度いな、御代は目出たいな、若枝も榮ゆる木の葉も御代は萬年、松坂長久目出度く立出で、こゝはさうしとうちながめや、知るも知らぬも大石を、海見て通る宮の前、麓に近くはれの宿、音にきこえし高見峠を登りつゝ、權現樣を伏し拜み、あらすさ末社此處に又、おにが茶屋はこれぞかや最早板をもすぎの谷、わしかの宿もうちすぎて、人の心もみつ茶屋の、吉野の花もさかりかと（海）

櫓かいとられて私しや沖の舟　ごこに取り付く島もない　（海）

麥打歌

ア、ヨーイ〳〵一息唄うて　煙草休みをしようでないか　（海）

安藝の宮島廻れば七里　うらは七うら七えびす　（海）

朝のかゝりにこれはと思ふた　これで打上げかやれ嬉し　（那）

朝のかゝりにやこれはと思うた　これは終ひかおめでたや　（那）
暑い〳〵と思へば暑し　何のこれはと思はんせ　（日）
暑いしんごい手拭ほしや　さまの浴衣の袖ないと　（那、海）
江戸のしんぶき小判の金は　稼ぎさへすりやこゝにある　（那）
えらい者ぢや殿様ごとは　紀州紀の川米でせく　（海）
お池のごふしん高いところにごやせよ　あらほを見かけてしつかりと打て〳〵
終へたよ終へたよ此の麥は終へた　糠は神樂に舞ひ上る　（海）
大阪出てくれや道頓堀の　鳴るよ芝居の寄せ太鼓　（那）
お前さんかえよう來てくれた　あがれちやちやのめ煙草飲め　（海）
お前一人か連衆はあるか　連衆は後から駕でくる　（那）
思ひ出すぞよ四月が來たら　麥のはしかのがんぢぶら　（海）
女禁制高野の山に　何故に女松を育てるか　（那、海）

鐘がごんとなりやお寺の庭へ　梅や櫻の枝折りに　（那）
からさうちすりやからすは笑ふ　からすはよ笑ふからすは何ゆや秋ぢやもの　（海）
からすとりをすりやからすは笑ふ　からす笑ふな秋ぢやろし　（那）
紀州さまには天目印　尾張さまには布印　（那）
今日此方の大麥打ちよ　おうちや繁昌の顧出せ
今日の麥打ちやぢなたも御苦勞　晩の庭上げ尙御苦勞　（海）
今日は此方の大麥打ちよ　糠は神樂で舞ひ上がる
來いでなるかよいかでなるかよ　道のこま草枯れる迄　（那）
五月來たなら麥打さかり　からさかついでペン〳〵と
五月來たらこそお前とわしと　向ひ合ひして麥をつく　（那）
五月麥打力で打てん　肩で打てこつで打て　（那）
こゝは裏やにめうがとふきと　めうがめでたやふき（富貴）繁昌　（那）

こゝの麥打ちや皆めんごりか　時を知らぬかうたはないよ　（海）
此處はごこぢやと馬子さんに問ふに　此處は葉茨長谷毛原　（那）
心からとて吾が土地はなれ　知らぬ他國で苦勞する　（那）
今年の麥は　さやれこらや　やれこりや
今年は豐年穗に穗がさいて　路の小草に米がなる
今年やおもはくさんと　肩をならべて麥をうつ
今年や豐年ぢやよと　田吾は案山子に禮を云ふ
今年は豐年ぢやよ　田吾は喜ぶ豐の穗
さぎをからすといふのも昔　雪といふ字も墨でかく　（那）
しんぎして來にわしや樂もしに　さまと涼しの蚊帳に似たる　（海）
しんぎする時鼻うた唄へ　樂ははな歌いつも出す
月に笠こてもろて思ふ殿御と麥を打つ　家のごふしん高いとこぎやせよ

粒もあらうて取やありさやれ　こらさ〳〵麥がうつても　うちがあるよ　からさふらげて腰で打つ　（海）
寺の坊さんお經よむ聲は　松にたかつた蟬のよな　（那）
夏の麥打ちえらいよとのさ、とのさえらかろ夏山がおまへらよわえらよ、さよいやれこらよ、今年
の麥はさ、やれこらさ〳〵　（海）
夏は夏やせ冬寒細り　たまで肥えたのははれ病　（海）
蜜柑船なら急げよ船頭　江戸で買ひ子は待ちかねる　（那）
向かふへ見えるは三味線船か　ごもく船かよちりつんで　（那）
麥打程辛らいものないわ　ぼろの着物着て門に立つ
麥を打つのはしなではいかん　尻をふりませうふご尻を　（海、那）
麥のあら打ち世帶の初め　えらいものかよそれ程も　（海、那）

麥のあらづき世帶の始め　えらい者ぢやよのう殿御　（那）
麥は搗きおく田植はあふ　馬に鞍おけぶじ
私の殿御は田の水まアりよォえ　朝は早よからよォ　田の中によォ
わしは備前の岡山育ち　米のなる木はまだ知らぬ　米のなる木を知らねば教せよか　いんで疊のうらを見よ　（海）
わしや嫌ぢやよ四月の朝は　コリヤヨーコリヤヨー　麥のはしかのかんざぶろよー　（有）

臼挽歌

あきの宮島廻れば七里、浦は七浦七ゑびす、秋は來たかよ鹿さへ鳴かよ、何故に紅葉は色つかぬ。
こいよ〳〵とョなく蟬よりも、なかぬ螢が身をこがす。みんな喜べ豐年作で、倉にお米が滿ちまする。　（海）
糸をとらすりやいか細糸を、布を織らすりやひまだらけ
牛に曳かされ善光寺參り　殿にひかされ加太參り　（那）
臼ぢやと思へば重たいけわご　中を籠ぢやと思て挽け　（日）
臼のしやくりびきあらい粉が落ちる　町のお客にだされまい　（海）
臼の挽上げにお出でよ樣よ　芋と大根たいて出す　（那）丸栖
臼ひき杭ひき　押しておくれよ　しもくから　（海）
臼の枕引き重たいものや　引いておくれよしもくから
臼もまはれよくろ〳〵まはれ　淀の川瀬の水車　（伊）
臼よまへ〳〵　いつも夜挽はさしやせなよ　（那）
臼よまへ〳〵しんとろ〳〵と　ごのにぎ引きをしやせん　（伊）
臼を挽くとて二斗五升入れて　嫁も姑も小姑も
歌うて挽かうよ又來年も、祝ひ目出度の節の米、歌て米つきや又來年の、祝ひめでたの節の米（那）
歌で氣もはれ元氣にまかせ　とかく病は食でおせ　（那）

しやせん（しません）

唄をうとても時みて唄へ　晩のあかりか午前か　（那）

うちのお家は前から繁昌　今は若世でなほ繁昌　（那）

おけやさんより大工さんにくい　仲のよい米引きわける

帶に短し襷に長し　もはや七月腹帶に　（那・伊）

思ひよらずの新手が增して　臼は手車でしよぎ廻る

思うて來たのに　水かけられて私しや思ひを水にした　（那）

鐘はつきやなるつかねばならぬ　殿は來ぢやなる來にやならぬ　（海）

今夜臼ひき遊びにござれ　臼が重いかというてござれ

さよいやれこらよ　今年の麥はさやれこらさやれこりや

竹になりたやお江戸の竹に　お江戸御番所の樋竹に　（那・伊）

つぶもあらうて取めあり　さやれこりややれこりや

とろり〳〵と廻れよ臼よ　淀の川瀨の水車　（那）丸栖村

とろり〳〵とよくまへ臼よ　晩に夜挽きはさせやせぬ

なんぼなんでも此の米ふめん　これも百姓の泪米

ねてもねむたいこの夏の夜に　小麥ひけとは兄よめが

二人二親孝行すれば　野でも山でも倉が立つ

廣い狹いと言うて寢た部屋を　今はよそ目で見て通る　（那）

まはれ〳〵とくる〳〵まはれ　ひいたお米で酒つくる

麥が搗けたか見てたもれ　見るにや及ばぬ搗いてみろ

よう舞ふ〳〵舞妓ぢやもの　まはいでなるかよ　（伊）

淀の川瀨の水車さへ　誰を待つやらくる〳〵と　（那）

早稻に八石中稻に九石　ごんぞ晩稻は十二石　（那）

親子唄

朝寝する子はムケンの金よ　朝のお粥がひるになる　（有）
行こら見てこら土生(ハブ)禪長寺の　六サ親子の彫物を
いとし可愛子に旅させよ　ういもつらいも旅で知る　（海）
家は富まねど子を持つ果報　福といはるゝ數に入る
恩を忘るな育ての親の　手もとはなるゝ巣立鳥　（海）
親身かゝりか春山行こか　岩に腰かけ先づ思案
親の意見とコンペイトウと　角があつても甘いゝ
親は知らいで七つの時に　賣られましたよ鳥羽浦へ
折れば折れじと親竹子竹　雪をさゝへてすがり合ふ
おうまれ金持ち寶をくらべ　千の倉より子は寶

可愛いけりやこそ頭もたゝく　憎くてたゝけば手が折れる　（海）
可愛い子には旅さしなされ　酸い目甘い目旅で知る
絹や錦は數々あれど　親のないのがわしや悲し　（海）
こほし合つてる二人の愚痴を　來ては坊やが拭いてゆく
次第次第に更けゆく夜頃　親の情が身に浸みる
捨てたその子を又懐に　抱けと響いた箱の鐘　（海）
たとへこの傘柄漏がしても　此の子一人はぬらしやせぬ
假令姑が鬼でも蛇でも　お前育てた親ぢやもの　（海）
他人恐ろし闇夜は怖い　親と月夜は始終よい　（海）
辛いゝと必ず云ふな　兩人親あるなかに
なさけない事皆書きとめて　親に見せたら泣くであろ
ねてのね姿起きての笑顔　あの子育てた親みたい

ねても起きてもなんなくろう　親は知るまい子の心　（海）

伸びる若竹親竹越える　親をこえるも親の恩

野へも山へも子うみおきやれ　千のくらより子は寶　（有）

暇狀ならさらりと書いて　月夜影でも讀めるよに　（伊）

深い恵みで育つた私　何時か返そに親の恩

向ふの山で何やら光る　姑御前の目が光る

股の肉そぐ孝子もあるに　恥ぢよ世間も脛かじり　（海）

木綿ながらも母御の手織　藍の香もする初袷

山が燒けるが立たぬか雉子よ　之が立たりよか子を置いて

山で息すりや雨降りかゝる　内で妻子が泣きかゝる

わしのお父ちやん岬のはなで　沖のいろみてあみさばく

わしの父さん江戸へいたよ　江戸でやけたかけなぐさい

（けなぐさい（やけくさい））

私のお父さん岬の沖で　碁盤縞着て鰹つる

米搗の唄

臼は欅の大臼なれど　米は他國のもち寄りぢや　（東）

獨「唄とて米つきやヨーオーイ、亦來年もヨーホーイミーイ。」合「祝ひめでたのせちの米、ハヤシいりやオーイホーイホートキタヨ、リリヤヨ、アリヤヨ。」（有）

お家お繁昌とから臼べやは　ごんごごんごとなるわいな　（熊野）

門の唐臼三斗か四斗か　搗ついてしもたら五升になる　（海）

こゝの米搗や皆めんごりか　ときを知らぬか歌はぬか　（東）大島

米の搗置き旦那が嫌ふ　旦那食べるか黑米を　（東）

米の搗き初め世帶のはじめ　えらいものぞな野良殿御　（東）

米のつけたは音でもわかる　麥のつけたは見な知らん　（東）

（から臼べや（お米を搗く臼のある小屋をいふ））

米のなる木を襷にかけて　ならぬ所帶をして見たい　（那）
米をつきにきたつかしておくれ　うちの娘と一緒でよ　（東）
米を搗くなら二斗五升入れて　嫁も姑も小舅も　（東）
橘の欄干に欅の机　しかと出しますまきの筆　（東）
大島搗いて干せ〳〵朝日に麥を　丹後但馬のべに麥を　（東）
つけた〳〵此の米つけた　糠は神米舞をまふ　（東）
兎角から臼踏む尻次第　若い娘達きりよ次第　（東）
鳥羽の泉水くまないならば　思ふ御身にたゞつませたい　（熊野）
ごんご〳〵と北山がなる　それはお宮の寄せ太鼓　（東）大島
庭で米つく奥の間で碁うつ　二階座敷で金はかる　（熊野）
松のきり口あみかさきせて　ひよになりたい古座奥へ　（東）大島
水も漏らさぬ桶屋の娘　ぬけて出るとはわが悪い

きりよ（容貌）
ひよ（日傭）
わが（自分が）

山のおくの米つく水車　誰を待つやらくるくると
ヤレなぜまゝならぬなぜまゝならぬ　まゝになる身を持たせたい　（熊野）
わしら若い時年寄らなんだ　生きてゐる中や死ななんだ　（東）大島

木挽唄

木挽きァいとしや千丈の山で　半疊むしろの小屋住居
木びきさんお國は何處ぢや　奥州仙臺出羽の國　（東）
木挽可愛いや山小屋住居　仲のよい木をひきわける
木挽乞食は一字のちがひ　一字ちごたら皆乞食
木びき〳〵根さへよけりや　板の二間は苦にならぬ　（有）

木びき米のめし炭やき茶がゆ　百姓男は麥のめし

木挽ぢやさいふて一升食うて　松の肥節や血の涙

木挽ぢんご虫挽くなり食なり　挽いてしまたら食てしまふ

木挽きやヒケ〳〵杣人はつれ　わしの殿御はさま〳〵ぢや

今宵降る雨高野の奥の　お花立て水清み水

杉の元玉檜の二番　松の三番殿は挽け

大工さんなら今言うて今よッシッシュ〳〵　木挽さんならまづ思案ッシッシュ〳〵

何の因果で木挽をなろた　花の盛りを山でする

鋸と鑪が流れて下る　何處の木挽が死んだやら

引けごたくれごこの木は堅い　ごこのお家のへりきやら

節や木の枝かたいのは氣象　いがみなさるなお手のあら

山に安田の彌助の山に　何時もこびきの絶はない

（海）

（へりき（端の方の木）

山の安田の彌助（有田郡八幡村上湯川小松家の人）

山の者じやと賤しめてくれるな　山にや木もある氣もはれる

わしの殿御は木挽の職で　仲のよい木をひきわけて半疊むしろで小屋住居

地搗き歌

祝ひめでたで始めた事は　同じめでたで納めおく

内内の裏にはヨーイ、茗荷と蕗とア、ヨイ〳〵、めうが目出たやヨイサふき繁昌よア、ヨイヨイ、

ヨーあらよ、こらよ、そらよういとせ、ヨイ皆さんこの臼にかへたヨー、そらよ、あらよ、次のあ

ら臼に變りましよ、エンエー、エンエートーマインエ、ノーエンエー、ヨイサ、根とりさんならし

ておくれ、そら、臼がなれたら變りましよ、エンエーオマインエ、ノーエンエー、その聲さますな

、エンエートエオマインエ、ノーエンエ！。　（海、日）

うちのおせごに松杉檜、これはお家の御材木　（西）

内のお母さんは何時來てみても　黄金襷で金はかる　（日）

お伊勢參り程氏子を寄せて　何故に宮川橋かけぬ　（日）
これはこの家の大黒柱　祝ひ目出度の歌を出せ　（那、日）
此處の屋敷は目出度い屋敷　鶴と龜とが舞を舞ふ　（那、日）
さいた杯見てあがれ　中は鶴龜五葉の松　（日）
旦那大黒奥さんエビス　おいた下女（オナゴシ）や福の神　（日）
枕こちよれこのちの枕　枕からねば身もからん　（海）
目出度ナー、目出度ヨー、ヨイ〳〵三つ重なりてヨイ〳〵、ヨイヤヨー、つるはナーー、ごもんの
ーよ、ヨイ〳〵、すをかけてヨー、ソツヤツトコセー、ヨイヤーヨイ、はりばいよ、ほりばいよ、
ソラヨイトセー。
よい皆さんこの臼かへたよう、そらよこらよ、次のあの臼にかはりましよ、エンエー〳〵、トーコ
ーナン、エーーエンエー。よいさ根とりさんなれたら、かはりましよエンエーエンエ、トーオコナ
ンエノーエンエー。

夫婦の歌

一城一廓かまへた氣もち　二人で持つたは間借でも　（海）
岩の上でも種蒔きや生える　何故にお前は子ができぬ
お前たち聲わしや地聲　地聲たき聲はり合はん
苦勞する氣で乘り出す世帶　風も吹け〳〵雨も降れ　（海）
心短氣はお前の損氣　わし等お前にそはにやすむ
吸ひつけ煙草につい騙されて　おのが世帶をつい煙にする　（海）
竹の柱によしずの屋根に　むしろ二枚で暮すとも
手鍋さげても夫婦となつて　歌はる身大旦那命知らずの　（海）
なんぼその身は歌はるゝとも　夫婦の緣のかはらじと心示しばかりやる　（海）
獨り暮して樂むよりは　二人で苦勞して見たい

二人の親よりせきの地蔵はまだ　俺に似合ひの妻くれた　（東）
二人の力で持上る箪笥　嬉しい世帯の据ゑ所
添うた嬉しさはたきにこめて　九尺二間にあまる音
廣い世界に小さく住んで　大きく世間へ見せる意地
婿になりたい山家の婿に　うごの粕和くて見たい
婿は入婿娘はこちの　お氣に召さねばいんぎくれ
やめてくりやんせ夜更し辯を　あなたばかりの身ではない　（海）

石突歌

愛宕まゐりに二升樽拾た、之も愛宕の御利益か。アアヨウイヨウイヤセアラセコラセ。（日）
内の裏やに井戸掘りかけて　水が湧かねど金が出た　（日）
内の屋敷に梅松櫻　梅は三味ひく櫻は歌ふ松はちり〳〵踊り舞ふ　（日）

思ひ出しては寫眞を眺め　何故に寫眞はもの言はぬ　（日）
來いとこそいへ來るなと誰が　御門通れば寄れとこそ　（日）

雜の部

惡性者と人さんに　しやべらさんしても　大事ないが　かはゆいのぢやない　にくいのぢや　（海）
朝寢しやすな烏がなぶる　家も畠もがぶがぶと　（海）
朝日輝く海よりも　廣い心を持たせたい　（海）
汗水流して稼げばいつか　丸い團扇の風が吹く　（海）
兄貴や伊達者で月夜に提灯　弟はしまつで苧殼振る　（海）
雨の降る日と日の暮れ方は　思ひ出しますふるさとを　（海）
雨は天から涙は目から　怪我はその身の油斷から　（海）
雨は降りそな大水出そな　川原乞食は流れそな

急ぐなあせるなたゆまず倦まず　人は根氣が第一よ　（海）

磯の巖に立つ波がしら　當つて碎ける張りと意地　（海）

井戸の蛙とそしらばそしれ　花も散りこむ月もさす

いふな〳〵といはんがやいへば　言葉に枝がさく

家の煤はき働き者は　中で一番ほこり顏　（海）

いんで寢よかよそば屋へ寄ろか　何も勘定やいんでねよ　（海）

嘘ぢや〳〵は七つの癖か　無理な云ひわけ摺る墨

歌に歌をか音頭にとろか　五月幟の繪にかこか

歌は理でつむ布おさでつむ　書いた文見りや文字でつむ

うたひなされよ千百なりとも　わしのたもとにァ夢もある

歌をうたへば新宮の節で　中をゆらして末永う　（東）

歌を歌うてもきゝてのないナ　寺に坊さんない如し　寺に坊さんないのはおろか　井戸につるべの

ないごとし

うちのかみさんしまつな人で　米のかずほど目がまはる　（東）

打てや野の人撓まず打てば　山の峽間も畑となる　（海）

江戸は新ぶき小判の金も　かせぎさへすりやこゝにある

沖のとなかへきぬばたたてゝ　波におらして島にきしよ

お釋迦さまさへばくちに負けて　卯月八日に丸裸　（海）

お茶の濃いのはうめてものまる　言葉過しはやめられん

お月さんさへ賭博に負けて　雲のあひまからてらく〳〵と

お月樣さへ泥田の水に　落ちて行く世の浮き沈み　（海）

お月やちそても日本國中照らす　私やちそても人照らす

男一貫胸一杯に　あつても涙は見せぬ意地

同じ木ゝ書く桐ならなぜに　琴と下駄との分け隔て　（海）

お松何處行きや手に花さげてよ　私や里への花立によ

お前さんとくわしやのべの紙　入れておくれよふところへ

お前濱邊の雜魚賣りか、汐風に吹かれて色は眞黑け、だんないよ、ほつといて、こつちやかまやせな。

お前よに言や照る日も曇る　晴れた月夜も闇になる

思ひすつるなかなはぬとても　緣と浮世は末を待て

及ばぬものなら手を出さないが　遙か猿猴の水の月　（海）

親も仇ぢやなかうぎも仇　意見する人尙仇

己が靑田の夜風に涼む　味は知るない都人　（海）

俺行く先にかのごまじりの虫あれば　あたつ日々に生しませう　アマダウンケンソワカソワカ

火事ぢや〳〵ごこは火事ぢや　シャン〳〵〳〵なつたら走れ〳〵　西（串本町）

鍛冶屋かん〳〵朝晩茶粥　時によつたら晝茶粥

堅い與作に今年は妻も　出來て捗る畠うち　（海）

かごの鳥でも時世はくれば　かごのやぶれる音が來る

徒歩坊殺すのは刄物がいらん　月に十日もふれば死ぬ

勝浦べたに諫めい先見れば　餘娘に振られて悔波　（海）

川に橋かけ岩山うがち　道はつらぬけぎこまでも　（海）

かまのうしろで金つけて、二階へ上つて髪といて、せきだ片足に草履かたし、これから大阪へ歸ります。

乾いて乾いて乾いてならん　乾いてよいのは干大根

韓信が股を潛るも時世と時節　牡丹も菰着て冬籠り　（海）

紀州樣には葵の御紋　丸に三つびき長門藩

きりよう一番姿は二番　髪の結ひ方五十五番　（海）

器量よい子が川口で　粉を洗うて名を殘す

愚痴なんだよ朝起きせずに　晝の暑さを恨むとは　（海）

國の爲には命はいらぬ　金や名譽はなほいらぬ　（海）
苦勞する氣は何厭はねど　苦勞し甲斐のある樣に
けさの寒いのに笹山こえて　露で羽織の裾ぬらす
今日も西の空よく晴れた　お峯達者で居ますかい
煙出る〳〵炭燒くかまに　お國自慢の唄も出る　（海）
けんし持つならじけ一番の　太鼓叩きか笛吹きか
後悔を先へ立たせて後から見れば　杖をついたり轉んだり　（海）
今年やこうでも又來年は　花もさこまいものでない
小指切ろとは當座のことよ　金がなくなりや手まで切る
今宵こうやしあさね〳〵、スラ〳〵〳〵とすぎはだ、ござれよいやさ、ソラ〳〵ディチユ、三國一
ぢや、おせみとりました。
こんな所へ何故來た知らぬ　親が行くなと止めたのに

魚賣りさん今日は何ぇ　昨日ぇびじやこ今日は鰯　（海）
酒を飲むなと親さま云ふけど　お神酒あがらぬ神はない
さびしからうが山ほとゝぎす　泣くな月夜に雲が出る　（海）
四海波でも切れる時は切れる　口約束でも二世三世　（海）
仕事せん助甘いものは食ひ助　晩の入日待つの助
子爵伯爵男爵よりも　おらが好きなは肥柄杓　（海）
十七をつぼに入れて　ま一つはね〳〵て植ゑて出ようぞ
しまひ仕事は手早やになされ　しまへば我が得主の得
じれる蔦と平氣な魚　池の氷の土の下
しをわた花をやぐらにのせて　下から見ればぼけの花
身代(シンショ)しもたら江戸へいこと　江戸は身代の定めかよ
死んで通さにや世間の人に　うはき者ぢやと言はれます

好いてあがれば泥田の水も　のめば甘露の味はする

好と嫌と一緒に來たら　箒立てたりこかしたり　（海）

角力取りとて名を擧げて　おつゑをかたけてもごりよし

墨と硯は仲よいけれど　水をさゝれりや薄くなる　（海）

清十郎はとらいでもたまる　とらにやたまらぬ町東

關の地藏さんに振袖着せて　奈良の大佛さん婿にとろ　（東）

千疊敷でもねる所一間　廣いやかたはいらぬもの

大工とも手馴れておいて　さいて貰はうよ玉手箱

高い山からちんばごのがおりる　傘が見えたりかくれたり　（東）

竹に虎とは昔のことよ　今の若衆ァ酒にぞう

たとへ錦の風吹くとても　他所へなびくな糸柳

谷の小百合の滴も末は　千里天打つ波ごなる

誰も知らんと思たの不覺　硯かけごの筆が知る　（海）

だんな云ふ程仕事ができりや　くすりァ能書ほどきくであろ

月の鏡に寫眞の笑顔　位牌ばかりはもの云はぬ　（海）

つゞく難儀の苦きも通す　意地は男の桑の弓　（海）

露の乾かぬ間に朝顔照らす月影の　情なさに哀れ一むら雨の中ハラ〳〵と降れかし

ごうにもならぬと知つてる無理が　ごうしてかしたとあせる愚痴　（海）

時よ時節と諦めなされ　屋方船さへ大根つむ　（海）

鳥は枯木に二度とまるけど　花は枯木に二度咲かぬ　（東）

鳥は八萬八聲がきりぢや　わしの仕事にきりはない　（東）

トントと豆はほうろくの中で　とぼか走ろか腹切ろか

泥の中から蓮がかほる　汗の中から金が湧く

長い苦勞をはたきの先に　拂つて嬉しい店開き

なか〳〵立つて〻はいらない　腰かゞめいれて閉めるはぐゞり戸　（市）

泣くな嘆くな潮さへゆけば　小判千両は朝のまぢや　（海）

泣くも一生笑ふも一生　ならば笑うて暮したい

夏のしか山暑けりや戻れ　下木おかねで買うてなりこ

七つ頃から云はれた事は　忘れまいぞやお客様

何はなくとも福茶のかほり　富士の初日に置炬燵

波に搖がぬ巖の姿　ひとり吹雪の中に立つ

なんぼ娘は招いてゐても　吹いた嵐はとめられん

業平さん御陰で見れば　姿やさしい吉野のさくら

西の暗いのは雨かよ蛇かよ　雨ぢやござらぬ蛇でござる　（海）

望ある身は谷間の清水　しばし木の葉の下くゞる

花と散りたる寫眞に向ひ　もみぢ合せるいぢらしさ　（海）

腹に實のない瓢簞さへも　胸にくゝりはつけてある

春は三月木の芽はつはる　わしもつはるかだるこはい

羽織ぬぎすて筒袖卷いて　百姓するのも國のため　（海）

人が悪ない我身は悪い　破れ車の輪が悪い

日毎々々晦日と思や　年の晦日はありはせぬ　（海）

肱を枕にふて寢の窓へ　寢びぇするなとのぞく月　（海）

人のことは云ひたしみたし　とかく我ことかくしたい

人の心と濁つた川は　底が見ぇぬでおそろしい　（海）

人の心はあの窓硝子　とかく曇がつきやすい　（海）

人の振りみて我振り直せ　櫻花見て色直せ

人の目にかきや此の身の仇と　陰で茗荷も花咲かす

人は言うても峠の松ぢや　涼しごんすよわしの身は　（海）

人は米喰うて氣焔ははけご　蠶桑喰て絹をはく　（海）

人に負けても己にかけては　渡る世間に鬼がない　（東）

ひとにものいや油のしづく　落ちてひろがる何處迄も　（海）

廣い世間を求めて狹く　苦勞するのも心から

人や櫻が笑はうとまゝよ　今日は日永の稼ぎごき　（海）

福の神樣頼むは無益　稼ぐその身が福の神

福は來る〳〵車の樣に　しんぼうする身に廻り來る　（海）

筆の先での約束はおよし　筆は狸の毛でござる

奉公する身はつらいけれど　金が欲しさに行くんだよ

まかり違ごたら二足の草鞋　吾もはいたりはかせたり　（有）

待つておくれよ松屋の門で　心淋しや岩戸關

程に打切れ井戸端會議　釣瓶落しの日が暮れる　（海）

又も來るとも長居はするな　人はあきものあかれもの

まゝよ三升樽手にさげて　破れかぶれの頰かむり　（海）

丸い心で四角な物を　使ふ世帶の澁團扇　（海）

みあげするともみさげはするな　三代長者はつゞきやせん

右は極樂左は地獄　心一つが道しるべ　（海）

水呑百姓と笑へば笑へ　今に見やんせ黄金田を

見まい聞くまい話もすまい　今日の仕事の終るまで　（海）

都仕立の絹張りよりも　風の涼しい澁團扇

昔馴染みが去年の暦　とても今年の間に合はん

無理に算段流行を追へば　その日その日に追はれたり　（海）

やせた男は可愛いくてならぬ　骨と皮とでにくはない

餅につかうか酒にしようか　ごちらにしようまあ餅にしよう

やけはひんから茶は土瓶から　心短氣はきまゝから

山で恐ろし猿かけいばら　ぢけで恐ろし人の口　（海）

山の烏はかはいて鳴かぬ　團子欲しさになくばかり

山家々々と町の人言ふけど　きりようのよい花山で咲く

山を通へば茨がとめる　茨はなしやれ日がくれる

やめておくれよ道路で遊戯　一つは身のため人のため　（海）

止めてくんだしばくちと角力　負けた負けたがきゝづらい

よいやよい〳〵〳〵やらよいやら　よいやいつやら夜中やら

容貌づくなら負けてもやるが　眞實づくなら負けはせぬ

嫁ぢや〳〵とえろ誹りやんな　誹る吾娘も人の嫁　（海）

世のかたみ高いと云へど　山岳お山はまだ高い

嫁と姑とあざみの花と　見れば見事でよればつく

弱いやうでも心の意氣地　石さへもたげる霜柱

理屈止さつせ食はなきや死ぬる　おらが汗から米が出る　（海）

わしの心は春三月で　木の芽心ぢや出心ぢや

わしはお前に何と云はれても　水に浮草根は持たぬ

わづか草履のはなをでさへも　切れて心のよいものか

笑ふ眼元のつるぎもあれば　怒る眼元の慈悲もある　（海）

子供の歌

あがら二人は仲よしよ　あとのぼんさんはねのけよ　（那）

あの子さごこの子天滿の爺や子　ぢや鯛ぬすんでくろてのんぢゃげつげつよ　（東）

あの子はごこの子　よう似たよその子　わら一把もてこい　一把で足らん　二把持て來い　二把で足らん　三把持て來い　三把で足らん　四把もて來い　四把で尻まつかに燒いたろぞ　（西）

雨こんこん降るな　山の鳥やなくぞ　（那）
雨ァ降る小雨牛のこうじァぬれる　乳きつてのませ　（熊）
雨の降る時ヂヂはいて　雨ふらぬ時下駄はいて
雨やめこやめ　寺のこうじに水とんでのませ
一郎やのお母さんどこへいた　あの山越えて里へいた　里の土産に何もろた　人蔘大根に笙の笛
煮ても燒いても食べられぬ　（東）
イッポン　カッポン　カブレル　カッポン　（西）
色々變れば河原の碁石　また潮あびよ　（海）
牛出てこい　馬出てこい（松の木の幹をたゝいてうたふ）
牛のばば　あつちやへゆけ　馬のばば　こつちやへこい　（熊）
打田賣つて粉河買うて　安樂川あろて　竹房たたいて　窪食てもた　（那）
お寒いの小寒いの　山へつゞらおいて來て　まだ家に三つあら　（海）

正月來たら　赤いべべきて　ちやら〳〵はいて　ひつつくあも食て　あそばんか　（海）
「おぢさんおぢさん何所ゆきよ」「私はたんぼへ稻刈りに」「そんなら私も連れてんか」「お前ら連れて行つたら邪魔になる」「このきんかん坊主のくそ坊主」「後に誰がゐる？」　（日）
男と女とまぜこにしんこ　（熊）
お夏布おれ赤いべべきせよ　（那）
おれゆく先に　長いものあれば　なめくじはは　（海）
かァらきぶす〳〵　足のかいだるいぶす〳〵　（熊）
かァらすかあ〳〵　ごうこいき　こうしん山へ麥まきに
かいつぼ頭へ火やついた　ついたと思つたらひつこんだ
かうもり來い　たねむしこい　あんどの光でとんでこい　（西）
かくれんぼするものァ　早よこいとうこい　東西がくれに　袂をあげて　おうちくななやの　こや
とんぼ　（熊）

かくれん棒にかくれ笠　おもてのロでちよんかれもちやよい　（西）

蝸牛（カタカタ）でエよ　虫ァでエよ　ぢいや家も　ばァば家も　焼いたろか　（熊）

かた〳〵布織れ　赤いべべきせよ　（西）

かだじ出え出ねや尻つめる　早來て水飲めこんやのばば家がやける　（西）

川々づくしで申すなら　紀州紀ノ川荒川粉河おまん包むは竹の皮　楠正成湊川　安珍清姫日高川　（那）

雷々上いけ　此處は廣瀬の藪の下　（海）

烏カァ〳〵　かゝ方へまァれ　とんでとうとう　とゝ方へまはれ　（熊）

烏カァ〳〵勘三郎　神田の後へ麥まきに　（海）

烏カァ〳〵何處へゆく　向ふの山へ麥乾しに　此方の山へ火がついて　もやそかけやそか青松葉　（那）

松屋の門に松三本　竹屋の門に竹三本　（西）

烏カァ〳〵かァやの娘　雀チウ〳〵ちうやの娘　とんびとう〳〵とうやの娘　（海）

金柑買うたら實あげら　蜜柑買うたら皮あげら

くちな　はび　みはび　俺ァ鎌持つたるぞ　（熊）

栗食ひたいよ毬おとろしよ　（海）

黒んぼの赤んぼ　赤んぼの黒んぼ　黒んぼの赤んぼは赤んぼうでも黒んぼ

今日は雪霰　明日はごんな　ごんなへまるつて　飴買うてしやぶろ　（熊）

子買お〳〵　子買うてなすりや　鯛買うて飯くはそ　骨がたつぞ　みしつて食はそ　小骨がたつぞ

砂糖饅頭　そりや虫の大毒ぢや　蒲ほここさへて　飯くはそ　それもよかろにごの子を欲しぞ　○

○（人名）を欲しぞ　（熊）

こけこうの牝鶏は　頭に毛が無うてお寒いの　（海）

こゝは岩出のはつさんぼ　錢金持てこなよう通さん　（海）

こゝは竹藪竹の中　落ちたらごん腹つきぬくぞ　（雷の鳴る時云ふ）　（熊）

乞食こざえもん　茶粥炊いてまるれ　（西）

乞食乞食こねんぼ　茶粥炊いてはねかへれ

子供と子供と喧嘩して　親様々々腹立ちで　人様人様寄り合うて　中にすまんとおつしやつて　べにやさんで仲直り　（西）

子とろ子とろ　ごんな子を欲しぞ　後の子を欲しぞ　後の子もろて何する　ついたついたの餅くはそ　そーら虫の毒ぢや　鯛の黒焼　烏賊買うて食はしましよ　（東）

この前通る親船は　よしやの源三遊び船　遊び泣かんと遊ばんし　ぞり〳〵剃つて髪結うて　せんだく火箸を渡る時　蟹にちよつこりつめられて　蟹さん〳〵こらへてよ　私や十五になつたならあの山ぐはして堂建つて　堂のぐるりに松植ゑて　松の上へ鷹のせて　鷹がとんだらなんとしよに弓や鐵砲でやつしつし　（熊）

ごめんそうめん　うでたらにゆうめん　（那）

子買はう子を買はう　子買うて　何すりや　御坊のお城で　熱きまゝ　鯛のとゝお骨がたつよ　みしつて食はそ　みしりむしわくよ　ごの子を欲しよ　誰（名をさす）が子を欲しよ　なんでいこに籠にのつてお出で　かごはいやよ　ちんばでお出で　サアこい

紺屋の鼠　藍くて糊くて　すまの方へチユウチユウ〳〵

西行法師といふ人は修業する初の何物を　修業の初に豆腐もろて小骨をのごにたて　何か妙薬ないみしろ（むしろ）

すま　（隅の事）

かいなせんそれが醫者に問うたらば　川の底匍ふ雷と山の空はふ蛤と　水であぶりて火でねつてはらんでつけたらなほるぞよ　（海）

さうぢやない母さんのつけしやんした　雪洞が風に吹かれてゐるわいな

三五のお猿さんは　赤いおべべが大層お好き　テテチヤンテテチヤン　昨夜貰うたお鯛のあつ物一ばいおすすりなされ　二はいおすすりなされ　三ばい目には　魚がないとてお腹を立てゝ　果ないく〳〵はて〳〵果てない　（日）

しきりん　しきりん　今日は休み　あしたら　豆腐屋の　こえもちぢや　（熊）

尻ふりおまつ　尻振つて逃げよ

ずい〳〵車の博多ごま　このちよへあはせて合すかほん　（海）

椎樫しーばの實　食べんものはごんぐりこ　金柑むいたら實あげら　蜜柑むいたら皮あげら　蜜柑金柑わしや奸かん　子供に羊かんやりや泣かん　角力とりや裸で風邪かん　親の云ふこと子はきかん　鶏はだしで足きらん　山家の猫さん氣やきかん　（那）

しびれ京へ登れ　藥のはかま買うてやら　（海）

正月來たら赤つかいべゝきてちようだい　はいてひつつく餅くて　遊ばんかし　（海）

正月來たら赤いべゝきせて　チャラ〳〵はいて　（海）

正月來たらお雪見たいなまゝ食べて　割木みたいな魚そへて　碁石みたいな餅食べて　チャラ〳〵はいて　ルク〳〵しようらよ　（伊）

一つ一重の梅の花　二つふつくり福壽草　三つ見るは桃の花　四つ吉野の櫻花　五つ色々ヒヤシンス　六つ紫かきつばた　七つ並んだ月見草　八つやさしいおみなへし　九つ九重菊の花　十でとりましよ花の種　（海）

次郎兵衛　太郎兵衛　かはごこへつないだ　お寺の柿の木　すつてんとんと　つないだ　（那）

酒買うて來い　酒買うてこい　ついでに頭とつてこーい

酒買うて來い　酒買うて來い　戻りに頭をとつてこい　（那）

酒買うてこい　酒買うてこい　戻りにおば所へ寄つてこい　（海）

大佛樣のお手引きで　不思議な御緣でお立寄り　金のなる木は福壽草　植ゑて此家に納めおく　一二の小枝を眺むれば　金銀小判がなり下がる　三の小枝見上ぐれば　七福神が現はれて　笙篳篥を

はやし立て　上から鶴が舞下る　下から龜が浮上る　鶴と龜との舞を見て　祝は此地に納めおく　（那）

橙々赤くなれ　正月近こなら　（海）

つく〳〵ほうし　何故泣きやよ　頭に毛や無うて寒ごんす　（那）

つばくら土食て　口ちや澁（シーブ）い　（海、日）

つばなぬけこぬけ　といしのばあさはぬけ　（西）

つんばなこーい　こーとしよ　こーとの神さん　皆まつろ　（那）

寺の寺のお釋迦の水を　ごうして吸ふの　桶の中へ塩ふつて　むつくとかやる　（海）

でん〳〵で虫　伯母家が燒ける　早よ出て水かけよ

父はとつくり母はカンナベ　家の丁稚はウルメ買うてきて　燒いてこがして　棚へおいときや　猫が引きかき　猫を追ふとて　石に躓つまづいて　スツトントン　（日）

となりの奥さんちつとお出で　何御馳走　お茶漬こんこにそれ御馳走　鬼があるさかようういかん　（西）

鬼のない間にサツサとお出で

鳥見いま　水あびやるの　ぢいにもばゞにもいふたらうぞ　（西）

（潮岬村の一字）
ぢいし
かやる（かへる）

ごもよんでこい　蟻よんでこい

中の中の小坊さん　なぜ背は低い　親の身を食うて背が低い　たつてみよ　坐つてみよ　その後に

誰がある　（西）

中の坊主は何故背は低い　はたの坊主にせられて背は低い　（西）

仲よっしやんせ兄弟中を　同じ五本の指ぢやもの　（西、有）

なーれ〳〵柿の木　ならねばぶちきつて　正月のほたしよう　本から末までなりませう　（海）

ねずみが勝つか　いたちが勝つか　（東）

ばたいたち　せうちう　三年せうちう　（熊）

はつさい婆木のぼり　猿にべべかゝれて　庚申樣へ云うてたら　まだかいたれ　かいたれよ　（東）

埴田堺（ハキ）は並びの在所　椿小坂がなけりやよい　（那）

一人子くれんかえやらん〳〵　二人子くれんかやらん〳〵……親とかてゝ人子くれんか　おしけり

やもつてけ伊平次の饅頭　（西）

埴田堺（南部町の字）

れれ（赤坊）

ブト等餅つく　わし等にくれん　わし等餅つく　ブト等にやらん　（海）

ふる〳〵つくの子　糊すりおけ

奉公する子はなりや樂ならよ　褄をかさねて着るのは樂　（熊）

坊主になるな　ねねぐろになれよ

坊主ほつかい法螺の貝　一日吹いたら米五合　（海）

前の者早よゆけ　後の者（モ）な急が　（海）

圓くなれ圓くなれ　十五夜の月のよに　まんまるくなれ　（那）

丸栖丸栖と圓いかと思や　しくの　手に角がある

蜜柑金柑酒のかん　子供に羊かんやりや泣かん　親の云ふこと子はきかん　闕取は裸で風ひかん　（日）

み濱の沖で　とんぼせー〳〵　（熊）

向への山から猿三匹とんできて　手でとるのもかはいし　足でとるのもかはいし　杓子でおさへて

燈芯でくゝつて　苧がらでにのて　京の町へ賣りにいたら　京の人笑うて　笑うたら賣らん　紙屋へ寄つて　紙半帖買うて來て　無茶苦茶に書いて　無茶苦茶によんで　橋の下へうめといて　一杯のまんせ姉さんよ　二杯のまんせ姉さんよ　三杯目の盃は　白瓜から瓜から茄子　（西）

目くそ　鼻くそ　ちようろちよい　（熊）

めん波おいて雄波（オン）ござれ　（東）

もつほれなほれ　佛さんの絹糸　（海、市）

桃栗三年　柿八年　梅はすいとて十三年　ゆーは九年で　まだならん　（那、日）

桃栗三年柿八年　柚は九年の花盛り　梅はすいとて十三年　（西）

藪の藪のお竹さん　誰とねてかねつけた　おちやことねてかねつけた　おちやこの土産に何貰ろた

元結（モットイ）一たば紙半帖　何時もくる長吉さん　一寸持つて走つた　ごこ迄走つた　京まで走つた　今日は京の祭　祭が來たら　ちやら〳〵はいて　御雪みたいな飯（ママ）食べて　割木みたいな魚（トト）添へて　うまい〳〵と食べてしまふ　（海）

やーぶの〳〵のづく〳〵し　親もないか子もないか　てゝごにはなれて奉公する　奉公ごこ町北町

おゝ　けんさいよ〳〵

破れ障子は張つたらなほるよ　やせた男はなほりやせんよ　ヨイ〳〵

やまアやまア　かおうかやし　かおう〳〵　こちはめんじ　そちはをんじ　油めんやま　いちちよう　かおうかやし　かおう〳〵　（熊）

やんめ犬（イン）のくそ　親にも子にもうしつんな　（西）

雪々降つてこい　蕪三つとかへてあげら　（海）

指きり鎌きり　うそ云うたら　地獄の釜へすつてんとん　（海）

やんめ（やに目）うしつんな（うつるな）

宵宮の晩ぢや　大根たいて昆布ぢや　（熊）

りんごやかんごかんごやのおぶさ　舟をうかして船頭は誰よ　おぶさぢやないか　深い川へほろか

淺い川へごつほんー

（二人兩手をつなぎそこへ他の一人の子供をのせて歌ふ）

彼方の山から見ならす　此方の山から見ならす　誰と誰と見ならす　伊之助さんと和尚さんと　手には二本の玉を持ち　足には黒金靴をはき　行かれもせん山路を　せにかけおつかけ行つたところが　昨夜生れた(ヨンベ)亀の子が　じよいじよい剃つて頭結(アタ)うて　白粉つけて紅つけて　かり〳〵橋渡ろと　て　蟹にちよつこりはさまれて　蟹さんようこらへてよう　私が十五になつたなら　あの山碎いて　宮立てゝ　宮のぐるりにごままいて　ごまは佛のきらひもの　油は佛のおみあかし　一のけ二のけ　三のけ　櫻五葉の松柳　柳の陰にも蔦も一羽　烏も一羽　ねじやげも一羽　ねじやげの首を一ねじ　捻じて　鬼の目すつてんとん

(日)

彼方の山から此方の山から　娘さんが五人つれて一でよいのは糸屋の娘　二でよいのは二の屋の娘　三でよいのは酒屋の娘　四でよいのは塩屋の娘　五でよいのは呉服屋の娘　呉服かたげて　えつし　つし

あとさんいくつ十三一つ　まだ月や若いの　おまんに抱かしや　こまんが怒る　おまんに抱かして　油一升買ひに　油屋の角で　油一すこほして　その油をごうした　太郎の犬と次郎の犬と　みなね　ぶつた　その犬ごうした　太鼓にはつて　あつちや打ちやごん〳〵　こつちや打ちやごん〳〵

(那)

あとさん(お月さん)
ねぶつた(なめた)

彼の向ふへ藏がたつた　あれ誰建てた彼建てた　八萬長者のもと娘　あの子はよい子だ器用な子だ　器用に積んだ綿帽子を　チラリンカラリンかづかせて　奥の座敷へ坐らせて　金襴緞子をぬはすれば　衿と裄と裁ち違ごて　それからお菊は泣き出した　何を悲して泣かんすか　嫁入をしたうて泣かんすか　嫁入したうも婿をとりたうも　ござせぬが　私の弟の千松は　五つ六つで鑛山へ　かねはあるやら死んだやら　一年立つても便は來ん　二年たつても便はこん　二年三月九十九日經つたならお菊來いよの便は來た　便の表書よんでみりや　千松死んだと書いてある　右の手には花さげて　左の手には珠數さげて　これからお墓へまゐります　墓のぐるりに草生える　あれは何草櫨草　櫨の小枝に烏とまる　彼は何烏櫨烏

(那)

あんまとめぐり一つしよ　あんまとめぐり二つしよ　あんまとめぐり三つしよ……

石やん　文やん　里かん　靜さん　五郎さん　むつちや　はあちやん　くまちやん　ときちやん

(那、東)

……

犬　人間　猿　鹿　ごとひき　毒虫　羊　鳩　しも烏

伊勢のようらの松の木の下で　十になる子がやゝ生みかけて　生みもようせず　おろしもようせず　向ふ通るはお醫者さんでないか　お醫者さんなら一寸待ちなされ　醫者でござらぬ藥箱持たぬ　山で十藥川原でよもぎ　それを煎じてのましやんせ

一から十まで申すなら　お宮さんで舞ふのいちといふ　仲せのものは荷(二)といふ　やゝ子生むのは產(三)といふ　その子にさすのはし(四)といふ　白石黑石碁(五)といふ　武家の知行は祿(六)といふ　貧乏人のやりくりや質(七)といふ　刺されて痛いのは蜂(八)といふ　三度の朝夕食(九)といふ　火箸火にして水につけたらジュ(十)といふ　(海)

一かけ二かけて三かけて　四かけ五かけて橋かけて　橋のらんかんに腰かけて　はるかに向ふを眺むれば　十七八の娘さん　片手に花持ち線香持ち　娘さん何處へときいたなら　私は九州鹿兒島の西鄕隆盛の娘です　明治十年の戰ひに　打たれた父のお墓へと　南無阿彌陀佛目に涙　もうしや此の子が男なら　士官學校を卒業させ　西鄕隆盛の後をつぎ　立派な戰死いたしませう　(海)

いちゞく　にんじん　さんしよう　しひたけ　ごんぼ　むかご　七草　やつがしら　くねんぼ　とんがらし　(那)

一ちよ〳〵一ちよ　二ちよ〳〵一ちよ二ちよ　三ちよ〳〵一ちよ二ちよ三ちよ　四ちよ……　(日)

一丁　二丁　三丁　四丁　五丁　六丁　七丁　八丁　九丁　十丁　(海)

一ちよの踊子一ちよ　二ちよの踊子一ちよ二ちよ　三ちよの踊子一ちよ二ちよ三ちよ……　十ちよの踊子一ちよ二ちよ……十ちよ　(那)

一で戰が始まつた　二で日本の兵隊が　三で探して　四で知れて　五でごろ〳〵大砲が　六でロシヤの兵隊さん　七つ泣く〳〵逃げてゆく　八つ山の上の白旗が　九つ此處らで降參しよう　十でとう〳〵負けました　(伊)

一で芋とり二で逃げて　三で探して四で知れて　五でこうばんしよに云ひつけて　六で牢屋にゆき七で火あぶり　八ではりつけ九で首くゝり　十でとう〳〵をさまつた

一番最初は宇都宮　二は日光の東照宮　三は讃岐の金比羅さん　四は又信濃の善光寺　五つ出雲の大社　六つむろ〳〵金次郎　七つ名高い大佛殿　九つ高野の弘法大師　十は所の氏神さん　此程信心したなれば　浪ちやん病氣はなほるだらう　武雄は戰にゆく時に　浪ちやん白いハンケチを　打ち振りながら「ねあなた」　早く歸つて頂戴な　ごう〳〵と鳴る汽車は　武雄も浪子の別れ汽車　啼いて血をはく時鳥　啼いて血をはく時鳥　(那)

家の裏家の赤猫は　ぢよい〳〵剃つて髮結うて　白粉つけて紅つけて　紅が足らんと買ひにゆくかひ〳〵橋を渡る時　上から蔦にはさまれて　下から蟹にはさまれて　こらへてよう　私は十五日になつたなら　あの山こえて宮建てゝ　宮のまはりへ木を植ゑて　木のぐるりへ鈴つけて　ちやりんころりん待つてませう　夜に吹く風は大津に聞えて　小豆三升に米三升　はかつて六升ひいらひこ　おき上り小法師ま一つくりかへらんせ　(海)

いも　人蔘　山椒　しそ　ごんぼ　ろうそく　なゝくさ　はつか　栗　重箱　（海）

一列談判破裂して日露戰爭始まつた　さつさと逃げたはロシヤの兵士　死んでもつくすは日本の兵士　五萬の兵を引きつれて　六人殘して皆殺し　七月八日の戰に　ハルピン迄も攻め入つた　クロパトキンの首をとり　東鄕大將萬々歳

（海）

後の背お馬の背　おほさかおさかでとやすやれぞ　やすやまよせのおはぐろホイ　幾らです　ごーやんです　もうちとまからんか　まからんかホイ　あなたのことならまけとくに　アー一　アー二　アー三　アー四　アー五　アー六　アー七　アー八　アー九　アー十　天王寺のお猿さん　赤いおべべが大好きで　テテシヤン　テテシヤン　昨夜貰うた小鯛の吸ひ物を　一杯おすすりまアしよかね　二杯おすすりまアしよかね　一杯　二杯　三杯目に　お腹をたててはてな　はてないはて〳〵はてない　丁度一回すみました

（日）

内の裏の柿の木に雀三匹とまつて　一羽の雀の云ふことにや　夜んべ來た嫁さんが　結構な座敷に坐つて何を悲して泣いてゐる　衿も裾もようつけん　そんな嫁ならいんでこい　お倉の道まで送つて　お倉の道で日が暮れて　向ふちよい〳〵火がみえまする　あれは大阪のあんごでないか　とうごう一くわんかしました

（伊、那、海）

馬に乘ろとて馬から落ちて　竹のしよぐしで手の腹ついて　醫者にかゝろか眼醫者にかゝろか　醫者も眼醫者も大きに御苦勞　御苦勞ながらもあの山こえて　碁石を拾うて砂でみがいて高野へあげて　高野の姉さん帶買うておくれ　帶に短し襷に長し　今度七月腹帶を腹帶を

うみ〳〵ゐ手鞠　うみ手鞠　何でも一つはうみ手鞠　うみ〳〵ゐ手鞠　うみ手鞠　何でも二つはうみ手鞠……（十に至る）

えゝ　だいみよう　すゐみよう　波に風にちいくしげな子供衆等　蓑來て笠着て通るところは　ほんや〳〵と招く鈴はがあら〳〵　橋の下の菖蒲　誰植ゑた菖蒲　凉八佐助ごん　それなら一株　二株　三株　四株　五株　六株　七株　八株　九株　十株　とんやの内儀は四つ子を生んで一人の子は紺屋へやつて　紺べゝ着せて紺帶卷かいて紺足袋はかいて　こん〳〵こんよ　ま一人の子は茶屋へやつて　茶べゝ着せて茶帶卷かいて茶足袋はかいて　ちやあ〳〵ちやあよ　まあ一人の子はくづし屋へやつて　くづしに卷かれて　ふぎやふぎやふぎやよ　ま一人の子は紙屋へやつて　紙半帖もろていろはをかいて　たちつてくわへて　こけこつこうの一廻り

（日）

おうちよおさまのもんがん見れば　去年も見たし今年も見たし　また來年は孔雀の鳥で　とんであがりて孔雀を見ればよいか〳〵と三人連で　一でよいのは糸屋の娘　二でよいのはにのやの娘　三でよいのは酒屋の娘　酒屋酒屋と繁昌でござる　絞り縮緬たすきにかけてひと幅帶をきりりと卷いて　本町うらをちやら〳〵歩く　まねてまねても今日は寄らぬ　戻りによるさか何々おくれ　赤い手拭いろはと書いて　いろはをぼかして牡丹と書いて　牡丹芍藥百合の花　百合の花

おゝはづかしや　こうはづかしや　この子をうんで何きせましよに　ビロードきしよか　ドンス着しよか　ビロードいやよ　ドンスいやよ　旦那さんに貰うた浴衣をきせて　宮參りさせて　宮のちよほさんに何で一つたもれ　か一つたもれ　（東）

沖通る船は　金襴緞子の帆を卷いて　いつも十月ゐのこ　おめでたいゐのこ　一い一いの一廻り

おつかもおもんも　おくはれー　おしんきおー　てらおいつき　おいざれば　おすつて一廻り

おつかしおもんも食はずの糝粉（シンコ）　御手でつき足でつき　すつとん一廻り

お月樣お月樣今度のべゝは　裏は桃色表は鹿の子　揃へて鷺やく〳〵たまぐ〳〵都へ上ろとて　梅の小枝へ書寢して　書寢の夢に何とみた　梶原源藏來ると見たよう來るとみた　すつとことんの一廻り

おつしなしな〳〵白木屋の　お駒さんさいごさん　店にも十八色男　煙草の煙もおとはつちやん

ひいや　ふ　みいや　四（ヨー）　五つ　六　七　八　九　十　十からお出たお芋屋さん　お芋は一貫なんぼする　十二文でござりまする　ちとたかい　おまからんか　あなたの事ならまけとくえ　白ねこ赤ねこへ　私とお前とかけおちしよ　ごこまで　（以下不詳）　（海）

おねんごの尻まくり　落したらまくられる　落さんよに　しつかりしよと受けなされ

大原さんのお召物は何であります　見せて頂戴　はやかの錦か一樂織か　當世流行の黄八丈か　帶は福珍からんけいか　薔薇の簪ちよいと挿しまして　今日は菊見に參ります　おしちうさんのべに方見れば　今日のねんだつ又來年は　くやくやくのとうり一段上つて二段上つて　熊野の城は高い城でよいとこよいとこ東を見れば三人來居る　一でよいのは糸屋の娘　二でよいのは二の屋の娘　三でよいのは酒屋の娘　酒屋の娘は伊達者でごんす　絞り縮緬　たすきとかけて　赤い手拭いろはと書いて　いろはは消して牡丹とつけて　牡丹芍藥百合の花

おひゝの閑壽寺さん御出たか　上りよし　御茶もぽんぽこ沸いてある　御風呂もしやんしやん沸いてある　餅もちやんと搗いてあり　御砂糖もたんと買うてあり　御前樣に上よとて一廻り

おまんぢよろこまんぢよろ　朝はとうから起きさんせ　おかんすみがいてお茶入れて　よんべよんだ花嫁は金襴緞子の帶くける　さうぢやないものこうぢやもの　それから花嫁は泣き出して　何が辛うて泣きさんす　わたしの弟の千松は　五つや六つで金掘りに　一年待つてもまだ見えず　二年待つてもまだ見えず　三年目の三太郎は　夜の夜中に狀がきた　おまんをことわる狀ぢやいな　おまんはなか〳〵やられまい　一の丸こよか二の丸こよか　三の丸さきのおりひめさまは　けんちやとおちやらと　今朝ゆた結と　ぱらりとおみあげまたゆるぐし　櫛や笄小道具

お宮の提灯賑やかな　賑やか揃へて酒屋町　酒屋のおばさん豆杓子　杓子かたげて天覗く

お宮の山から風吹く　鐵砲針金囃して本家は千鳥　朝顔の花は咲くか咲かぬか今咲き候　お梅に小

梅魚釣りに行つて　大きな魚を釣り上げて　子に喰はして嫁とつて　嫁は十三　子は七つ
かい〳〵てまり　かいてまり　上手にかいたら女でせう　サア一緒に　二つしよに　三つしよ
川口の子供等花摘みにゆこら　一本とつて腰にさし　二本とつて手に持ち　三本目に日が暮れて
叔父の家に泊らうか　伯母の家に泊らうか　伯母の家は虱の巣　叔父の家は蚤の巣　蚤の巣に泊つ
て　朝起きて向を見れば　猿が三疋飛んでゐる　先の猿は物知らず　後の猿も物知らず　眞中の猿
は物知り居つて　鯰川へ飛びこんで手で取りや可愛し　足でとりや可愛し　口で喞へて引出して
鯰一匹抑へて燈芯でくゝつて線香で荷うて堂の前へ持つて行て　ぎし〳〵切つて　ぐつ〳〵と焚い
てお爺とお婆と一杯づゝすゝつて嫁の分たらぬ　嫁々泣くな　お粥もあるし　御飯もあるし　それ
食て水汲みに行け　山へつゞろ置いて來て　我行きやこはし　太郎次郎雇や賃がいる
今日は日もよし天氣よし　あの一里山あの庚申山　熊野で一番お菊さん　お菊しまのへ嫁にいて
箪笥長持百七つ　赤い小袖も百七つ　其他もめんの着物數知れず　教へて欲しけりや教へたろ　朝
はとうから早起きて　四十四枚の戸あけて　四十四枚の障子しめて　ちやん〳〵茶釜へ茶を入れて
こん〳〵小釜へ米入れて　お父さん起きよしお茶沸いた　お母さんおきよしお茶沸いた　七つのお
孝の云ふことにァ　お菊わかした茶にきらひ　それからお菊は腹たつて　雪駄片手に下駄片手　財
布ももたずに逃げてゆく　ひと山越えても内ァ見えず　ふた山越えても内ァ見えず　みィ山越えた
ら内ァ見えて門番門番あけてくれ　名を云うたらあけてやろ　名はお菊と申します　お菊ならこそ
あけてやろ　赤土ふまへたことはなし　お菊の心は今こゝぢや　今こゝぢや
きよん〳〵京橋詰の　紅屋のお母さん染物は　あつてものうてもよう染まる　蜻蛉に水引水車　水
はないとてお江戸へいて　お江戸の長橋腰かけて　子供しさん〳〵　こゞは何と云ふところ　こゝ
は信濃の善光寺　善光寺樣へ願かけて　梅と櫻をあげませうか　梅はすいとて戻されて　櫻はよい
こて褒められて　桃栗三年柿八年　柚は九年の花盛り
きよん〳〵京橋ねん〳〵中橋　明日は十六日大振袖よ　お化粧なされよ厚化粧なされ　餘り濃いの
も人目にかゝる　奥の障子を薄目に開けたら　白粉チラ〳〵　鐵漿だら〳〵万才万才　さいのーの
お猿さんは　赤いおべべが大層お好きで　父ちやん　父ちやん　向への惠比須講へよばれて參つた
ら　大鯛の吸物　小鯛の照燒き　一杯吸ひませうか　二杯吸ひませうか　三杯目になでしの權兵衛
さん　お肴ないとてお腹を立てゝ　はてな〳〵千そう千萬そう一かんしよ　あゝばゝよ
きよん〳〵京橋橋詰の　紅屋のお母ちやん染物は　いつでも見事によう染まる　蜻蛉に水引き水車
あんご車に風車　雀に小間物こまがへし　此處から信濃へ行て見たら　お江戸長崎腰かけて　申し
〳〵子供衆等　此處は何といふところ　此處は信濃の善光寺　善光寺さんへ願かけて　梅と櫻とあ
けまして　梅はすいとて戻されて　櫻はよいとほめられて　桃李三年柿八年　柚は九年の花盛り
孝行村の中村の　中村名主の一ちよ娘　年は十八名はお仙　お仙の友達四十九人　四十九人の友達

は　今朝の寒さに奥山へ　一分の煙草に二の煙　三の煙草に火をつけて　それをお仙に差出せば
お仙はそれを受けとつて　女ながらにのみました　（伊、那）

孝行村の中村の　中村名主の一丁娘　年は十六名はお仙　お仙の友達四十九人　四十九人の友達は
今朝の寒さに奥山へ　佛の信心菊の花　毎日毎日熱心よ

此處から鐘卷き十八丁　六十二段のきざはしを　上りつめたら仁王さん　右に三階東寺の塔を　左
に青銅（カラカネ）手水鉢　裏へまはれば一寸八分の觀音さん　トン〳〵お寺の道成寺　釣鐘落して身をかくし
安珍清姫蛇に化けて　七廻（ナナヤ）にまかれて一廻り　（日）

去年（コノ）の月見にあひ初め見初め　主に心は有馬山　否とも云はぬ心と心　だがあはす鏡山　ちらり姿
は三笠の山に　いでし月より君が顔　見たい〳〵は思の種と　末ぢやうき身の三寶山に　月の名殘
りに山々あつめ　卯月八日のその八日を　手向草とはなればなれ　（海）

今年初めて花見に行つたら　寺の和尚さんに抱きしめられて　そがいさんすな帶切れまする　帶が
切れたら結びになるよ　緣の切れたのは結ばれぬ　（日）

サ芋サ芋人蓼さ人蓼〳〵　ササンショ　ササンショ〳〵　サンヒタケ〳〵　サゴンボサゴンボ　サ
ドングリ〳〵　サヒジキ〳〵　サクモ〳〵〳〵　サトンボ〳〵〳〵

正月門松　二月初午　三月御雛樣　四月祭禮　五月がお節句　六月天王　七月七夕　八月八朔　九
月が御鎭守　十月惠比須講

せせせ十になる子はややうみかけて　生みもようせぬおろしもようせぬ　なんぞ醫者樣藥はないか
くすり〳〵ある〳〵お池の鮒を　切つて刻んで煎じて飲ませ　腹にある子はオギャア〳〵泣いて
母さん父さん南無阿彌陀佛　大阪れつぽんすかれつぽん　あみ笠かついですつてんとん　（海）

大事の大事のお手鞠さんを　紅（モミ）の袱紗でお包み申し　紙捻（コヨリ）で締めて　御手の上から御手の下までお
花樣にお渡し申しませう

たま〳〵都へまゐらんかい　たま〳〵都で晝寢して　晝寢のお夢に何と見た　烏三匹おとまつて
一羽の烏の云ふことに　此の家は狹いと云ふけれど　疊三枚莫蓙三枚　合して六枚敷きつめて　私
の弟の千松は　七つ八つから金山へ　金を掘るやら死んだやら　一年待つても便が來ぬ　二年待つ
ても狀が來ぬ　三年目の六月の夜の夜中に狀が來て　表書下書よんでみりや　千松死んだと書いて
あるそれからお菊は腹たちて　背戸の泉水へ身を投げて　蟹にぐん腹抓られて　こらへておくれよ
櫓兵衛さん　私は十五になつたなら　この屋くづして宮建てゝ　宮のぐるりへ松植ゑて　松のぐる
りへ笹植ゑて　笹のぐるりへ糸引いて　糸のぐるりへ鈴つけて　ちんがらもんがら舞まうて見しよ
つかもも　お食はれぬ糝粉　お手でついたりお足でついたり　すつぽん一廻り

つかも　もんも何食はしよ　お糝粉　お手でつこ　すつほんからりとその上一廻り　（日）

釣瓶の下の織姫さんは今朝結うた髪を　ちらりやぱらりと遊ぼと思て　門まで出たらお妾さんに抱きしめられて大恥しや大恥しや　此の子を産んで何着しよに　天鵞絨もいや緞子もいや　それがいやなら碁盤の浴衣買うて着せて守に抱かせて宮參りさして　宮のちよぼさんに之一つたもれ

でば〳〵〳〵泉さん和泉で一番六兵衞さん　六兵衞の妹はお菊さん　お菊は山本木の家に　貰はれてゆくか行かぬか問うてみよ　行くというたら拵へに　赤い小袖を七重ね　紺の小袖も七重ね下駄や雪駄は十五足　これだけ大層にあげるから　戻つて來よすなお菊さん　戻つて來る氣はないけれど　向ふのお爺さんお婆さんの氣が知れぬ　氣が知られねば教へたげら　朝は殿より早よ起きて四十四枚の障子しめて　裏へ廻つて手水つかうて　赤い手拭（テンテ）で手ふいて　白い手拭で顔ふいて黑い手拭で足ふいてちやんちやん茶釜へ茶々（チヤ）入れて　一くべたいてもまだ沸かぬ　二くべたいてもまだ茶々沸かぬ　三くべ目にもう茶々沸いた　お爺さんお婆さんもう起きなさい　七つになる子も起きなさい　七つになる子の云ふことに　お菊たいた茶々いらぬ　お母さんたいた茶々欲しい　それからお菊は腹立てゝもう歸りませう　一山越えてもまだ家見えぬ　二山越えてもまだ内見えぬ三山目にもう内見えた　門番門番あけてくれ　名を云ふたら明けたぐら　名はお菊と申します　お菊が來ると知つたなら　馬やかごでもむかふもの

手鞠と手鞠と行き逢ふて　わがら奉公しようではないか　何奉公チヤン〳〵袋へお茶入れてお寺の

緣の下へ腰かけて　そこら汚すな血でないか　血でごんせん紅ぢやもの　紅とつて何にする　嫁にしよ　嫁にして何着せよ　赤い小袖でも百七つ　黃色の小袖も百七つ　昨夜（ユウベ）織つた糸縞を　それを着せて上の門へすわらせて　ほろりやほろりと泣きやんす　何が辛うて泣きやんす　わしの弟の千松は　五つや六つで金掘りに　一年待つてもまだ見えず　二年待つてもまだ見えず　三年見つけた不成日　高山（あの山）越えて堂建つて　堂のめぐらへ鷹すゑてその鷹とんだら弓や鐵砲でやつしの

（西）

てん〳〵とん〳〵てとんと餅搗く糸櫻　助さん小間物賣らんすか　私は此の頃出世して　お金持になりました

てんとてんまりてんてまり　安珍清姫蛇に化けて　五十三段のきざはしを　てんとてんまり天王寺藪のなほかのおきづくし　おこそ行きごは何處ちやいな　新町本町酒屋町　酒屋三軒源三郎　源三さんの女房はよい女房　朝は早よから起きなうて　二階に上つて髪といて　髪とかたてにおかたり　七つになる子も起きなされ　夕べ三羽雀がおとまりて　一羽の雀が云ふことにや　疊三枚ござて　合せて六枚しきつめて　ほろり〳〵と泣きやんす　何が悲して泣きやんす　衿と裄と裁ち違ごて　そんな嫁ならいんでくれ　いぬないぬけご道知らん　田圃まで送りたい　下からつゝかれ上からはそまれ　まづ〳〵一貫しました

（日）

とうとんお寺は道成寺　釣鐘（ツリガネ）落して身をかくし　安珍清姫蛇に化けて　すつてんころりと一ま

はり

とうせとめ五ろさ　水仙の花盛り　又出してすいこんだ一まはり　（日）

ドドドミレンコンミソラツキヨ　ナラヅケアサヅケミツワヅケ　ヤオヤノバントサンガカゴサゲテ　（海）

ヂヨウチウブラ〳〵ユリアルク　（那）

甲「とめ十で行つてこい」

乙「とめ十でよう來たな」

甲「とめ二十で行つてこい」

乙「とめ二十でよう來たな」

甲「〃〃三十……」

乙「〃〃三十……」

百に至る　（那、東）

とめ十で渡しませう　十でよう來たな　とめ二十で渡しませう　二十でよう來たな　とめ三十で渡しませう　三十で——……

とんとお寺の道成寺　鈎鐘落して身をかくし　安珍清姫蛇に化けて　てんと〳〵天王寺の藪の中に　おきくづし　父御に離れて奉公する　奉公の行き處は何處ぢやいな　新町本町酒屋町　酒三軒源三郎　源三さんの女房はよい女房　朝は早よから起きなろて　二階へ上つて髪をとく　髪とく片手でお茶たいて　爺さん婆さん起きなさい　七つになる子も起きなさい　此方の裏屋のチシャの木に雀が三羽とまつて一羽の雀の云ふことにや　疊三枚莫蓙三枚合せて六枚しきつめて　奥の上間に坐らせて　金襴緞子を縫はすれば　ちらりばろりと泣きやんす　何が悲しゆて泣きやんす　何も悲しゆうはないけれど　衿と裄と裁ち違ごて　そんな嫁ならいんでくれ　往ぬな往ぬけご道知らん　とんぼの道まで送らして　下から蟹にはさまれて　上から蜻蛉につゝかれて　あひたい　こひたい小梅さん　（日）

とん〳〵車へ十のせて　十の所へ二十のせて二十の所へ三十のせて　三十の所へ四十のせて　四十の所へ五十のせてんまる

とん〳〵叩くは誰やさん　千まつ米やの治平さん　今頃何しにお出でたか　紫はな緒の上雪駄　忘れて取りに來たわいな

とん〳〵叩くは誰やさん　新町酒屋の武平さんや　武平さん今頃何しんに　雪駄かはつてかへに來た　ごんな雪駄でござんすか　紫鼻緒の上雪駄　そんな雪駄はござんせん　有つても無うてもかへに來た　（日）

とん〳〵〳〵　もし〳〵もうし　ややさまおんまれなしたといふうちは　もしやこちらでござらんせ　（那）

とん〳〵〳〵　わたしは天のお使ひの　おつげをきいて此方まで　まつかに出ました羊かひ　（那）

なーん〳〵なんせんほ　なーやの重箱挾箱もち投げ提灯賑やかな　賑やか揃うて酒屋店　酒屋のをばさん豆杓子　杓子かたげて天覗く　桃栗三年柿八年　柚は九年の花盛り花盛り　父は餅つく母（カカ）は飯たく　酒の肴に　目刺を買うてきて　やいておいといたら　猫にひかれて　猫を追ふとて　石に蹴つまづいて　すつぽんぽうんぽうんよ　（熊）

なん〳〵なんせんぽう　なゝ屋の重箱挾箱　もちなげ提灯賑やかに　賑やかに揃へて酒屋店　酒屋の小母さん豆杓子　杓子かたげて天覗く　桃栗三年柿八年　柚は九年のなり始め　とゝやま餅搗けかゝやま餅搗け　うるめ買うて來て　燒いて焦して棚へおいといたら　猫が引かけ　猫を追ふとて闘で蹴つまづいてすつとんとん　とゝは德利　かゝはかんなべ　置いた丁稚は銚子なべ　（日）

ねば〳〵おねばと　泉でないか　泉で一番お菊となりて　お菊きのやに貰はれて　赤い箪笥は十二棹よ　白い箪笥は十二棹よ　針さし七つに針七つ　櫛筥七つに櫛七つ　それ程持つて行くからに戻つてきますなお菊さん　戻つて來る氣はないけれど　私の夫の顔知らん　顔を知らねば見せてやる　裏へ廻つて顔洗ろて　赤い手拭（テンテ）で手をふいて　白い手拭（テンテ）で顔ふいて　釜を磨いてお茶沸かし一くべたいてもまだ沸かん　二くべたいてもまだ沸かん　三くべたいてもうわいた　お父さんお母さん起きなされ　七つになる子も起きなさい　七つになる子の云ふことに・お菊のたいたお茶きらひ　そつからお菊は腹立てゝ　はだしで裸でこんでいて　一山越えても山見えず　二山越えても山見えず　三山越えて山門見えて　門番々々あけてくれ　夜の夜中にようあけん　裏へまはつて　あか土云つで子をうんだ　（海）

一つでお這ひなされて　二つでお立ちなされて　三つでは水を汲みそめ　四つで用をきゝそめ　五つでは糸をとりそめ　六つではその管まきそめ　七つでは錦織りそめ　八つでは金襴織りそめ　九つで戀をしそめ　十で殿さと寢そめた　十一で玉の樣なるお子をもうけて　世話のない樣にすうとんて　すうとんて　とゝは德利　かゝはかんなべ　置いた丁稚は銚子なべ

一つの心に二つの枕　三つのふとんに四つの袖　五つも六つまじ七かさず　八かさず九らう知らずにそへ十（トヽ）げた

ひとめ　ふため　みあかし　よめご　いつやのむさと　なゝやの　やくし　こゝのにや　とをよ　（西）

一つひとへのお熊さん　眞實心貞は誰人（ダイド）さんのう誰人さん　二つとや二つてんまり前でつく　品よくつかんせお熊さん　三つとや美事に合した此の茶碗　一つ落して口惜しいや　四つとや　夜の夜中にのり込んで朝の戻がつらごんす　のうつろごんす　五つとや　いつも長さんつるぎもの　長さんようする邪魔をする　六つとや　昔むしようの親爺奴が　夜前の御相伴よく出來た　七つとや何も案ずることはない　お熊一人はつれてやる　のう連れてやる　八つとや屋敷廣めて家建てゝ

誰人さんとお熊さんと住ひする　九つとや此々で出逢はうか何處で逢はう　極樂淨土の門で逢はう
十とや徳利さげて酒買ひに　あれは誰人さんとお熊さんの祝言酒　のう祝言酒

ひにふにみよの姉さん　蜜柑買ゥてきて棚へあげといて　棚はたんぼの助市さまよ　助の土産に何々貰ろた　一に香箱二に白粉箱　三にさし櫛忍びの枕　かてゝ一番帷子　片裾は梅の折枝　中は御前のそれ橋　姉より妹は手ききて　一つでは乳をのみそめ　二つで乳房にはなれて　三つでは糸をとりそめ　四つで細管まきそめ　六つでは職に出そめ　七つでは錦織りそめ　八つで金襴織りそめ　九つで嫁にもらはれ　十で殿御の氣に入り　十一で花の樣なる　息子をもうけてよろこぶ　十二ではその子におかれて　十三で熊野へ戻りて　熊野のちよろ〳〵川を渡るときに　おほづの山から水出るずい〳〵まひとつかへせば　すつとんとん

日出てふうでて　三日月　夜にでゝいつきた　椋鳥何いふ　山雀　ここへきてとまれ

一二お宮の山から池田がみえる　あいもぽんぽん太鼓もぽん〳〵　此の鼓は京で一番　大阪で二番　江戸で三番　吉野で四番　四番五番と一寸百ついた

一二三吉　馬に乘ろとて馬からぐけて　竹のちよがりで手の腹ついて　醫者にかゝろか　目醫者にかゝろか　醫者も眼醫者も御無用になされ　七日七夜次の中で　碁石を拾うて紙へつゝんで袂へ入れて　袂下からお安さんに上げて　お安心は帶買ておくれ　帶に短したすきに長し　今度七月腹帶を腹帶を

一二の姉さん　お殿がないとておなぶりなされる　殿は丹波の助市さんよ　助の土産に何々貰た櫛に簪　紅白粉箱　三に挿櫛しのびの枕あげて　七ばん繻子の帶

ひーふの姉さんおとなのはないとて　おたづねなさんな　こゝはたんぽの助一さまで　助の土産になに〳〵もろた　一に鏡箱二に白粉箱　三にさしぐしのみの枕上げて　一ばんかたびら肩すそは梅の折枝

一　二　三つ　なゝやことんで　一　二　三　ななやこ十　一　二　三つ　ななやこさんだいしよ　おいとつ　おふたつとんで　おひとつおふたつとんで　おひとつおふたつ二十　おひとつおふたつさんだいしよ　すいせんとんで　すいせん二十　すいせん　さんだいしよ　一ちよかけ　二ちよかけさんだいしよ　一たい　二たいさんだいしよ　すがもうもうあはずに　しんぎくお手ふつて　おいごふつて　すつぽんぽーん　やれこれ一かん　（海）

一二の姐さん御殿がないとて　おなぶりなさる　殿は舟津の助市さんよ　助の土産に何貰ろた　櫛に笄紅白粉箱　三に挿櫛忍びの枕　あげて七ばん繻子の帶　（海）

一二の宮の山から池田がみゆる　賽の河川のやまない〳〵足にはいたる紅梅雪駄　はくな汚すな
お母さんに見せよう　この鼓は京で一番　大阪で二番　御坊で三番　吉野で四番　四番五番と一寸

ひーふーの三吉馬から落ちて　醫者にかゝろか目醫者にかゝろか　醫者も目醫者もだめでござる
七日七夜（ナナヨ）さ茨の中で　碁石をひろて　すつて磨いてお金になほし　お金ないしよで帶買うてもろて
帶に短したすきに長し　こんご子孕んだら帶腹に　腹帶に　（日）

一二（ヒーフー）宮の山から風吹く鐵砲はつほう　針屋の話　ほんけは白し　朝顏は咲かぬか　咲き候　同じ盲
人杖ついて通る　そこ一寸よのけ　よのくことならぬ　すつてん一廻り　（日）

一二三四　お宮の山から池田が見えるお母さんに買うてもろた　紅梅雪駄　はくな〳〵　汚すな
〳〵　京で一番　大阪で二番　江戸で三番　吉原で四番　（日）

一二三四五お山の景色は春と眺めて　梅に鶯ほうろほけきよと囀つた　囀つたら明日は　北野の一
軒女郎やの琴三味線　はやしてんてん手鞠つく　手鞠ついたら正月や　や小正月や　それ正月や
（日）

へーざえもんすいもん　波も風も荒いのに　ちつこの子の子供衆は杖をついてはしらかす　それは
さつとなんきましよ　そりや一千ついた
べた〳〵〳〵と泉でないか　泉で一番オキクでないか　オキクきねやへ貰はれて　塗つた簞笥を十
二竿　塗らん簞笥も十竿　針さし七つに針七つ　櫛箱七つに櫛七つ　それだけ持つてゆくからに
もぎつてきよすなオキクサン　もぎつて來る氣はないけれど　向ふの殿御の顏知らぬ　顏を知らね
ば教へてやろ　晩に殿よりおそくねて　朝は殿より早く起きて　裏へ廻つて顏洗ふつて　赤い手拭（テンテ）
で手ふいて　白い手拭で顏ふいて　かんす磨いてちやうちやわかし　一くべたいてもまだ沸かん
二くべたいてもまだわかん　三くべたいたらちや〳〵わいて　わしの殿御も起きなされ　七つにな
る子も起きなされ　七つになる子の云ふことに　お菊沸かした茶々きらひ　それからお菊は腹立つ
て　はだしで裸でとんででて　一山越えても門見えず　二山越えても門見えず　三山越えたら門見
えた　お菜もぎると知つたなら　車の四ちよ五ちよむかひを
方丈お寺の道成寺　鈎鐘落して身をかくし　安珍清姫蛇に化けてんまり　一つしよ　二つしよ
向ひの恵比須へよばれていたら　鯛の燒きもん小判の吸物（モン）　一杯吸ひましよ　二杯吸ひましよ　三
杯目には魚がないとて　お腹をたてゝ　はてな〳〵はて〳〵はてな　一寸一貫かしました　（那）
向の小寺に誰居つた　八幡町のをと娘　あの子よい子ぢや器用な子ぢや　私に呉るれば絹の小袖十
二枚　それが嫌なら京で流行のをと帽子　ちろりばらりとかづかして　奥の上間に坐らして　金襴
緞子をぬはすれば　ちろりばらりと泣きやんす　私の弟の千松は　七つ八つから金山へ　金を掘る
やら死んだやら　一年待てども狀が來ず　二年待てども狀が來ず　三年目の師走に　伯父さんここ
から狀が來て　上書下書讀んでみりや　千松死んだと書いてある　父さん母さん泣きよすな　私が

十五になつたなら　あの山開いて宮建てゝ　宮のぐるりに松植ゑて　松のぐるりに鈴つけて　鈴のぐるりに鷹とめて　鈴はじやんじやん太鼓はぽん〳〵　南無阿彌陀佛と手を合す

むかひ婆さん縁から見れば　聞え牡丹か　手鞠の花か　手鞠ようきけあがれと仰しやる　（日）

向へ通るは城下様　あれは名古屋の一帳羅娘　わしの妹にくれないか　くれたら雪駄を買うてはかしよ　親に千貫子に五貫　せめておばさん四十五貫　四十や五貫の錢持つて　お出で〳〵都まで都土産に何貰ろた　簞笥長持帶もろた　帶を貰ろたて　くけてない　くけておくれ　級型見れば去年も見たし今年も見たし　又來年は孔雀のとりがとんで廻つて熊野に下りて　三段上りて南を見ればよい子よい子と三人ござる　一でよいのは糸屋の娘　二でよいのは口屋の娘　三でよいのは酒屋の娘　酒屋なんとはづかしないか　大縮緬のたすきをかけて大巾帶をきりりとしめてまねごも〳〵今日はよろし　赤いてんてにいろはと書いて　いろは消してぽたんと書いて　ぽたんとしやくやく百合の花　百合の花　（東）

村の長兵衛さん　ごちお越す　お菊女郎の帶買ひに　巾も廣けりや地も良かろ　所々紋おいて　結ぶところへ房つけて　晩にねるのがごち枕　東枕の窓の下　窓の下　（伊）

藪の中のつく〳〵坊　親に離れて奉公する　奉公する町何處の町大阪新町酒屋町　酒屋の女房はよい女房　朝の疾から起きなろて　炬燵へあたつて晝寢して　晝寢のお夢に何とみた　此處の背戸とチシヤ島　雀三匹とまつて　一羽の雀のいふことにや　筵三枚莫蓙三枚　合せて六枚しきつめたお花の一廻り　水仙山茶花　お花の一廻り

ゆふべ貰つた花嫁さん　立派な座敷へ坐らして　そんな嫁ならいんで來い　たんぼのきしまで送りませう　いやおとろしやョー　（那）

吉原田圃の中まで　一寸曲つてお稲荷さん　一錢あげて拜みませう　拜んだことろはおんさがらうおけこのけのあなおちやわん　けつたいかして　エッサッサ　向ふ恵比須講へ呼ばれていたら　鯛の燒物小判の吸物　わたしも柳で一バイ吸ひませうかね　二杯吸ひませうかね　三……（十まで）

よんべ生れた松のあんは　さし下駄はいて杖ついて　十露盤橋を渡るとて　下から蟹にはさまれて上から鳶につゝかれて　あいたいこいたい權べさん　こらへてよう〳〵　私が十五になつたならあの山開いて宮建てゝ　宮のぐるりに松植ゑて　松の小枝に鈴つけて　チリリン　カラリン　まうてんしよ　（那）

吾家の裏の柿の木に　雀が三匹とまつて　前の雀も物云はず　後の雀も物云はず　中の雀の云ふことにや　私のお宿でとまらんか　私のお宿はせまいけど　疊三枚　莫蓙三枚　合して六枚屏風引きたてゝ　昨夜呼んだる花嫁を　今朝の座敷にすわらせて　金襴緞子を脱すれば　ほゝり〳〵と泣き

やんす　何が不足で泣きやんす　何も不足はないけれど　私の弟の千松　御七つ八つの子　鑛山へ
金がないやら死んだやら　一年たつてもまだ見えず　二年たつてもまだ見えず　三年の三月の夜中
に　秋が來て　秋の裏書よんだなら　千松死んだと書いてある〳〵　澁田名所は藥師の瀧よ　上に
桝形　下には大師山に　かづらが舞下る　伊勢の津の津のつのん堂の緣で　七つ雀が子を產みかけ
てうむにやうまれず　おろそにやおりず　何ぞ醫者さん藥はないか　藥はある〳〵合してしんじよ
山の山椒と小池の鮒と　それを煎じてのませて見りやれ　腹の三つ子がォギァ〳〵ぬかす　（伊）

お手玉の唄

いつか　二か　三か　四か　玉上げ　皆ごり　かまぼこ　ひらひ　ふせ　汐くみ　水落ち　橋こえ
さはり　ごみとり　がまいれ　穴ぬけ　尻ごり　くくみ　ならし　ならず　つゝき　ひねり　まは
し　しりぬけ　壁ぬり　屋根ぶき　とん〳〵　かねつけ　白粉つけ　紅さし　びんつけぬり　はば
あ　きあげ　火打　一ちよ　二ちよ　三ちよ　四ちよ　五ちよ　六ちよ　みつだん　（西、東）

いつこまはさう　おういつこ　二個まはさう　おう二個……　（海）
いつこたゝこう　おういつこ　二個たゝこう　おう二個……　（海）

おうひと〳〵下しておさら　おうふたおうふた下しておさら　おうみい〳〵下しておさら　おうよ
をおさら　おてのちやんおてのちやんおろしておさら　おはさみおはさみおさら　おちりんこおち
りんこおさら　おまねきおまねきおさら　おいだ〳〵すつちやんことん　つまよせ中よせおさら
しほつけおさら　おでんむし〳〵むし〳〵おさら　おほしづおさら　おほむね〳〵かはかしておさ
ら　おーそで〳〵かはかしておさら　おたもと〳〵かはかしておさら　お手の先〳〵かはかしてお
さら　お手の平〳〵叩いておさら　大きい橋こえんしよおさら　低い山おいてませうおさら　高い
山おいてませうおさら　一つこちやんのお玉うけ　二こちやんのお玉うけ　三こちやんのお玉うけ
四こちやんお玉うけ　五こちやんのお玉うけ　六こちやんのお玉うけ　七こちやんのお玉うけ　八
こちやんのお玉うけ　九こちやんのお玉うけ　豆腐屋のお玉うけおさら　一かんしよ　二かんしよ
三かんしよ　四かんしよ　五かんしよ　六かんしよ　七かんしよ　八かんしよ　九かんしよ　十か
んしよおさら　お玉かくしおさらかばよ　ひい　ふう　みい　よを　いつ　六つ　七つ　八つ　九
つ　十う　おさら　米ちよんぎりおさら　（伊）

大阪〳〵でごん　いくらです　十五圓　貴女のことならまけさくに　一つ　二つ　三つ　四つ　五
つ……（數へて行く）　（東）

おさら　お一つおとしておさら　お二つ落しておさら　お三いおとしておさら　おひだりおひだり
お坐りとん　合しておさら　おさら　小さい山登れ　登しておさら　大きな川こえよ　小さい川こ

えよ　こぐらしておさら　しほづけ〳〵おさら　（海）

お一つお一つおとしてざゝり　お手上げお手上げおとしてざゝり　おてばさみおてばさみおとしてざゝり　おちりんこおちりんこおとしてざゝり　おひだりおひだりおあげて　おひだりひのはてざゝり　てーつけ〳〵正直ざゝり　おてんぶす〳〵おとしてざゝり　かぶ〳〵ひろうてざゝり　おばさん〳〵ひろうてざゝり　お袖おかけてざゝり　お袂おかけてざゝり　おはらおはらおかけてざゝり　大橋くゞり〳〵ざゝり　おまけも一しよ　おまけも二しよ　おまけも三しよ……　（東）

お一つ〳〵おとしておさら　おみなおようおとしておさら　おちりんこおとしておさら　しようさんからさんおさら　おしづゝみな　おひごりおとしておさら　おほむねかはかしておさら　おそでかはかしておさら　お手の平かはかしておさら　おつめさきつめきつていたいおさら　小い橋越えんしよおさら　大きな橋越えんしよおさら　小さい山登れよおさら　大きな山登れおさら　おいとつちやんおいもづけ　お二つちやんのおいもづけ　お三つちやんのおいもづけ　おとふやのないぎさん　かすくて金持さん　おさら〳〵〳〵　（海）

お一つお一つ落しておさら　おみな落しておさら　おのせ落しておさら　おちりこ〳〵落しておさら　ちよさんからさんおさら　おしづしづほい　でん〳〵むしむし〳〵おさらおひだりおすわりとん　おしむきかはかしておさら　お袖かはかしておさら　お手のひらかはかしておさら　お爪先爪きつて痛いおさら　小さい橋こえんしよおさら　大きな橋越えんしよおさら　小さい山のぼれおさら　大きな山のぼれおさら　一つこちやんのおいもの木　二こちやんのおいもの木　三こちやんのおいもの木　四こちやんのおいもの木　五こちやんのおいもの木　六こちやんのおいもの木　七こちやんのおいもの木　八こちやんのおいもの木　九こちやんのおいもの木　とふやのなぎさん　やすくもこよつさん　一つかんちよう　二かんちよう……十かんちようおさら　お玉かくし　（海）

お一（ヒト）お一おさら　お二（フタ）お二おさら　お三（ミー）お三おさら　お四（ヨー）お四おさら　お五（イツ）お五おさら　おみなおとしておさら　おちやんぎり〳〵おとしておさら　おはさみ〳〵おとしておさら　おちりんこ〳〵おとしておさら　お左〳〵おちりんことんおさら　しほづけおさら　しづまねしておさら　おでむし〳〵おむしおさら　おねじ〳〵おさら　小ちやい橋くゞれ〳〵おさら　おーむね〳〵おさら　おー一ちやんのおいもづけ　お二ちやんのおいもづけ　おみつちやんのおいもづけ　お四ちやんのおいもづけ　百（ヒヤコ）ちやんのおいもづけおさら　おあたまかへておさら　かけんぎかけん〳〵おさら　（那）

おひとつ落しておさら　おみなおさら　おさら　おしやてん落しておさら　おちりんこ落しておさら　おひらーりチャランコトン　仲よくつまよくおさら　でんでんむーしむしむし　おしづしづ〳〵とん〳〵　お胸落しておさら　お掌おとしておさら　お袂落しておさら　小さい橋くゞらんせ　大きい橋くゞらんせ　小さい山とんでゆけ　大きい山飛んでゆけ　おさら　おひとつちやんのお芋づけ　お二つちやんのお芋づけ　……　お十ちやんのお芋づけ　酒屋のをばさん粕食てきんときさん　（海）